

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

魔法少女リリカルなのはー1人の天才

### 【作者名】

ヌムラ

### 【あらすじ】

なのはの世界で色んな人に喧嘩を売る話です？

主人公は一応チート能力にあたるのかなあ？ 作者の考える近未

来っぽいテクノロジー使い放題の超天才です

科学と魔法が交差する時物語が始まるー的な感じで書いて行きたいです

一応無印編迄は話の構成が出来てるので、そこまでは何とか仕上げ  
て行くつもりです

## 魔法の無い世界

ーアイナ視点ー

暗い、真つ暗だ。時計の針は5時を指し示す

「く、くくひひひひ」

自分の口から壊れた笑いが飛び出すが気にしない。完徹6日目のテンションなんてこんなものだ。しかしあと少しあと少しなのだ。寝てる暇など有りはしない

「大丈夫ー大丈夫だぜー。私はまだまだ大丈夫だぜーーふへへええ!!」

自分でも女性がしていい笑方じゃないのは理解してる、あと大丈夫な訳ないのも。しかももう少しなのだ、本当にもう少しでアタシの悲願は達成させられる。

理論は完璧。設備も十全。素材も当時のまま新鮮そのもの、劣化なんてさせていない。

コンピュータでのシミュレーションを何度も何度も繰り返し、そしていまここにたどり着いた

今こそ、アタシは神になる!!

「……………ん、ん」

ゆっくりと目を開ける。整理整頓されたアタシの研究室

「あー、……………なんか懐かしい夢見たような気がするぜー」

夢の内容は覚えてない。しかし幸せな夢を見てた気がする

「つーわけでレツツ二度寝……………」

しよつとした瞬間、朝の日差しがアタシの肌を焼いた

「ぎいいやあああああああああいうえお!!」

アタシのメイドが窓を全開にしたからだ

「最後の何なんですか？ もう六時半ですよ。学校遅れますよ。」

呆れたように呟く少女。もといメイド

全力で溜息を尽きながら布団を引き剥がしてきやがった

「朝の日差しがアタシを焼くうううううう!! 溶ける!! 燃える

!! 死ぬ!!」

「溶けません、燃えませんが、死にません。もうご飯出来てるんですから早く起きてください」

「……………朝、日差しを浴びると死にたくならない?」

「私はなりません」

メイド。もいと藍はそう言いつつとわつとわつとアタシの研究室から出て行ってしまった

「……………ッレないぜ」

まあ、二度寝は諦めよう

一応は中学生のアタシだ義務教育くらいでないと後々困る事があるかもしてない

……………

少し考えて見たが、学歴がない事で困る事が考えつかなかった。きつとアタシの脳みそは腐ってるのだらう。多少の自覚はある

「早く来ないとロケットパンチ喰らわしますよ。二度寝してたらフライングボディプレス。学校行かずに研究続けるって言い出したら10マイルの高さからフランケンシュタイナーです」

「……………今行きます」

アタシに二度寝の選択肢はなくなった

「くああああああ……………」

とんでももなく大きなあくびが出る。学校に登校する時間って人生で一番無駄な時間だと思つ私は間違っているのだらうか

どうせ学校に行った所で自分より知識の少ない教師の授業を延々と半日も聴かされるだけなのだ

ならばいつそ家に引きこもって自分の研究を進めた方が有意義だと思つわけだ

「しかし無情に世界は回って行く……………。はあ、柏手」

パンツと拍手を一つ打つ。憂鬱な気分になった時や気持ちを切り替えたい時の私のスイッチの入れ替え方だ  
幾分かスッキリした気持ちになり、しかし学校ダリイなんて思っていること

「……………？ 何だアレ」

通学路を少し逸れた公園に、青く光る何かが落ちていた  
気になった物は全力で調べ尽くす  
数多くある座右の銘の1つを実行するためにアタシは公園へ足を踏み入れた

「宝石？ でもこれは……………」

青い、ひし形の宝石  
私はそれを手にして、何か言い知れない何かを感じた  
つまり、ワクワクしたって事だ  
私の直感は外れない。この宝石は何か特別な物だ。久しく現れなかった研究対象に心が踊る

「ちーて、面白〜ことになりそつだ」

拾った宝石を、特別製のポーチにいれる

そしてアタシは、意気揚々と歩き出した

## 月光の桜色

眠い

眠いのだ

と言っか寝ているのだ

窓際一番後ろの席をイカサマで射止め、ポカポカ陽気を浴びながら  
する昼寝は最高だと思います

「相坂……………貴様はいつも寝てるな」

その声をかけて来たのは数学の授業をしている東大卒とか自慢し  
てるゴリマツチヨ

いい加減にアタシに授業なんて受けさせるの諦めたらいいのに

……………

「そっはいかん、何度でも言っぞ。学校に來い、授業で寝るな」

……………何故だ

アタシは今寝てるはずだ。何故このゴリは私の考えがわかるんだ  
!!

「起きてるだろうっが……………」

「ん、どっせ夢の中でも思考なんて止まらないんだから寝ててもいい  
じゃない。リアル睡眠学習だぜ」

アタシは常に何かを考えてる。何も考えてないつもりでも夢の中  
でも、気がついたら数式や理論が勝手に再生されるのだ

ほら、音楽が頭で流れる事ってあるじゃない？ あんな感じ

私の死ぬまでに叶えたい夢のひとつは気絶である

今だにそんな機会一度もないけど

「全く……どうせテストでは現国と古典以外は満点を取るのだから文句は無いがな。せめて授業中は起きて学んでるふりでもしてろ」

これだ。だからアタシはこのゴリラに頭が上がらないんだ  
藍の次くらいにお世話になってるぜ。ゴリには

「全く……」

ゴリはもう一度深々と溜息をついて教卓に戻っていった

ではゴリの言う通り、勉強してるフリをしよう

ポケットから取り出すのはコンパクト……型のホログラム発生装置

多角照射を必要としない上でこのサイズにするのは骨が折れた……しかし私のアタシは不可能も不可逆も理屈も理論も知った事かと笑い捨てる

それこそアタシ、史上最強の天才!!

「おーほっほっほっほー」

「うっさい!!」

テンションあがって高笑いしたらデコにチョークぶつけられた。  
解せぬ

というか天才の頭に何をやる

閑話休題

さて、今のアタシはさぞかし真面目に勉強してるように見える事だ

ろう

ぶつちやけゴリはこのホログラム発生装置の事を知ってるから機嫌が悪ければ文句を言われる。しかし今日は溜息一つで無視する事に決めた様だ。あざっす

懐から例のポーチを取り出し、中から青いひし形の宝石を取り出す

(ふむ。やっぱり何で出来ているかわからない……。アタシは一度見たもの聞いた事を忘れた事は無いから多分未知の物質だろう)

……… 突拍子もない考察で隕石と言っ可能性もあるが、加工したとは思えない形からその可能性は削除

いや、いつそ宇宙人とのコンタクトと言っ可能性はどうだろうか

……… うん無いな)

あつたら面白いとは思っが現実味の無い妄想だ。しかし可能性は無限である

だからアタシはオカルトの存在を否定しない。可能性の存在を否定しない

思考を遊ばせると、右手からピーと音がした。研究室のデータベースで検索が終了したのだろう

アタシの右手の義手はアタシの作ったプログラムで制御されていて、家の研究室のスパコンと繋がっている

触覚を再現するためのセンサーを利用して、何で構成されているか調べていたのだ

アタシの記憶に存在しない物質だからと言って、地球に存在しないと決めつけるのは早計。だから調べ直したが……

(該当なし………アタシが作った検索エンジンで3時間以上かけて捜索しても、この物質はインターネットのどこにも存在していない)

ますます興味深くなってきた

成分解析の結果も出ているが、出るのはエラーの文字ばかり  
久しく感じなかったわからぬ。少し……いやかなり楽しい  
アタシの知的好奇心はウズウズ動きながら学校が終わるのを今か  
今かと待っていた

訂正。待ちきれなかった

ホログラム発生装置を起動したままにして、昼休憩と同時に学校を  
飛びたした

なんせ本当に久しぶりなのだ。いや、取っ掛かりすら掴めない‘わ  
からない’は、もしかしたら初めてかもしれない

そう考えると、本当に幸せな気持ちになって来た

8歳の頃にはこの世界に置いて説明されている科学は全て頭に  
入っていた

10を数える頃には人の心のメカニズムを科学で解析した

そして12歳。今に至ると‘わからない’が存在しなくなった

そういえば昔、匿名でとある大学に心理学の論文を送り付けた時、  
博士号なんかも貰った事もあったか

きっとアタシは天才なのだろう

それこそ、頭がイカれてる程

1度見たこと聞いた事は2度と忘れない完全記憶能力

そしてそれを武器に手当たり次第に知識を吸収して行った

そして今のアタシがいる

もはやこの世の全てを説明するのは時間の問題かなんて考えてい  
た

いや、今のペースで研究を進めて行けば、きっと20を越える頃には  
全ての真理を説明していた自信がある  
だから

だからこそ。本当にワクワクしていた  
アタシが研究を初めた最初の気持ち。‘わからない’事への渴望  
ああ我望む。願わくばアタシが死ぬまで、この世界がアタシに解明  
されません用に

「……………あ」

そんな事を考えていたせいだろう。気付けばアタシは知らない場  
所にいた

訂正。一応は知ってる

昔、通っていた私立聖祥大学付属小学校。もっとも殆ど家に引きこ  
もって数える程しか言っていないが

「遅いよなのは!!」

「待つてよアリスちゃん!! すぐかちゃんも」

「あはは、なのはちゃん早く早くー」

ドロンッと後ろを向きながら走っていた金髪の女の子とぶつかった

「あ、すみません」

「ん、前を向いて走らないと危ないぜ」

金髪の女の子は元気良く返事をして再び走り出す。その後ろに茶  
髪と紫の紙の女の子が続いた

「って、あの茶髪の子。翠屋んとこの娘さんじゃなかったっけ」

うん、確かそつだ。いつかあそこに言った時にお手伝いをしてた覚

えがある

「ふーん。小学3年って所か……………」

少女達三人は姦しく騒ぎながらもつ見えないところまで行ってしまった

そして自分があれくらいの年だった頃を考えて、死にたくなって来た

なんせ研究研究また研究と言った生活の1番酷かった時期だ。今でも思い出すと軽く鬱になる

「ああやめやめ。また思考が泥沼にハマる」

小学校はもう下校時間なのだろう。一斉に出てくる年下の子供たちの邪魔になる

そう思って、家の方に歩き出す。本当に、そんな瞬間だった

…す…て

それが、聞こえた

聞こえたと認識した認識できた

アタシの記憶に間違いがあったことは一度も無い。聞こえたとアタシが認識したならば、それは聞こえたのだ

聞こえなかった部分はどうしようもない。だが聞こえたのだ  
前後の文字から助けを求めている言葉に聞こえる。しかし

(問題はアタシの耳ではなく頭に直接響いたという点だ。どうやって？ アタシの体で機械化してるのは右手だけ。アタシの作ったセキュリティを抜けて右手にバックドアを仕掛けた？

あり得ない。第一、右手に音を脳まで伝える仕組みなんて組み込んでない。振動を利用した音？ それを頭蓋骨迄届かした？)

思考は続く

(しかも、今の声が無処から届いたのか解る。どこにいるのかまで理解できる。どうやって？ 無理だ

アタシの作ったセキュリティを抜けたと認めて、音を伝える事は確かに可能だ。ほぼ不可能だけど、可能だ

だが今のはマップデータ迄頭に送信されてきた。あり得るか？  
そんな事が

こんなものはまるでーー)

ーまるで、魔法じゃないかー

「は、……はは」

自分の声が寒々しく響く

「ちょっと、君」

声をかけられて我に返る

「こんな所で突然笑い出して、どうしたんだい？」

この人は小学校の警備員か用務員か……。しかし今、アタシは……

「今、アタシは笑ってる………？」

その事に、自分の頬に手を当てて始めて気づいた  
そしてそれを自覚して、もう一度笑う

「すいません。すぐに行きます」

「ち、ちよつと君!!」

後ろから声を掛けられるがそんな事は知ったことじゃない  
助けてと、誰かが言った

そんな声が聞こえた

そしてそいつは、アタシの知らない何かを持っている  
笑わずにいられない。手元に新しいオモチャが二つも転がり込ん  
できた

青い宝石も、謎の声も、どちらも必ず解き明かしてやる!!

結果だけを見ると惨敗だった

いや別に負けた訳では無いのだが、凄まじく負けた気分させられ  
たから負けだ

なんせその場には何もなかったからだ

これはもしかしたら、人生初の聞き間違いかもしれない。そんな不  
名誉な思いをさせられたのだから負けだろう

勿論、指定された公園はくまなく探した

ちよつと裏技使って、何かの捜査にきていた警察官を動員して探し  
た

それで見つけたのは空き缶と、乗り捨てられた自転車と、公園の外  
に走って行くさっきの翠屋の娘さん一同だけだった

「はあ」

結局、夜が暗くなるまで探しても見つからないので諦めて帰宅に向かっている次第だ

「今日の晩御飯に癒されよう……」

そう言いながら自分家の扉を開ける。開けた

「このおバカ様ああああああ!!」

「ほああ!!」

そして開けた瞬間、鳩尾に鉄拳が直撃した

「おバカおバカだと思ってましたけどもはやただのおバカでは足りないおバカですね!! ヘルおバカとでも呼んで欲しいですかおバカ様!!」

「いや…無理、死ぬ……」

内臓破裂という言葉が頭に浮かぶ。それくらいに強力な打撃だった

「授業くらい普通に受けられないんですかへブンおバカ。学校から電話が掛かって来ましたよ

人を小馬鹿にしたホログラムだけ残して学校から消えたって」

「いやだって……」

「だってクソも無いですよヘルアンドへブンおバカ」

「それもはや技の名前だよね!？」

ツッコミを入れる位には回復したのでとりあえず叫んでおく

「言い訳無用ですよハンマーヘルアンドヘブンおバカ

せめて中学位は出てもらわないとお母様に申し訳が立ちません  
授業を真面目に受けるとはもう言いませんから最低限の出席日数  
くらいは真面目にしゃがりましょう光になれおバカ様」

「……………はっ」

「この子の母親を持ち出されたらもう何も言えない。当然、最後のは  
もはや掛け声だとかも言えない  
悲しい習性だなあ……………」

「で、今度はいったい何を思いついたんですか？ 人に迷惑かけたり  
ロボに迷惑かけたりは禁止ですよ」

「何気に保身に走んなよ……………。とりあえずこれを見てくれ」

そう言って、ポーチから例の青い宝石を取り出した

「……………？ じゃね」

宝石の様ですが、この様な発光のしかたをする物質はデータベース  
には存在しませんね」

「だよね。てことは一体何で構成されてるか調べるところからだぜ」

「成る程。そういうわけですか

では、今日中に成分位は調べてしましましょう」

さすがは我がメイド。話が早い

「だから学校サボるなんて考えないように。次サボったら頭蓋骨をトマトみたいに潰します」

「……………はい。肝に銘じておきます」

### 閑話休題

宝石の構成解析は藍に任せ、アタシは昼間の謎の声について考察する事にした

まず大前提としてアタシが聞き間違いをしていない、とうとう頭が完全にイカれて幻聴が聞こえた。その可能性を排除するでしょう

ぶっちゃけその可能性が1番高い気がするがそんな事を言い出したら前に全く進めないので無視である

第一、考察なんてのは可能性を確定情報に出来ないからする為のものなのだから、仮定が沢山あって当然なのだ

彼、もしくは彼女が求めたのは救出依頼。そこから読み取れる情報として、声の主は不特定多数の人間に声を届けようとしたのではないか？ということだ。助けを求める声は届けることに意味があり、本当に切羽詰まっているならできるだけ多くの人間に向かって叫ぶ事だろう

しかしそこで謎が生じる

それは、アタシ以外の人間は誰も声の主を探していないと言うことだ

私にしか聞こえない声、そんなものがあり得る可能性として右手が

特殊な義手である点を上げることが出来るが、右手を操ってマップデータまで送るのは不可能と言う結論に達している

「……………やっぱ聞き間違いか？ 幻聴が聞こえる様になったとかだったら嫌だなーっ」と

しかし現状では1番高い可能性であるのは確かだ  
そこで他の可能性を考察してる時

た…………て

声がもう1度、聞こえた

そして頭の中には同じ様にマップデータ。一度なら聞き間違いの可能性もあるうが2度目は幻聴か真実だ  
そして幻聴か真実を確かめる術はひとつ

「ダッシュだ!!」

窓を開けて外に出る

そして声が聞こえた方へ走る

「1111は…………」

着いたところは動物病院だった。利用したことはない

しかし今そんな事はどうでもいい  
重要なのはこの状況だ

「ここ、日本だよな……………車でも突っ込んだのか」

動物病院の塀と思わしき場所は、無残に崩れ落ちている。崩れ方を  
見るについさつきあつたことだろう  
そして思い出す

(公園で声が聞こえた時も、何かが壊れていなかったっけ?)

1度なら偶然。2度なら奇跡。しかしそれは必然まであと一步  
声が聞こえたら、物が壊れている  
声の主が戦車に襲われている

「自分で言うのもつんざりするくらい現実味がねえぜ」

そう呟いた瞬間

「リリカルマジカル!!」

そんな声と、桜色の光が見えた

反対側かよと呟きながらそこに光があつた場所に向かうと

「……………いや、これはないだろ」

そこには重火器でも使わないと作れないだろう破壊の後  
しかし右手のセンサーで火薬の反応は無し

「本当に、びびっちゃってんのよ。うた」

「ああ。詳しくは交番で聞かせてもらおうか」

独り言のつもりが、返事をもらってしまった  
振り返ると警察官

「……………もしかしくつても補導っすか？」

「君は見たところ中学生位だろう。こんな時間にウロウロしてれば当然だし、この状況の事情聴取もしなければならん

悪いが付き合ってもらうぞ」

この時アタシの頭の中にあつた考えは、どうやって監に言い訳しようかという事だった

## 神社の狛犬

朝、留置所の天井を見上げながら起き上がる

「あーまだ全身いてえぜ

あの暴力メイドめ、流石に死ぬぞ」

その後、交番連行、警察官によるお説教タイム。そして身柄引き受けに来た藍による鉄拳制裁。さらに一晩反省すると放置プレイ

前半二つは問題ないが、鉄拳は死ぬかと思った。生きてるのが不思議なくらいだ。放置プレイ？ 心が痛いよ。アタシ死ぬんじゃない？

いや、むしろ今って死後の世界？

「いや生きてるし、普通に朝だし」

自分で自分にツツコミを入れて立ち上がった

それと同時に表に立っていた警官に連れ出される

そして解放。シャバの空気は美味いぞー

まあ裏技を使って出た訳ですが……警視總監には何かと貸しがあるのよ

「しかしまさか本当に留置所で一晩明かすことになるうとは……。藍までアタシがやったって決めつけてくるし」

物を壊すような実験をする時は街中でなんでやらないって言うても信じては貰えない。説得力ゼロとまで言われた

……………アタシってそんなに信用ないかなあ？

若干落ち込みながら、家に向かわず反対側へ。今家に帰ったって学校に行かなくちゃならない。なんでこんなテンション低い時までさらにテンションの下がる場所に行かなければならないのか

つーわけでサボりますサボタージユです

「だけどどこに行こうか………喫茶店でも探すか」

と言ってもアタシが知ってる喫茶店なんてひとつしかない。そのひとつに向かってアタシの足は向かって行った

「またサボりかい？」

店に入って開口一番にそう言われた

「またってなんですかまたって。まるでアタシがサボりの常習犯みたいじゃないですか」

喫茶翠屋。アタシが懇意にしてる………と言うか唯一知ってる喫茶店である

藍がいなかった頃は唯一、携帯食料以外を食べれる場所と重宝した

「そういつつもりで言ってるんだけどね、珈琲とオムライスでいいかい？」

「ん、泥みたいに濃いよね」

「はいはい」

そう言つとマスターは裏に行つてしまった。つて

「シュークリーム言つたの忘れてた……」

桃子さんのスイーツとても美味しい……藍が作るお菓子よりだ  
あの子より美味しい物つて作れるはずないんだけどな……だって  
あの子は……

「はい、」要望通り少し濃いめにしといたよ」

「ん、ありがと土郎さん」

珈琲が来たので思考を止め、一口啜る

「あ、そだ。後でナナカんとこ行くからシュークリーム包んでくださ  
い。」

「ん、菜々華ちゃん所に行くのかい？ 菜々華ちゃんも学校をサ  
ボつてまで来て欲しくないと思うけどね」

「う、それを言いますか……。研究が忙しくて最近行けてないんです  
もん。だから……」

「はいはい……シュークリームは今切らしてるから桃子に焼くように  
言つてくるよ。オムライスももう出来るはずだしね」

「ありがとついでに」

シュークリームを三つ、袋に入れてもらって、神社を目指す  
子犬の散歩をしてる女性を追い抜いて、神社の前に辿り着いた

「……………」

そこで両手を合わせて祈る

ここは、ナナカが……………アタシの親友が死んだ場所だ

お墓はあの子の両親の実家にあって、おいそれと行くことができない。  
だからせめてあの子が死んだ場所で両手をあわせるのだ

「……………」、アタシは色々間違ったりした

けど、今は藍と二人で元気にやってるよ。だから心配しないで見て  
てね

いつもここに来るとあの子に声を掛けてしまう。何も言っても  
は無いのにだ

「あ、そだシュークリーム……………」

袋からシュークリームとナプキンを取り出す

ナプキンを境内に敷いて、その上にシュークリームを乗つけた

この翠屋のシュークリームは、あの子が1番好きだったお菓子だ。  
だからここに来る時はいつも持ってくる

そして境内に自分も腰掛けて、別のシュークリームを食べ始めた

「……………」ん、美味しい。でもアタシには少し甘すぎるかな

「？」

アタシは甘い物が苦手だ  
甘い甘いシユークリーム。あの子に付き合わされてよく食べてた

あの子と会ったのは5年前  
アタシがまだ7歳だった頃だ  
その頃には、この世界の粗方の知識は吸収し、独自の理論を作り出  
そうとしていた頃だろう

「ねえ。これって何を書いてるんですか？」

教室で、重力制御のシユミレーションをしてたら声を掛けられた

「……………」

アタシは当時、生まれてから一度も切ったことのない髪をガムテ  
ープで束ね、殆ど寝ずに過ごしていたせいで目の下に真っ黒な隈をつ  
けていた

そんなアタシに好き好んで話しかける奴なんかおらず、教師にす  
らないものと扱われる

しかしそれで幸せで、自由に研究が出来ることに感謝すらして日々  
を過ごしていた

「ねえって、これなまに」

だから、物珍しかったのだらう。好き好んでアタシなんかに話しか  
けてくる「の子が

だから、追いつく、為に今の研究について説明をしてやった

「ニュートン力学における重力を確定情報と仮定して、重力を制御するためのシュミレーションをしているところ  
アンチグラビティを起動させるために必要な反重力を計算している」

アタシはこのこのから自分が異常だと理解していた

両親のからはつとまれ気持ち悪いと、大学の教授以上の知識量を誇り、狂った様に研究を続ける

それが異常だと気付いていたから、こんな事を言った

人は、自分と違うものに関わりたくない生き物だ

だから当然の様にこの子も自分から離れて行くだろう。そう思っていた

「ん……………なに言ってるかわからないよお。授業でこんな事やった覚えなんてないです」

当たり前だ。アタシが作ったアタシの研究だ。この世界のどこにも存在しないし、学校の教師ごときが教えてたまるか

「だから、教えて下さい!」

……………え?

「……………なんて。言ったの」

「わからないから教えて欲しいって言ったの。わからない事があったら、わかる人に聞く。当たり前でしょ？」

それはアタシにとって始めての経験だった

アタシの研究は、認められる所には認められていた。しかし、向こうから教えてなんて言われたのは初めてのことだ

向こうから、歩み寄って来たのが始めてだった

「……………わかった。いいよ、教えてあげる」

「えへへ、ありがとう。よろしくね」

そしてその子はアタシに向かって手を差し伸べた

そんな事は、生まれてから一度もなかった

そんな経験、始めてだった

握手なんで、したことなかったんだ

「づん……………よろ、しく……………」

その子の笑みは、眩しかった

「……………っ。あ、寝ちゃってたか」

境内で目を覚ます

また懐かしい夢を見てた。昨日に引き続き二度目だ

しかも1番幸せだった頃の記憶。ヤバイ泣きたい

「もうお昼……………オムライス食べたばかりだからお腹減らないなあ……………」

ナプキンの上のシュークリームは溶けてしまっていた

それを胃に収め、軽くお腹を摩りながら境内から飛び降りる

「じゃ、また来るよ。ナナカ」

アタシは最愛の友人の名を呼びながら境内を後にしようとした

ド、クンッ

一瞬、世界の色が変わった気がした

「な、にっ」

似てる。全然違う現象だけど、根本が似てる

あの謎の声や青い宝石に……………!!

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

それが聞こえたのは、その直後だった

声が出た方に首を向けると、そこには女の人と……………

「でかくて黒光りしてる犬!!」

そう表現する以外できなさそうな生物がいた

いや、あれって生物なのか？ 何故か全く生気を感じないんだけど

……………

『オオオオオン』

犬はひと鳴きすると、その巨体からは考えられない大ジャンプでこちらに飛びかかってきた

「ついいい!？」

転がるように避けながら犬の観察を続ける

グルルなんて喉を鳴らす姿は生き物のようだが、やはりどこか現実味がない

「つーかあんなサイズの犬がいたら有名になるはずだ

突然現れた？ ふざける虚空から物が現れてたまるか。そんな事を認めてしまえばなにを根拠に研究を続けて行けばいいかわからなくなる

『オオオオオン!!』

犬はまた吠えると、ギョロリと複眼を開く。キモい

「いやもうなんなのこの状況……」

女の人を見るといとも簡単に気絶している。うん出来るならアタシも気絶したい

「つって今気絶したら間違いなくこの犬に食い殺されるぜ。ナナカが死んだ場所でくたばったら完全に呪いよ」

だったら殺されてもいいかしらなんて考えが一瞬浮かぶが当然却下。第一あの子が望む訳がない

となると選択肢は二つ。逃げるか、戦うか

逃げるだとあの女の人も連れて行かなければならなかったため難易度がバカ上がる。なら……

「覚悟してもらおうしかないわね。犬っころ」

そう言って、携帯電話を操作した

アタシの右手は、とある研究の失敗で根元からなくなった

そこで義手の制作に着手したのだが、人間の手というのは余りにも精密に出来ている。そのため普段使っている義手は、人間の手以上の機能は殆どつけれないのだ

掴む、離す、摘まむ、なぞる。それを高いレベルで再現する為には、アタシの技術でも腕のサイズに収めるので限界だった

つまり何が言いたいかというと

「この右手は喧嘩では役に立たない」

いや人間同士の喧嘩なら役に立つか、カーボンナノチューブで出来るから硬いし

しかしいま目の前の巨大な犬を倒す術はアタシのの手腕には無い

「手腕には、ね」

そう呟いた瞬間、空から飛来した何かがアタシの足元に突き刺さった

それは誰がどう見た所で完全無欠に腕だった

今付けてる戦うことに関しては意味を持たない右手の付け根にある赤色のボタンを押す

ガチツと音がして簡単に外れた

触覚が消滅する感覚に辟易しながら家から飛んで来た腕を装着する

この海鳴市の中ならアタシがどこにいようと、この戦闘用義手を飛ばすことができるのだ

ちなみに使ったのは今が始めて。ちゃんと動いてよかったよかったです

右手を犬に向かって構え、アタシ自身は衝撃に備える

ズガンツなんて音がして、握り拳程の大きさの砲弾………もとい握り拳を発射する

犬は反応すら出来ずに直撃する。ふらついているところに距離を詰めて右拳を叩き込んだ

『おおおお………』

犬は弱々しく鳴いて、こちらを見る

「沈め!!」

アタシはそう叫ぶとコードを射出。高圧電流を流して沈黙させた

この右手、ロケットパンチがしたいが為に作ったけどそれ行こう使ってなかったの、正常に起動してよかった。結構マジで

そんな事を考えてると、何処かできいたことのある声が聞こえてきた

「リリカルマジカル!! ジュエルシード封印!!」

刹那、犬の体は光り輝いて子犬の姿に変わった

そしてその子犬からは例の青い宝石が出現する

「……………What?」

いや待て、ちょっと待て、マジでタンマリリカルマジカル？　なんで光った？　つーかなんでちっこくなった？　質量保存の法則完全無視？

声が出た方に顔を向けると、少しカスタムした聖小の制服を着た女の子が肩にフェレット？を乗せて杖を構えていた

ああ、昔見たことがあるぜこつこついうの。魔法少女っていうんだろ？  
わっはっはー

「つてぶざけんな!!」

突然大声を出したアタシに驚いたのか、女の子はビクッと肩を震わせる

「え、えっと……………あの……………ごめんなさい?」

「疑問形で謝んな。別に謝られる必要もないし」

理解不能な事が多すぎて叫んだだけなのだ。謝られても困る  
その女の子は少し困ったような顔をしてコツチを見ていた

「えっとあなたは誰なの?」

「アタシは悪の天才科学者、相坂愛奈。気軽にアイアイて呼んでも他  
人行儀に相坂さんって呼んでも構わない」

「あ、悪の天才科学者さん!」

「ああ食い付く所そつちなんだ……」

でも自己紹介する時に天才科学者って言うと、頭に悪ってつけたくならない？ ならないか、そうですか

「え、えっと……相坂さんは一体何をしてるんですか？」

女の子が喋ってないのに声が聞こえてきた

「ユ、ユーノくん。いきなり喋ったら驚かれるよ!!」

そしてあるうことか女の子は肩のフェレットに向かって話しかけている

これはあれか？ アタシの理解力に喧嘩を売ってるのか？ もうノックアウト寸前ですよ？

「でもなのは、ここにいてジュエルシード暴走体を倒してるってことは魔法の関係者の可能性が高いよ。なら僕が喋ってたって驚かな……」

「でもこの人固まっちゃってるよー!!」

ちょうど神社の前でよかった。普段は神なん信じてないアタシだけど、懺悔したい気分だから

「わからない事がこのよになんて調子に乗ってすいませんでしたー!!」

## 知らない世界と解らない理論

十分に発達した科学技術は魔法と見分けがつかない。これはSF作家のアーサー・C・クラークが定義した法則の三つ目の文章だ。アタシはロボット物以外の小説や物語は見ないし読まないが、無性にこの言葉に共感したことを覚えている

このクラークの三法則、昔々にふと思った事がある。それはもし本当に魔法があったらこの法則はどうなるのかだ

その時は他の研究にかかりきりに成ってたのでシカトしたが、再び考察を試みよう

論点は、発達した科学＝魔法なのかと言う所だ  
そもそも、何を置いて魔法と言うのか……

「アイナさん」

……魔法の定義として、常人には使うことが出来ない超常の現象とある

しかし科学はどんな人間であっても等しく適用されるシステムだ

また科学技術と言う点を見たならば、やはりどんな人間であっても使用可能なものである。それについて詳しい知識が……

「アイナさんってば!!」

「ダメですねコレは。なのは様、少し後ろに下がっててください」

……あるかないか別にしてだが

では人にならない知識を持ち、その上で科学によって超常の現象を起こすことができるアタシは魔法使いではないのだろうか？ 魔法少女

アイナ、爆誕!! うん無いな

「お客様が来てなのに無視してんじゃねえキイイイック!!」

「ミゾオチ!!?」

鳩尾に藍の鉄脚が突き刺さる

呼吸不全、意識混濁が同時に起きて死にかける

「ら、らららら藍さん!? アイナさん死んじゃうよ!!」

「こんなもんで死ぬほど柔な体してません……………多分」

「普通に…………死ぬわ…………ボケエ」

そして体が言うことを聞かなくなり、アタシの意識は闇に沈んで行った

アタシが気絶していた時間は5分程度だった様だ。アタシの夢のひとつである気絶がこんな形で果たされることになるうとは…………軽く鬱鬱だ

「そこんとこどう思うよ、藍」

「気絶なんてしたがる方がおかしいんですよ。つか気絶なんてのはどうしたってロクなもんじゃないですよ」

それもそうかと納得

「さて、高町なのはちゃんだよね。土郎さんから聞いてるよ。とってもいい子だって」

「え？ お父さんと知り合いなんですか？」

「知り合いというか翠屋によく行くというか……。まあそんな感じアタシはアイナ。悪の……。ってこれはもういいか

まあ見ての通りしがない天才科学者やってます。以後お見知りおきを」

「海鳴小学校三年生、高町なのはです。知ってるみただけど、高町家では未っ子さんです。」

「僕はユーノ・スクライア。ジュエルシードを探して地球にやってきました」

おう、異世界のフレット。喋るし宝石集めるスペックの高さアタシの処理能力は限界を迎えようとしているよ

「じゃ、キチンと自己紹介を終わらした所で……」

「私は、まだしてません」

藍が文句を言ってきた。当然ですが意図的に無視しました

「ご主人に向かって飛び蹴りをかますようなメイドが自己紹介なんておこがましいです」

「私は藍。好きなものはマスター。大好きなものはマスター。超好きなものはマスターです。マスターのメイドをしています」

「じめんなさい。恥ずかしくて火が出そうなのでやめて下さい」

「つーか藍も恥ずかしかってるじゃねえか。なんで自滅覚悟でアタシの陥れようとする」

「じゃはは。すごい仲良しさんなんですな」

「なのは、すごい仲良しさんはあんな威力の飛び蹴りをしたりしないと思っよ」

#### 閑話休題

「じゃ、いい加減に本題に入りますか。ジュエルシード、音以外による救助要請。そしてあの化け物。全部答えてもらうぜ」

「……………わかりました」

そう答えたのは意外というかそうでないのか、なのはの肩の上の小動物だった

「いわく、ジュエルシードとは人の願いを叶える力を持った、ロストロギアなんて呼ばれるオーバートクノロジーの産物である」

「いわく、ジュエルシードを地球にばら撒いてしまったのは自分で、責任を取るためにジュエルシードを集めていた」

「いわく、その最中に負傷してしまい、やむなくテレパシーによる救助信号を発信した」

「いわく、それを、聞き取るためには魔法の資質が必要不可欠であるいわく、救助信号をたまたまキャッチしたなのはに助けてもらったいわく、なのはの好意に甘える形で今、ここに至る」

「箇条書きにすればそんな感じだ」

「なんでもなのはの魔法使いとしての資質は凄まじいらしい。それ」

こそ、願いを叶えるために暴走したジュエルシードを無傷で倒せるくらいに

「僕としてもなのはに手伝ってもらうのは凄く心苦しいんだけど……」

「ユーノ君、そんなこと言わないで。困ってる人がいて、それを助けることができる力が私にはある

だったら助けることを迷ったりなんてしないよ

お父さんに教えてもらった大事な事、護らせてよ。ユーノ君」

「な、なのは……!!」

ぶあつと涙腺を緩ませるフェレット……もといユーノ

そしてお互いの目を見つめ合って抱き合った

……どっやってだよ

「やべえ。このやり取りに入り込む隙がねえぜ」

「私とマスターのやり取りも似たようなものだと教えてあげる」

マジでか。それは知らなかった

「ま、状況は理解した。魔法って結局なんじゃコラボケとか言いたいことは多数存在するが、理解した

その上で聞け。あんたら2人でジュエルシードを全て集めきる算段はあるのか」

その言葉に2人は沈黙する。特にユーノの方は本気で深刻そうな顔をしていた

「……それは」

「マスター。意地の悪い事を言うのはやめなさい

どうせ手伝う気満々なんですから最初っから協力を名乗り出なさい」

「……………あの藍さん。時々わからなくなるんだけどあんたってアタシのメイドよね？」

「なのになんで主人のすることを邪魔するの？」

「ひとえに楽しいからです」

「最低だこのメイド!!」

そっ言い合ってるのを見て、なのとはユーノは目を丸くする

「えっと……………手伝ってくれるの？」

可愛らしく小首を傾げながら、なのにはアタシに聞いて来た

く、渋りに渋りまくって最後の最後にしゃあなしで手伝ってやるみたいなの空気を出そうぜ大作戦が台無しだ

「はあ……………」

一つ条件、今アタシの手元にはジュエルシールドがひとつある。それを全て回収し終わるまでアタシの手元に置いておくこと。それがアタシがあんたらを手伝う条件だ」

ユーノはアタシがジュエルシールドを持つてると言う所に反応し、そしてアタシの申し出に関しては声をあげて反応した。まあ当然だろう

アタシとユーノが言い合っていると、藍がアタシに耳打ちをしてくる

「解析ならもつほとんど完了してますよ」

この瞬間、アタシがジュエルシードを手元に置いておく意味がなくなつた

藍の入れたココアをみんなで飲んでみると、なのはが口を開いた

「気になってたんだけど……、アイナさんって科学者なんだよね」

「んー？ どちらからどう見ても科学者でしょ」

見ただけで科学者とわかる人はいませんと藍が言う  
それを無視してなのはは言葉を続けた

「あ、あの……この部屋色々見て回ってもいいですか!!」

「ダメ」

当然のことながら即答した

「あ、あつ……」

「色々と世に出したらヤバイのとか有るしねー。アタシの技術を狙って世界の各機関が動いてるなんて話もあるくらいだし」

本当かどうかは別の話だけど

っーか我が研究施設の内部に入れたのってこの子供が初めてじゃ

.....

「マスター。そろそろ小学生には辛い時間です。これにてお開きにしては...?」

「ん、それもそだね。じゃあ取り上げこれを」

アタシはそう言いながらポーチからジュエルシードを取り出す  
そしてそれをなのはに向かって差し出した

「あ.....」

「早くしな。気が変わるぞ」

そう言つとなのはは慌てたように赤い宝石を取り出す

「レイジンググハート!! お願い」

なのはがそう言つと、赤い宝石は桜色に輝き杖の形になる  
どつという理屈でこんな事がおきているんだか.....

「リリカルマジカル。ジュエルシードシリアルVIEIEI。封印!!」

その言葉を引き金に、アタシの手の中のジュエルシードはレイジン  
グハートの中に封印された

「いったいどういふ風の吹きまわしですか？ 研究素材を自分から手放すなんて」

なのは達が帰ってからジュエルシードと解析結果を見ていると、藍がそんな事を言ってきた

「あんたがそういう事を言いますか……  
……別になんか魔法なんてのを研究するのは少し早いかなって思っただけ」

魔法。アタシのこれまでの研究成果を全て無に気してしまうような異常なテクノロジー  
アタシの当面の課題であった、エントロピーをいとも簡単に凌駕する。しかも魔法の適性なんてものまで存在する。この技術を収集するには、まだ早い

「今、いったいいくつの題材を同時に研究してるとかってんのよ。少なくとも、魔法の研究はしばらくは無しだぜ」

「……わかりました。ではこの話を終了して、ジュエルシードの解析結果をアタシの方から説明させていただきます」

「ん、頼んだ」

結局、ジュエルシードの材質が何かは分からなかった  
ならば異世界由来の物質であろう

そして特筆すべき点として、願いを叶えて力が有るということだろう  
厄介な事に人間以外の存在にも反応してしまうが、意思を読み取って起動する。成る程間違いないオーバーテクノロジーだ

まあアタシも昔、脳から伝わる微弱な電気を読み取って起動するなんて装置を作ったことがある。たぶん倉庫ではこりをかぶってら

「このジュエルシートもその辺は同じ様ですけどね

さてアイナ、一番下項目を見てもらえますか」

「アタシの事をマスターって呼ぶのかな前で呼ぶのかはつきりしろよ……

……なんだこの数値。人間の赤血球の数が？」

「そこまでトンデモな数値はしてませんが……

マスターは昔、エネルギーを数値化する装置を作りましたよね。運動エネルギーだろうと熱エネルギーだろうと何であれ

アレが使えたんです」

「……なるほど、今の状態って思ってたよりヤバいのかも  
しれないな」

そこに書かれていた数値は、核融合を起こしているのと同等のエネルギー値

わかりやすく言うならば、あの小さな宝石の中では常にトンデモな爆発が起きてるのだ

そしてそれが、色んな所にばら撒かれている。うんやべえなんてレベルじゃないくらいにやべえ

「つーわけで。こっちでも全力を持ってジュエルシートを搜索します」

「では、そのように。搜索に当たって必要なものはありますか？」

アタシは藍にあるものを作る材料を言っ

そして成る程と言った顔になって、倉庫に行った

「んじゃまあ作るとしますか。ジュエルシードセンサー」

もう頭の中では理論や設計図は完成している。完徹でやれば一日出来るだろう

暫くは寝れないなあ……

## 金髪の少女との出会い

「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアルXX。封印!!」

なのはが叫ぶと化け物は消し飛び、もう見慣れてしまった青い宝石が現れた

「これでよし……。なのは、レイジングハートで触って」

「うん!!」

元気いっぱいと言った感じで一連の動作を完了したなのは。何と  
いうか、手慣れてきたと言う感想だ

そしてはつきり言おう。アタシ要らない

どうやら魔法の才能は皆無らしく、簡単な魔力球を作ることすら出  
来ずにいた

なのはにコツを聞いても「にゃはは………」と笑ってごまかされ、ユー  
ノに聞いたら「魔法が存在しないって固定概念が邪魔してるのかも  
ね」とありがたいお言葉を頂戴した

でも、だが、魔法である。魔法なのである。ふざけんな畜生め

魔力ってなんですか？ 一応エネルギーの一種であることは観測  
できたけどそれ以外の解析結果は エラーのオンパレード

もはや全てアタシの幻覚妄想であると言われた方がありがたいか  
もしてない。しかしこれは現実で、魔力というエネルギーは観測され  
ているならばこの世に存在するし、そこに理論も理屈も存在する

ならば解き明かせない訳ないし、解き明かさない訳にはいかない。

この世の真理を解明する。それこそアタシの至上目的なのだから

……………んまあこの世の真理の究明程度は20歳過ぎには終わら  
してるつもりだけど。魔法を含めても25には終わらせてやる

「はーはっはっはー!!」

「ユ、ユーノ君!? アイナさんがいきなり笑い出したよ!!」

「そんなの僕に言われても困るよ!! なに? 世界の終わり!?」

今はまだ、とっかかりすら掴めていない状況だけど、覚悟しておけよファンタジー!! アタシが丸裸のすっぽんぽんにしてやるからなーーーー!!

「近所迷惑だから騒ぐんじゃねえ」

そんな声と共に脳天に激痛。鉄脚の踵落としが直撃した

「痛い……………死ぬほど痛い。暴力反対…。っーか世界の至宝とも言  
うべきアタシの脳細胞にバグでも起きたらどうしてくれる  
今の蹴りで真理の解明が一週間遅れたぞ」

「何を根拠に雑な解析してるんですか。それとツッコミに手加減を  
したらボケた相手に失礼です。ツッコミには愛を込めて全力で。母  
さんの教えです」

「ムウ……………そっぴやあの子もおもっくそ殴って来たなあ……………」

「じゃあは……………」



本筋に戻そう(二重意味)

「えらくお疲れみたいだねえ、なのは」

「あ、はは……アイナさんほどではないですよ。いろんな意味で」

アタシってそんな疲れてるように見えるか？

「まあ、最初よりは様になって来た様に思いますね、なのは様も」

「今度は様付け……ネタに困らない奴

っーかアタシには魔法って使えないの？ それとも中学生はの魔法少女は認めない？ ユーノってロリコン？」

「うん違うよ。そしてアイナの思考回路の一端を見た気がする……。」

アイナも練習次第で使えるようになると思うよ。ただ、アイナの魔法量はこの世界の住人にしては多い方っただけで、普通よりも断然少ない。だからテレパシーや魔力を感じる事が出来る程度が限界だと思っ……。」

なんだこのフェレットもどき喧嘩売ってんのか。魔法関係者はどいつもこいつもアタシに喧嘩売ってんだな。買っぞ？

「……まあいい。全然良くないけど、いいや

なのは、明日は休みでいいんだよな」

「うん。明日は日曜日だし、お休みにしたいな」

「OK。じゃあ今日は徹夜だな」

「休めこの研究バカ」

そんな無駄話を続け、なのはを家に送り届けてから自分の研究室に帰った

翌朝

「……………死にてえ」

強制的に布団に入れられ、しょうがないから寝ながらジュエルシードの考察をして、朝日が射して自然に口からそんな台詞が出た

「藍〜。コーヒー入れてー。眠いー」

……………返事がない。ただの屍のようだ

「いや、アタシあのゲームやった事ないけど……………」

リビングに降りて行くと、畳まれたメイド服と書き置き

『買い出しに行ってください。くれぐれも勝手に行動しない様に』

「……………あんたはアタシの保護者か何か。しかも拘束してくるモンスターペアレント」

メモに釈然としないものを感じながら、セルフでコーヒーを入れる。

完璧な入れ方のはずなのに、藍のや翠屋のコーヒーの方が美味しいのは何故だろう

お昼前。朝飯も食べずに藍を待ってたが帰ってこない

「やばいな、餓え死ぬ」

当然そんな事は有り得ないが、ポケたら帰って来るかと思いついてみる。一人するのはつまらない

「じゃあない。こうなったら一人で外食と洒落込むか」

言っつて泣きそうになるが、堪えて家を出た……………友達なんていないやい

どづしてどづなった

目の前には金髪ツインテールのたれ目とスタイルがうらやまけしからん赤い髪のお姉さん。ふたりが一心不乱にラーメン定食とスペシャル肉丼をかつ込んでいた

翠屋に行ったら少年サッカーの試合に行くからとかで閉まって、しょうがないからファミレスで済まそうと思ったけど一人でファミレスはさすがに自殺を図りかねないから却下。こうなったらあえて行った事のない店に行こうとした所で、ラーメン屋の前で『超大盛り。30分で食べれたら一万円』の文字の前で立ち尽くす2人を発見  
どうにも気になって声をかけたら、ドル紙幣しか持ってなく、円への変え方が分からなくて3日くらい飯を食べてなかったらしい。  
銀行や両替所の事を教えてはい終わりもどうかと思ったので、ラーメンを奢る事に

して、今に至る

「は、あー！ー！！ 喰った喰ったー。ありがとよ、アンタは命の恩人だ」

「うん……………、本当にありがと。本当にもうだめかと思った……………」

「無駄に切実なありがとだな……………。どづいたしまして」

どう見ても外人さん2人の流暢な日本語に若干面くらいいながらの受け答え。つーか日本語出来るならお金の交換の仕方くらい聞け

「いや本当に助かったよ。この店の一万円チャレンジがうまくいかな

かったら強盗でもしようかと思ってたくらいね」

「えっとアルフ。そういう発言は出来るだけ控えてね」

「お前ら色々危なっかしなあ……………」

しつとお勘定

「2130円」

「高い。まけて」

結局値切れたのは30円。しかも次にまた3人で来る約束までさせられた

「ちくせう、あのおっちゃんやるなあ……………」

「えーと、最初っから値切ったりしなればよかったんじゃない……………」

昨日来た神社。2人を腹ごなしがてら連れて来た

なんせ、どうにも変な2人組だからな。‘用心’に越した事はない

「では改めて自己紹介。あたしは相坂 愛奈。アイナでも相坂でも好きに呼んで」

「えっと、私はフェイト。フェイト テスタロッサ」

「あたしはアルフだよ」

「……………以上？」

新しい魔法少女ですとかないの？ ネタ的な意味で

「アンタは一体何を期待してんの？」

「ん？ そろそろ正体を明かしてもらおうかと思って」

ズザザッと、2人はアタシから距離を取る。それは、歴戦の戦士の様な動きであった

……………ってなんで逃げる。そしてなんだこの緊張感。なんで日本に潜入したスパイが正体をバラされたみたいに成ってんだ？

「あなた……………最初っからあたしらの事解ってたのかい？」

「……………がほとんど無いから解らなかった。こんな辺境に管理局の人間がいるなんて」

なんか面白いからだまっところか？ いや、さすがに意地が悪いか

「管理局って何だよ……………。アタシはアンタらが財布すら持っていないのを見たから寝床を貸してやるって話をしようとしただけだぜ」

2人の表情が固まる。にしても似てない姉妹だなあ

「……そうだよ。ジュ……ード、まだ一つも盗んでないもん。私  
たちを捕まえる理由がない」

「なんか盗むとか不穏な言葉が聞こえて来たが？ 犯罪がばれたら強  
制退国だぞー」

言外にばれなきゃいいと言ってみる

「えっと、色々ビックリして驚き損ねたけど……そこまでお邪魔する  
訳にはいきません。私たちは……」

フェイトがそう言った時だった

どこか覚えのある脈動を、これまでに無く大きく感じたのは

## 高町なのは

刹那、目の前から巨大な木が生えて来た

「んな!!」

「こねって……………!!」

頭の中でジュエルシードという言葉が浮かぶ。しかしここまでの反応を示したことは一度も無かったはずだ

なら、大きな反応をする理由があるはず。しかし今この場に置いてはどうでもいい。後回し

「フェイト!!」

アルフがフェイトを抱えて跳ぶ。オリンピッククに出ると言いたい動きだったが、とりあえずホッとした

「アルフはフェイトを連れて安全な場所に行ってる!! アタシはこの異変の原因を突き止めてくる!!」

ポケットから予備のケータイを取り出して、二人に向かって投げつける

「そこにアタシのケータイ番入ってるから落ち着いたら連絡して!! じゃあそついう事で」

「ちょ、アンタツ!!」

アルフがなんか言ってたが無視。神社の階段を降りながら普段

使ってるケータイを取り出した  
電源入ってなかった

「あー……。それで藍から連絡なかったのか」

若干戦々恐々としながら、藍に電話する。1コールで出た

『アイナご主人!!! 今どこ!!』

「神社の階段を降りた所です、ママ!」

ズガンッ

そんな音がして、藍が降って来た。比喩にあらず

「説教は後。とりあえずなのは様と合流しますよ」

「いやなにアンチグラビティ使ってるの!? その電力消費量ってのわ!!」

捕まって、担ぎ上げられて、藍と一緒に空を飛ぶ。アタシの作った重力制御装置の力を思う存分發揮して、アタシと藍は空を舞った

重力を操るアタシの発明品、アンチグラビティシステム。名前が余りにそのままだと思つのでネーミング募集中だ。そしてもちろんそんな事は後回し、いまは空をバーミア噴かして飛んでるという事実だ

けでいい

「これの電気代が1分につき、一般家庭が1年を優に過ぐせるくらい掛かるのもどうでもいい」

「よくねえけどな。で、状況は？」

「見ての通りです。海鳴全域に巨大な樹が生まれ、とんでもない速度で成長しています。樹の種類は不明、ただしジュエルシードの反応が全ての樹から見られます。本体の場所は搜索中」

「OK」

飛びながら、下を見ながら、思う。想像以上だ

ジュエルシードから観測されたエネルギーを樹木を育てる為に使えば、確かにこの事態を引き起こすのは可能だろう。だが実際に見るのは想像を絶した。地震のシュミレーションを見た所で、ピンとこないと同じだろう

アタシにこれと同じ事が出来るかと聞かれればYesと答える。しかしそれは入念なシュミレーションや莫大な費用と機材が必要になる（本来なら人員も必要だが、アタシは人間並みに動けて頭もいいロボを作るから問題ない）

一瞬で樹木を成長させる意味を考えるが、魔法の事を深く考えるのはやっぱり後回しだ

「アイナ!!」

とあるビルの上に着した。そこにはなのはとユーノの姿

なのはは魔方阵の中で目を瞑り、なにかに集中している様だ。

……………どうせ魔法だけ、アタシには意味解らん

「なのはの奴、一体何してんの？」

「僕としては、魔法の使えないアイナとランがどうやって飛んでたのか気になる所だけど……………。なのはは今、ジュエルシードの場所を探してる。」

「凄いやなのはは。教えてない探索魔法。エリアサーチまでセンスで使っちゃうんだから」

「おーそれはすげーな。どの辺が平凡な小学三年生が聞きたくなくなるくらい」

「平凡な中学一年生は実戦で使える巨大ロボの制作を本気で試みようとしません。アレ、本気で完成させる気ですか？」

「当たり前だのくらっかー。で、なのはは……………」

「見つけた」

「なのはがそう呟いた」

「すると、杖の形をしていた(どこが杖だと言いたい所ではあるが)レイジングハートがどこか銃を思わせる形に変形した  
そしてそれを見て、アタシは涙するしかなかった」

「うわっ、アイナなんでいきなり泣き始めてるの？」

「どうせ見事すぎる変形を見せられたせいですね。アイナでも変形機構の制作は骨が折れるってぼやいてましたし」

「うっさいわ!! 変形機構なんて無駄かつ装甲が薄くなるうえ大したメリットが無いもんどうして組み込まなくちゃいけないんじゃない!!」

「そしてどうして変形ってあんなにかっこいいんじゃないああああ  
ああああああ!!」

出来るよ!? 変形できるメカくらい簡単に作れるよ  
でも実用性を考えたらどうしても無駄にしか思えないんだもん。  
でもかっこいいです!!

「っーか巨大ロボの時点で実用性ゼロですけどね。人型である意味ない  
い

…………でも頭の角って、いいですよね」

最後の最後でデレてくれる藍大好き

「行って!!」

バカ話に花を咲かせている最中もなのははがんばっていたらしい。  
ちと反省

レイジングハートから放たれた桜色の閃光は、一番大きな樹めがけて一直線に飛んで行く。樹に直撃し、なのはがお決まりの台詞を呟いたとたん

「……………いやあ、これは無い」

街を覆っていた樹木が全て消え失せた。だから質量保存の……………もついいです。

「ユーノ。解説」

「え、えーと。ジュエルシードを封印したから魔力が霧散して、木が無くなったとしか言いようがないんだけど……………」

ほほう…………。エネルギーが霧散すると同時に物質まで消滅すると  
このフェレットもどきは適当きわまりない事を言い腐りやがって

……。しかしエネルギーの消失と同時に視認出来なくなる  
……。少し気になるな

「……………」  
考えふけつてると辺りが静かすぎるのに気がついた。いつもなら『終わったあ〜』とか『なんかなくなったよ〜』とか気の抜けた声が聞こえて来るはずなのに

しょうがないから思考を中断してなのはの方に目を向ける  
そこには、意気消沈と言った様子の彼女が座り込んでいた

「……………」  
「……じーしたんだぜ？」

「私……………」  
ジュエルシードを男の子が持ってるのを見てたんだ。でも、気のせいかと思っちゃって……………」  
私のせいだ。私がジュエルシード集めにもっと真剣だったらこんな事にならなかったのに」

「なのは……………」

ふむ。気のせい、ねえ

残念ながらアタシには解らない感覚の1つだな。なんせ見たもの聞いた事を忘れた事なんか一度たりとも無いんだから

「そうだな……………」  
「それでお前はどう思った」

「っえ？」

しかしそれでもアタシの方が年上で、'取り返しのつかない失敗'をしてものうのうと生きてるアタシは、この程度の失敗で落ち込んでる年下の女の子を慰めずにはられない

「藍。死傷者は？」

「3秒ください……………」

「軽傷者数名、死者重傷者ゼロです」

「どうしてそんな事が魔法も使っていないのに解るのは聞かないでおくね……………」

「ユーノが何か言ってるが無視」

「1人くらい死んでもおかしくなかったが、この街の人間は普段の行いがよっぽどいいみたいだな」

「なのはがこの失敗をどう思うかなんてお前の自由だ。開き直るもよし、そのまま塞ぎ込むのもよし。好きにしたらいい」

「塞ぎ込むならレイジングハートはユーノに返してやれよ」

「……………」

「いったん言葉を止めて」

「でももし、それでも前に進める者なら。アタシはお前を尊敬するよ」

「なのはは答えない。そしてしばらくして」

「私、ジュエルシート集めを、するよ」

「……………ん、そうか」

「そっついなのはのはの頭を撫でよっつと手を伸ばす」

「ユーノ君の手伝いじゃない。自分の意志で」

「……………」

手が止まった

この子はアタシが思ってる以上に強いのかも知れない。少なくとも、この歳の頃のアタシよりは強い  
だから

「……………ふえ？」

やっぱり頭を撫でた

この子はどうにも、本当に平凡な小学三年生ではない様だ。下手をすればアタシよりも異常な精神で、少し怖いくらい歪だ

「なのは、アタシの尊敬する人の言葉を教えたい

人は失敗に脆弱で、失敗でしか成長出来ない歪な生き物。なのははこの失敗に耐えて強くなった

だから……………」

……………この先は、言わない事にした

どうにも、アタシとこの子は、合わない、らしい。魂とか、精神の有り方が

だってあの日から一歩も進めてないアタシと違うもの

さて、帰り道

なのはを家まで送り、あと数時間もすれば日が暮れると言った所で電話が鳴った

「ん？ 金稼ぎ用じゃなくてプライベート用が鳴るのは珍しい……………初めて？」

「何度か私がかけた事あります」

「じゃ、身内以外だったら初めてだねえ」

ケータイを持ちながら、通話するという意思を込めると通話が始まりました

「はいはいアイナサンデスヨー。用法用量を守って正しくお使いくださいー」

「電話くらいまじめに出なさい」

聞き流しながら耳を傾け

『え、えっとフェイトです。アイナさん……………ですよね』

ん？ そーいやポケット入れっぱなしにしてた予備のケータイ渡してたんだっけ

「そーだよ。なに？ やっぱ家ないからうち来る？」

ギロリとした藍の視線にビビりながら会話を続ける

『えっと……………本当にいいんですか？』

「いいよーどっせお世話するのは家のメイドだし。……………」  
「ごめんなさい。ちゃんと説明するからやめて、殴らないで」

『あ、はは……………あの、本当にありがとう。なんてお礼を言ったらいいか』

「よーゆーのはいいから。そのケータイに家までのナビが出る様にしてくから、それに従って家までおいで」

通話停止を念じて通話終了。微弱な電気信号を拾ってスイッチのオンオフを切り替えれるこの機能。簡単な動作だったら意味ないな。巨大ロボの操縦に必須だと思っただが

「アイナ、説明」

「はいはい。金色とオレンジが行き倒れてたから世話する事に成った。以上」

「わかりました」

「あんな雑な説明で解ったの!!？」

「アイナの事をいちいち本気で考えるのが無駄だと解りました」

「暴言だった!!」

ひびく

「……………まあいいですけどね。ではすぐに帰って離れの掃除をし  
てきます」

「ん。1時間くらい？」

「5分です」

そう言うと、藍を超スピードで帰ってしまった

「……………離れて3年くらい放置してたはず  
なんだけどなあ」

どんどんスペックの上がっていく藍に少し驚きつつ、ケータイを操  
作して向こうの操作を始めた

「我が家へようこそ。しがない天才科学者のアイナさんです」

「このバカのツッコミ役兼メイドの藍です。要望が有れば何でもござ  
し付けください。出来る限り対処いたします」

「えっと、じゃあ改めて。フェイト テスタロッサ、少しの間お世話に  
なります」

「あたしはアルフ…………… テスタロッサ。フェイトのお姉  
ちゃんだ」

ゴフッ

フェイトが吹き出した音だ  
フェイトとアルフは近寄って内緒話を始める

「フェイトがこの設定で行こうっていったんじゃないか!!　なのに笑  
うなんてひどいよ!!」

「う、うめ……………でも、く……………ぷぷ」

最初に会った時から思ってたけど、仲いいよなー  
設定がどうのここの言ってるが気にしないでおう。向こうが話  
してくれる気になるまでとりあえず放置  
その意思をアイコンタクトで藍に送り、気を取り直す

「もうなんでもいいから……………  
住む場所は離れが有るから自由に使っていていい。夕食は一緒に食べ  
る。研究室には勝手に入らない。その3点を守ってホテル相坂邸の  
生活を楽しい物にしましょう」

「無理矢理感のあるボケだったので10ポイント。残念です」

「何点満点中?」

「ビリオン」

「……………うわぁ」

閑話休題

二人を離れに案内して、戻る途中

「……………随分と見覚えのある子ですね」

「だろ？ 藍の隠し子かい」

ゴスッ

「あの目、明るく振る舞ってるけど悲しみを隠せていませんでした。まるで、昔の私みたいなの……………」

「脇腹は地味に効く……………」

ふざけながらも話を続ける

「ま、折りをみて話をしてみますよ。なんだか訳ありみたいですし」

「ん、そーしたげて。本当に、昔の藍を見てるみたいでほっとけなくて  
わ」

隠しきれない孤独を、向けようのない悲しみを

そう言った負の感情はぶちまけなけりゃ溜まるばかりだから

「フェイト視点」

通されたのは、少し小さめの一軒家だった

「……………あの人たち、本当にジュエルシードを集めてると思う？  
アルフ」

そばに控えていたアルフに、私の大事な使い魔に声をかける

「多分ね。少なくとも魔法の関係者だよ。じゃなきゃ空を飛んだり  
ジュエルシードの発動地点に向かうのはおかしい」

本当は、この家に迷惑をかけるつもりはなかった。でももし魔法関係者で、ジュエルシードについての情報を持っているのなら、近くにいて損はない

危険も大きいだろうが、その分早くジュエルシードを集められるはずだ

「……………あの人たちの善意を利用する形になっちゃっ  
ね」

「フェイト……………」

少し……………ううん、とても心苦しい

でも私は母さんの為にジュエルシードを集めるんだ。もう一度、もう一度母さんの笑顔を見る為に

「その為なら、私は何だっするよ」

そう、小さく呟いた言葉は心にストンと落ちて行った



そう言ってゴリは授業に戻って行った

今日は土曜日なので半日授業だ。あんな夢を見たせいで気分が悪いので早めに帰ろう。まあ学校にいつまでもいる意味ないし。帰って研究を続けるとしよう

「あ、あの……………」

帰る為に立ち上がろうとした所で声をかけられた

「……………だれ？」

そこにいたのは知らない女の子だった

「えっと……………クラスメイトの飯田萌なただけ。席、目の前なんだけど」

「あ……………ごめん。人に興味無いから記憶の片隅に追いやってた」

しかし、アタシに話しかけてくる奴は、何も知らないか変態の2択しかないぞ

「これから食事でもどうかと思って……………どうかな」

「えーと、なんかの罰ゲーム？」

闇のゲームで負けたとか

「いやいやいや!! 普通にお友達になろうって言いに来ただけなのに  
なんでそんな話!!?」

「だってアタシに話しかけるとか罰ゲーム以外の何物でもないでしょ  
? 変態に話しかけるのは変態だけだよ」

「言外に変態って言われた!!」

ついでになのはとユーノと藍とかも変態とっておく。つーかア  
タシの周りにいる人間って変態ばっかだよなえ

「こちとら嫌な夢見て頭痛いつてのに、そんなめんどい事させようと  
してんだ。モルモットにされる準備は出来てんだろっねえ……………」。  
出来立てホヤホヤの新薬投与されたいの?」

「えっと……………やめてくれると嬉しいなーなんて」

……………はあ。しんどい

ため息をついて立ち上がり、外に向かって歩き出した

「あ、相坂さん」

「ついでくんじゃねえぜ」

あんな夢を見た直後だからだろう。いつものようにぶざける余裕  
もなく、冷たく言い放った

「私」と友達になるって意味、キチンと考えてからもう一度言いなさ  
い

あなたがもし、他の人間みたいな傷口を舐め合っただけのくだらない関係を「私」と結びたいなんて言うのなら、二度と話しかけるな」

「私」と友達になりたいなんて酔狂者は、あの子ひとりでいい。そして、もう二度とあの子みたいな悲劇は引き起こさない

「……………なんてね。アタシみたいな変人とつるんでたら、あんたまで変な目で見られるよ」

「あ、あの……………私、」

「じゃあね、もし本当にアタシなんかと友達になりたいってんなら……………相対性理論の反対論でも考えて来て。そしたら面白おかしく笑ってあげるから」

そう言いながら、手を振ってアタシはその場を後にした

鍛冶屋、赤意

設計図を渡せばどんな物でも金属でも、製鉄、加工、何でもしてくれるすばらしい店だ。法に触れる物でも作ってくれるし、入手しづらい金属でもどこからか調達してくれる。この店がなかったら、アタシの右手の義手の完成は3年は遅れてただろう

「おっちゃん。頼んでたあれ出来てる？」

「……………」

店長……………名前は知らない。店長は奥に引っ込んで行き、そして「トリとカウンターの上に布に包まれたそれを置いた

「ん。ちゃんと注文通りどねえ。布の上からじゃ解らんけど」

店長はスパナを振りかぶって振り下ろしつてちょっと待てええええええ!!

全力の横っ飛びでなんとか回避。ほほに少しかすったのが怖かった

「なんでいきなし殴ってくるか!! アタシの周りにはこんな奴ばっかか畜生!!」

「……………ッチ」

うわ舌打ちかよ。この店なんで潰れないんだ? アタシ以外の客見た事ねえし

店長は早く確認しろとでも言いたげに、それをスパナでつつく。商品をもんな荒っぽく扱うなと言いたい

若干ビクビクしながら、布をはがす。そこにあっしたのは、銀色の腕だった

「ん……………今付けてみていい?」

彼はなにも言わずにタバコを吹かし始めた。なんか違法っぽい甘い匂いがするが、気にしたら負けである

右手の付け根の赤いボタンを5秒ほど長押しする。これは未だにアナログっぽくボタンに頼ってます。音声入力も生体電流操縦もききません

ジジッと音がして、強制ページが完了する。神経接続を切る瞬間



「……………」

店長が差し出した手の上には請求書。桁がおかしい。零がいつぱいです

「14おくえんって、……………まじで」

店長は手を出したまま動かない。ここで逃げたりしたらまたスパナで殴られる。ギャグ補正にだって限界はあるんだ

「ったく。ほれ」

この店は、お金を払わなければ外に出れないシステムになっている  
しゃあないから財布からカードを取り出して店長に渡した

店長はカードをひったくると、リーダーに通して無造作にほおつて来た。……………いやなんで暗証番号入れてないのに決済されてんだよ

どうせ金なんか小学生の頃くらいの研究を売ればいくらでも入ってくるからいいんだけどさ

「んじゃ、また来るよ。それまで死ぬなよー」

「オイ」

出口に向いていたアタシの脚がピタリと止まった。それなりに長い付き合いだが、店長の声をまともに聞いたの初めてだ。舌打ちとか以外で

「……………クラブが喋った!!」

「……………」

あ、ヤベエキレてる

スパナの一撃を覚悟したが、それはこなかった

「はあ。なんのつもりでこんな兵器を作れなんて言って来たか知らねえけどな。死ぬなよ、てめえの注文は死ぬほどめんどくせえが一応お得意様なんだからな」

「ん。またなんかあったら来るぜー」

以外と出た言葉は励ましだった

今回注文した右手は、純粹戦闘用。しかも単体での戦場支配を視野に入れた人殺しの道具だ。まあそんな風に使う気無いけど

これを作ってもらった理由は一つ。魔法の存在だ

個人の資質による所は大きいが、利便性は明らかに科学を越えている。特に個人戦闘においては、科学技術を使ってる限り勝てない。もちろんその事を認めてやるのは癪なので今回のこれである。スベックの理想値は中段衝きで音速越え。レールガン内蔵。重力操作機構&ブースター。さらに奥の手までつけてこれ一つで世界中の軍隊に喧嘩売っても勝ってんじゃね？ って性能に仕上がってます

もちろん、今この場で全開出力にしたらアタシはミンチになるけどね。音速越える辺りで

「ついてもまあこれでも勝てるかどうか解んないけどねえ」

魔法はアタシの理解を越えてくる。ぶっちゃけ、物理現象無視して  
る時点で勝てる気がしないの一言だ  
しかし今回の件すこし本腰を入れて向かってみたくなった。ジュ  
エルシード封印の理屈はなんとか仮説を立てたから、なのはから1  
つ借りて実験すればいい。魔法を完全に理解するのはまだいいとし  
て、必要最低限の知識は必要だ。

「やる事山積みだなあ」

そう、だれに言う出なくばやくのだった

さて、ご飯です。晩ご飯です。意外とアタシは大食いだったりしま  
す。カロリーメイト10箱いき喰いするくらいには

「いただきます」

アタシ、フェイト、アルフの声が重なった

「うわぁ……………すごく美味しい」

「うんうん!!」これならいくらでも食べられるよ!!」

「また腕を上げたようで何よりだぜ、さすが我がメイド!!」

「ありがとうございます御二方」

..... やっぱりひどいよね、このメイド

「つーか藍は食べないのかい？」

アルフがそんな事を言いだした

「うん、そっだね。皆で一緒に食べた方がもっと美味しいと思うし」

フェイトもそれに同調する

藍は困った様にこちらを見て来たが、この事に関してアタシがなにかを言う事はない。藍が自分で決めればいい事だ

「..... お客様や主人と一緒に食卓を囲むなど、メイドには行き過ぎた行為です」

「ならアタシの事と殴るなよ」

「アイナは黙ってて」

フェイトまでひどい

そして、藍はごまかす事を選択するわけだ。何も言わないけどね。納得いつてない様子のフェイト達の話題をそらすべく、実は空気読めるで有名なアイナさんが他の話題を搜索

「ん？ フェイト、肩に毛が着いてるぜ」

「え？」

そっ言つくと藍がひょいとその毛ほをつまみ上げる

「これは……猫の毛ですね」

猫……………だど!!

「えっと、何でアイナはそんなに後ずさってるの？」

「猫は……………怖い」

「つか動物全般怖い。人間相手でも意思の疎通出来ないのに言葉が通じない生き物なんか怖くてしかたないわ!!」

「アイナだったら人語翻訳機くらい作ってそうどけどねえ」

「昔作ったけどまとともに動かなくてめんどくなくなって放置した。以来動物は苦手です」

「写真で見るともなんか嫌。猫の毛なんてもってのほか。ついでに言うと、昔は猫アレルギーでした。もう治したけど」

「全くアイナは」

そう言いながら、藍は猫の毛を捨てに出て行った

「……………なあアイナ」

「なんだいアルフさんや」

そんな神妙な顔してどうしたんでしょっ

「狼も嫌いかい」

「ひら」

そう言うと、なぜかアルフは落ち込んでしまった。そしてフェイトに睨まれたなげえ？

真夜中

研究室で、一人、食事、をとっている藍の元に来た

「……………珍しいですね、こんな時間に」

「迷惑？」

「……………いえ、食事は皆でとった方がお  
いしいのよ」

アタシは藍の隣に座る。そしてそのまま抱きしめた

「いじめんなれよ」

「……………」

謝る。謝る。何度でも謝る。自分の為に謝る。謝罪は人のためではない、謝罪は自分が辛いからするんだ

「いじめんなれよ、いじめんなれよ、」

「……………私に、謝らないでください。あなたが謝る相手は、私ではありません」

解ってる。そんな事は解ってる

藍に謝ったって意味がない。私が謝らなくちゃいけない相手は他にいる。でも、それでも、私は藍に謝らずにはいられない

だって結局、私、は謝る事すら出来なかったんだから

## レスポンスセン!!

「温泉!!?」

「うん。お父さんにアイナさんの事を話したら、一緒に行かないかって」

連休の二日前、ジュエルシード探しをしてる時になのががそう切り出した。お誘いの相手は高町 士郎。喫茶翠屋の店長で、一番つまかった時にお世話になった恩人である。そしてまあ解ってた事だが、なのはの父親でもあるらしい

「.....悪いお友達と付き合ってた言われなかった?」

「アイナさんって時々すごく卑屈になるね」

どちらかというと、常に卑屈なのを無理矢理隠してるんだが

.....

「にしても温泉かぁ.....知識としてはあるけど、行った事はないなあ」

「え〜!! 温泉に行った事無いの!?!」

信じられないとでも言いたげだなオイ。こちとら徹夜風呂なし上等の根っからの研究者だぞ。温泉なんて時間の無駄をしてる暇はない。さらに言うと、まともに風呂につかった経験なんて数えるほどしかないぜ。具体的な数は38回

「アイナさん……………」

「アイナ……………」

「な、何でアタシをだめな子を見る様な目で見つめてくる!!」

「実際、研究以外の事はだめな子ですし」

「ひどいや!!」

しかし温泉か……………。今の研究テーマもひと段落したし、行ってもいいかもしれない。

「なら行くか」

「あら珍しい。マスターアイナが人の誘いに乗るなんて」

「藍はアタシをなんだと………………。まあいいや」

なのも、旅行中はジュエルシードや噂の新しい魔導士の事は忘れて楽しむんだぜ」

「そうだよなのは。なのはいつも頑張り過ぎなんだから」

「う、うん。じゃあ今回は、魔法の事は忘れて楽しむ事にするね」

そんなこんなで、アタシこと相坂 愛奈の高町家となのはのお友達と一緒に一行様の旅行に参加が決定したのだった。

して温泉地。夢の温泉である

そして生まれて初めて、羞恥心と言つものを感じていた

「全員裸でお湯に浸かるとか正気じゃないと思つね」

「今、この世の日本人に喧嘩売りましたね」

いや露天風呂とか特に有り得ないと思つね。全裸で外だぜ、風邪ひくわ。うん、意味解らんね

まあ単純にアタシが風呂嫌いなだけなんだけど

「ユーノ君。いいかげんに観念してお風呂入ろうよ」

「い、いやだから。僕は恭也さんたちと男湯に~~~~!!」

そしてあの駄フェレットは一体何を叫んでる？ オスメスで言つたらオスだからって人間様の裸を見て照れてるのか？

「あ、わ、わわあ~~~~!!」

そして哀れユーノはなのはの友達のバニングス家のお嬢様に連れて行かれて全身をくまなく洗われていた。動物つて水が嫌いの多いよね

「フーかなのはの友達つて何気に凄い子多くね？ バニングスのお嬢に忍の妹さんだろ？ 変な小学生は特殊な奴を引き寄せる傾向にあるのか？ 類は友を呼ぶ？」

「なのは達はごく普通の小学生です!!」

「自分で自分の事を普通って言う奴に普通な奴はいねえ」

「ふふ、ならアイナさんは普通の人ってことになるわね」

なのはとお互いを蔑み合っていると、月村さんとの忍さんが会話に入ってきた

「安心しろー。アタシは自分の異常性なんか欠片も認知してねえ」

「それはそれで問題ねえ」

「というか私は忍さんとアイナさんが知り合いだったが意外で仕方ないよ」

ちなみに接点はメカいじりなのは言うまでもないだろう。共同開発も少なくない

「にしても……………相変わらずデカいな、それ」

「うん。大きいね」

「あら、なのはちゃんは大きくなったらきつとこれくらいには成るわよ」

「雑にアタシを飛ばしてんじゃねえ!!」

泣くぞぞ!? 結構本気で泣くぞぞ!? 身体の一部がほんの少しも成長しないアタシに向かってなんて事を言うんだ!!

「アイナ主だったらホルモン調整剤とかでいくらでも大きく出来るで

「じゃあ、」

「それしたら負けた気になるんだよ!! 余計な茶々入れんじゃねえ」

藍は一礼すると、高町 美由希の背中を流しに行った

「あいつはアタシに喧嘩を売りにわざわざこっちまで来たのか。あいつって本当にアタシのメイドなのかよ」

「じゃあは……」

「何とも言えないわねえ」

「てめえら纏めて新薬の実験台にしてやる!!」

そして始まるお風呂での追いかっこ。そして露呈するアタシの体力のなさ。くそう、ドーピング薬なんか作って忍の胸となのはのケツを揉みしだいてやる

しかし、人並み程度でいいから胸が欲しい……

そしてのぼせた

「くっく。誰だ温泉に入れば疲れがとれるなんて言ったバカは。逆に疲れるに決まってるだろうが……。だいたい風呂なんてのはわざと身体を疲れさせて効率よく体力を回復させるもんだろ。アタシは基本3日に1回しか寝ないから風呂なんか入る意味ねんだ

よ……………」

「何をぶつくさ言ってるのよ。お風呂で走り回ってたアンタが悪いんでしょ!!」

「甲高い声で叫ぶなバニングスのお嬢。あー頭いてえ……………」

「なにおっし!!」

「つかアタシは年下にどうしてこつも舐められる傾向にあるんだろつか……………お嬢にはいきなり、ユーノにはいつの間にか呼び捨て。なのはやフェイトもアタシにツッコミを暴力で入れるのに躊躇なくなってきたるし」

「まあまあアリサちゃん。アイナさんも抑えて抑えて……………」

「あー、すずかは忍に似ずにいい子だねえ。忍も最近はランチで殴ってくるし」

「なのははどうしてアイナさんが生きてるのか疑問です」

### 閑話休題

さて、ちびっ子どもの面倒を見る様にと藍に言われ眠気で朦朧とする頭をどうにか起動させつつ廊下を歩いている。藍? あのバカアタシをそっちのけで高町 恭也と美由希の二人と剣道「っ」している。あの子には一回本気でキレてもいいと思っ

「アイナさんはお土産巡りと卓球。どっちがいいですか」

「なんで風呂はいつて疲れた後にさらに運動すんだよ……………。っー

わけで土産もの見るぞ」

「えー」

「うっさい金髪。土産物屋見るのだって面倒い事この上ないんだぞ  
じり」

「研究バカのもやし」

「よっしゃ表に出るやエセ金髪!! てめえのその髪が地毛かどうか確  
かめてやる!!!」

「なあ!! そうゆう事言う!? 喧嘩売ってんなら買つわよ!!」

「なのはちゃん。もうやだよこの人のお守り」

「が、頑張ろつすずかちゃん!! 私たちが諦めたら良識派ツッコミ係  
がいなくなちゃう。言ってる悲しくなって来た」

茶色と紫のお子様二人に凄く心外な事言われた様な気がするが、ア  
リサとの口喧嘩はヒートアップして行く。こつなったら鋼鉄製の右  
手でおもっくそ殴ってやるつかと思つた所で

「はあい。おちびちゃん達」

なんかすっごい見覚えのある赤髪に声をかけられた

ーアルフ視点ー

やっちまったー！！！！

なんでアイナがこんな所でフェイトの邪魔した奴と一緒にいるんだい？ やっぱジュエルシードの関係者でフェイトの敵だったのか？ でも、だけど……………

「なんでアルフがこんな所にいんだよ」

「そして何事もなく話しかけてきやがった!!」

ああ、もう!! フェイトの邪魔になりそうなおちびちゃんに脅し兼忠告に来たらなんでこんなややこしい事になってるんだい。というか、アイナの立ち位置が解らなければあたしからは動きようがないじゃないか!!

「えっと……………どちら様かな」

「このアホもやし知り合いみたいだけど人の事をいきなり子供扱いはひどいんじゃない?」

「だれがもやしだキーキー声のエセ金髪。これは本物の金髪少女のお姉ちゃんという無理のある設定をゴリ押しで未だに押し通してる居候」

「えっと……………」めんなさい。なに言ってるか全く解らない」

うん。あたしもその説明でむしろ解らなくなった

えっと……とりあえず

『あんだ!! いい子でないとガブツといくからね!!』

『ふええ!? いいなりテレパシーで何を………』

最後まで聞いてる余裕はなかった。何故ならば顎にアイナの有り得ないくらい固い拳が直撃したからだ

「な、なにすんのぞ!!」

「なにすんのぞ………だと? その台詞、フェイトの前でも言えるのかゴリアア!!」

あ、やばい。なんかハマった

「アタシは、ううん私’は信じてたんだぜ!! アンタが本当にフェイトの事を大事にしてるって、あん悲しい目をした女の子の事を大事にしてるって!! なのに、一人で、優雅に温泉旅行とはどういう見ダアアアアアア!!!」

「なんか伏線っぽい一人称までネタにしてきた!？」

「じっちゃじっちゃうるせー!! 今すぐフェイト連れて来なさい!! 風呂入り直します。家主命令、異議申し立ては認めません。お土産? なもん知るか!!」

「フェイト視点」

ジュエルシードの反応があったから来たはずなのに、なぜか私はお風呂にいます。というか連れてこられました。アイナに

「えっと、フェイトちゃんっていつんだね」

「うん……………」

そして数日前にジュエルシードを取り合った女の子とそのお友達も一緒です。どっしよつもないくらい気まずい

「フェイト。本当にごめん……………あたしじゃ暴走したアイナを止めきれなかったよ……………」

「うん。しかたないよ」

アイナはたまに……………結構おかしくなる。食事中でも寝ている時でもおかまいなしに。そしてアハハハハハハハなんて笑いながら鉈を振り回したり、きひひひひひひひとか言いながら魔方陣（後で聞いたらエネルギー伝導装置とかの設計図らしい）を書き出したり……………

そして今回は止める藍もいなくてこうなったようだ。さらにその肝心のアイナは

「きゅん……………」

のぼせて脱衣所で目を回していた。よって事態は収集に向かうはずもない

「えいつ」

「ひゃあつ」

少しアイナの心配をしていると、私と似た色の髪をした女の子が髪を触って来た

「むう。確かに綺麗な髪ねえ……………。アイナが本物って言うだけの事はあるわ」

「え、えつと……………」

「もうアリサちゃん。初対面で不躰だよ

初めまして、私は月村 すぐか。アイナさんとは少し前からの知り合い……………というかお姉ちゃんと混ぜるな危険というか……………まあそんな感じです」

「私はアリサ。アリサ バニングスよ。こっちは……………」

アリサと名乗った女の子を制して、茶髪の子……………ジュエル  
シードを集めてる女の子が言った

「こんな形になっちゃったけど……………。私はなのは。高町 なのはです」

「……………フェイト、テスタロッサ」

「これで、お互いの名前を知った。……………だからどうだと言っただ。この子が、ジュエルシードを集める限り、私たちは敵同士だ  
そう思ったとたん、ここでお風呂に入ってるのが馬鹿馬鹿しくなっ  
て来た

「アルフ、出よ」

「あ、フェイト!!」

湯船を出て、脱衣所の扉を開ける

そして一言だけ、私の敵に伝えなければならない事を伝える

「もう、出来るなら私たちの前に現れないで……………私は……………」

「全裸でかっこつけても締まらないぜガール」

そしてその瞬間、胸に妙な感触

「む……………少しある。私なんか下と顔隠したら男と間違えられてもおかしくない体型してるのに……………」

「きゃ……………」

「何を大絶賛セクハラしてんですかこのロリコン&ト変態!!」

そして凄まじい音とともに私の胸を揉んでいたアイナは、藍のラリアットの餌食になった

「く、首……………首と身体が離れる……………。どっかの顔が濡れたら

力が出ないヒーローみたいになる」

「なれバカ。全く、油断も隙も無い。いい加減にしないと全身の関節外しますよ?」

「……………」

この人たちはこのやり取りに飽きないんだろうか

「さて……………フェイトさん、アルフさん。このバカご主人は私がとっちめときますので行ってください。踏み込む気はないけど、事情があるんでしょ?」

……………「ここはお言葉に甘えておこう」

そう思って、私とアルフは温泉を出た。後ろは振り返らずに

―アイナ視点―

\*あまりにも凄惨な光景なので、音声のみで御送りします。良い子は真似しちゃだめだぞ \*

「さて、アイナ。どこの間接から外されたいですか?」





## 過去話

研究室。ただただキーボードを叩く音だけが辺りに響く  
高町なのはの情報を入力して、アタシが戦闘で勝てる可能性をシュ  
ミレーションしていた

【勝率 0・000000000000000000000032%】

思ったたよりましな数字が出て来てビックリだ。ぶっちぎりで0  
%と想っていたからな

さて、なんでこんな事をしているかというひとえに魔導士への対  
抗策を考えているからだ。そしてサンプルというのがなのはしかい  
ないので仕方なくユーノに規格外と言われた少女をシュミレーショ  
ンの原点規格に使ってるのだが、やっぱりと言うかなんと言うか  
……………歯がたたない

ひとたび離されてしまえばどうしようもなく、

プラズマレーザーの照射はいとも簡単に打ち負ける。打からと  
いって近づけば、空を思い通りに飛べる向こうが当然有利だ。もうあ  
れだ、魔導士汚い。ずるいや

「だめだ、煮詰まって来た」

そう言いながら外に出る。空はいつの間にか赤く染まっていた

「十時間ぶっ通しでパソコンいじってたらさすがに疲れる  
……………少し休憩にするか」

散歩でもしながら考えを纏めとこう

魔法はプラズマの一種である。それがアタシの考察である、それが物質に見えようとどうだろうと

なのはが出す桃色の光は当然の事ながら、かつてジュエルシードが引き起こした樹木を海鳴中にはびこらしたあの事件。アレさえもプラズマであると言っ仮説だ

もちろんアタシは何でもかんでもプラズマで結論付けしたがる科学者とは違う。まあ根拠がある訳でもないのだが……………しかし

はあ、ダメだ。やっぱり考えがうまく纏まらない

これだけ頭の中がこんがらがってるのは久しぶりかもしれない。公園にでも行って一休みしよう

公園を歩いてると、ナナカの事を思い出して仕方がない。公園に来たのは失敗だったか……………

いっその事、しばらく魔法の事を忘れるのもいいかもしれない。もちろん、研究も続けるつもりだが……………少し疲れた

「ナナカ……………」

死んでしまった友人の名前を呼んでみる。悲しくなって来た

「ナナカ…………… なんだか少し疲れたぜ」

一番始めにアタシに近づいて来たバカの名前を呼びながら、歩く

「…………… 会いたいよお  
…………… ナナカあ」

もう一度呼んで、堪えきれなくなった

すこし歩いた頃、なのはがベンチに座って俯いていた

「ひでえ顔」

そう言つと、涙の後を拭ってこちらを向く

「ほんとうに神出鬼没だよね、アイナさんって」

「まあアタシの数多い特技だからな」

「この前の温泉のジュエルシードの時はおもつきり寝てたくせに  
……………」

ああ、なんかライバルちゃんが出て来てジュエルシート取られたってあれか。アレは寝てたっていうか気絶させられてただけだな

「座るぜ」

多分落ち込んでいるであろうなのはが座っているベンチに腰掛ける。アタシとしては人を元気づける余裕なんかないんだが、まあこの子が落ち込んでるのを見るのは面白い。うん最低だね

「で？ そんな顔をしてるなんて珍しいじゃん。なんかあったのかよ」

「じゃはは……………そんなひどい顔してるかなあ」

そう言いながら、なのはは学校であの金髪と喧嘩した事を教えてくれた

「随分といい友達を持ったもんだなあ」

「うん……………本当に」

本当にいい友達だ。相談してくれないから、水臭い、そんな理由でそばにいて心地いい友達に怒りを向けるなんて、この世界に一体何人の人が出来るのだろうか。本当にこの子は友達に恵まれている

「……………そうだな、面白い

話をしてやるっ」

「えっ？」

きつとそんな事を言いだすと思わなかったんだろっ。驚いた声をあげた

しかしきつとすぐに面白い話の意味を理解するだろっ。この子は何のかんの言っつて賢いし

「アタシが普通に人と色々違う事は解るよね？」

「.....」

「一度見た事聞いた事。知った味嗅いだ匂いその感触。アタシは絶対に忘れない。それこそ、母親の子宮にいた頃の記憶もあるくらいだからな.....」

ーアイナ語りー

アタシが言葉を覚えたのは生まれて3ヶ月もした頃だったらしい。もちろんその頃はまだ物心なんてついてなかったたから、そういつことがあったと映画でも見るみたいな感じだけど

物心つく頃には、大人程度の一般常識と知識を持っていて、そしてすぐに両親の知識量を越えた

アタシの両親は良くも悪くも普通の人でねえ、異常なアタシを愛してくれただけ………まあ限界はあったんだろね。心理学を修めてアタシがどれだけ疎まれてるか理解した。

3歳の時に弟が出来て、その子が普通の子で、それを見た両親の心を心理学の観点で理解した時、アタシは家を出る決意をした

10億円。それを両親に渡してアタシの事を忘れて欲しいと言った時の両親の顔はそれはそれは愉快な物だったよ。欲とか良心の呵責とかがぐちゃぐちゃになった様な顔、最っ低な気持ちと引き換えにアタシは自由を手に入れた

さて、ここまでがアタシがああ研究所を手に入れるまでのヒストリー。まあその頃にはこの世界でアタシに出来ない事は無くなっていたと言っても過言ではないね。なんせお小遣いの300円をバーチャルな土地を転がしたりして無限に金を作れたし。この世は金だけ、金があれば死ぬ事はない

そしてこの海鳴に一軒研究所をおっ立てて、趣味程度の研究を始めた訳だ。その頃はたしかお前よりひとと下の小2、学校にも行かず様々な知識を吸収して行っていた。そして現在解明されてる世界のルールを記憶し終わって、新しくルールの解析を始めていた頃

「ねえ、「これ何を書いているんですか？」

その言葉は、アタシの唯一の友人になる少女の言葉だった

その子は、少しおかしかった。どんな事にでも首を突っ込んで、どんな困難でもぶっ壊してしまう様なやつだった。はつきり言って最初はいけ好かない馬鹿野郎だと思ってたね

その子はアタシに狂った知識を教えってくれと言った。それは重力を操る物だったり、物質をレポートさせる物だったり、人間を創り出す物だったり色々だ。当然その全てが現役の大学教授でも手に余る物で、その研究を認めてくれる者などどこにもいなかった

そして当然、その子にその全てを理解する事は出来なくて、アタシは寂しさを覚えながらその子に背を向けた。そしてその子に肩を掴まれた訳だ

その子はそれからアタシに声をかけ続けて来た。その度に拒絶した。めげる事なく構って来た

「いい加減にして、これ以上アタシに構うつもりなら本気で叩き潰すよ」

アタシは9歳で、この世界で1人きりだと思っていた。アタシの世界はたった1人で、誰もアタシを理解してくれない。‘私’は1人なんだって幼心に理解していた

友なんていらぬ。たった1人である絶望を解ってもらおうとも思わぬ。研究だってやる事がないから進めるだけ。なんなら今すぐに死んだ方がいい。だからこれ以上‘私’にかまうな。うざいんだよ。これ以上‘私’1人でいるって決意を鈍らせるな  
!!!!!!!

「やだね」

ふざけた話だと思わないか？ アタシはこの子が嫌いだからこんな風に言ってるんじゃない。本当に嫌いなら無視するなり忠告なんてしないで潰してる。そう、アタシはこの子が好きだったのさ。アタシの事を自分から進んで理解しようとしてくれなんて、両親ですらしてくれなかった

たぶんアタシは認めて貰いたかった。笑っちゃうよね、どこの漫画のラスボスだったの。つまるところ、アタシはこの子に認めて貰った瞬間、やっと自分が人として生きていいんだと教えてもらったわけだ。きっとこの子がいなかったらアタシは今頃、全世界相手にテロリズムでもやってただろうね。アタシを理解してくれない世界なんかじゃないって。しかもその心に気付きもしないで、きっとこの世界を終わらしてた。比喻じゃなくね

いや、きっとその場合はあの子が勇者になって、ラスボスアタシを殺しに来るわ。そんな未来も、ある意味面白いだろうね

まあ何が言いたいかというと、この『やだ』なんて知性の欠片もない一言にアタシは救われたんだ。理解してもらおうと思わないよ。理解してほしいのは、この『ナナカ』って子がアタシに取って希望であり救いであり、そしてこの世で一番大事な人になったって事

「まあそれで色々あって、ナナカとアタシは親友って呼べるような間柄になったんだ。ここままで質問は」

「この長々とした話のオチが友達を大事にしろって事なら、アイナさんと少し話し合わなくてはいけないね」

おおうなのはの目が怖い、結構マジで。長い話が嫌いなのはどの小学生も同じだなあ……………なのは、校長先生のお話中に砲撃撃たねえよな？

「安心しろ。もう少し重いぜ」

ここからの話は藍とお前のお父さん、後はアタシの担任教師と知り合いのおっちゃん位しか知らない。ナナ力は翠屋の常連でよく付き合わされてたっけ……………

まあ先に結論から入ろうか。ぶちやけた話、アタシはナナ力を殺したんだ

この前ジュエルシードを封印した神社あるだろ？ あそこで重力操作の実験をしたとき、計算が狂ってるのを気付かないまま実験開始のスイッチを入れて、アタシが巻き込まれた

重力、反重力の暴走。その結果が行き着く先はブラックホールだ。それでアタシの右手は粉々になって消滅した

アタシの右手はどうだっていい。というか本当はアタシは今頃ここにはいないはずだからね。アタシの身代わりになって死んだナナ力がいなければ

ナナカもブラックホールに吸い込まれてた。でも角度的にギリギリ安全装置が働いて緊急停止が間に合う場所にいたから大丈夫、それで安心してアタシは死ぬるはずだったんだ。

でも何を思ったか自分からブラックホールに飛び込んで、自分の身体をミンチにされながらアタシの身体を押し上げて来たんだ。しかもそれ、ブラックホールが発生して刹那の出来事だぜ、どうしろってんだ

その時聞いたんだ。走馬灯だかなんだか知らないけど、ナナカの声  
を聞いたんだ

「幸せになって」

ふざけるなって叫んだ頃には装置は停止して、残ったのはナナカの頭部だけ。無くなった右手の痛みも感じず異変に気づいた神主が救急車を呼んで病院に運び込まれるまで左手でナナカの頭を握りしめていた

「あの子は最後に、『幸せになれ』だと言いやがった。どうしても守りたいものって聞かれたらナナカって答えるアタシに向かってだぜ？」

「……………きつと、ナナカさんも同じだったんだろね」

きつとそうなのだろう、アタシがナナカの立場ならきつとそうして、ニューアンスこそ違えど同じ事を言っていてだろう

「さて、アタシがお前に何を伝えたいかと言つと……………」

そう言いながらなのは頭に手を置いた。そして口を開いた瞬間に、なのはが言った

「解ってるよ。アイナさんが言いたい事」

「……………そか」

どうにも何かを決意した顔をしてらしゃる。ならばちゃんと理解したか聞き出すのは野暮だな。軽く伸びをして、ベンチから降りる

「じゃ、アタシは行くぜ」

「うん、私も帰るね。それと今夜のジュエルシード探しは私に任せてもらえないかな？」

「……………OKだぜ。なんか知らんがうまくやれよ」

そう言いながら、手をヒラヒラ振ってなのはと別れた

—なのは視点—

死んでしまったアイナさんの友達、どれだけの苦悩か私に知る術はない

でも、きっとアイナさんが言いたかった事はそんな事じゃないはずだ。だから

「アリサちゃん!!」

『な、のは』

私はアリサちゃんに電話をかけた。今を後悔しない為に、絶対しとかなきゃいけない事があるから

『で、何の用よ。今は休憩時間だからいいけどすぐにお稽古に戻らなくちゃ……………」

「あのねアリサちゃん!!」

少し不機嫌なアリサちゃんの声を遮って、言う

「今はまだアリサちゃんには言えない事してる。相談してもきっとアリサちゃんを困らせちゃうだけだから」

『っ!! ……………だから、そう言うのがイラつくのよ!! 悩んでる事があるなら相談してよ!! 辛いなら打ち明けてよ!! 例え力になってあげられなくても、一緒に悩んであげる事は出来るじゃん……………。それすらさせてもらえないなら……………わたし友達失格じゃない』

「アリサちゃん……………」

後半に行けば行くほど弱々しくなっていくアリサちゃんの声

「じめんね」

『謝らないですよ。よけい惨めになるわ』

「……きつとすずかも同じ気持ち。だから、……早くその悩み」と解決しなさい!! 解ったわね』

「じつ……ありがとう、アリサちゃん」

『フンッ』

最後にアリサちゃんのそっぽ向く声を聞いて電話は切れてしまった

「……………よし」

そう呟いて、ユーノ君を呼び出した。今日は意地でもジュエルシードを探し出して、フェイトちゃんに会わないと

「この前は変な事になっちゃったから、改めて自己紹介するね。私はなのは 私立聖祥大学付属小学校三年生 高町なのは」

「じつ……………」

私はもう迷わない。なにがどうなってるのかも解らない状況だけど、きつとこの子と笑い合ってみせる!!

けっごーマジで、キレています

その日が来たのは本当に唐突だった  
まあ魔法なんて物に関わりだしてから唐突じゃない事の方が珍しいのだが

「ア、イナ、さん……………」

「フェイトッ!!」

フェイトが突然、アルフに担がれた状態で帰って来た。全身を鞭の様な物で叩かれた痕があり、激しく疲労した状態でだ

「藍!!」

「わかってます。アルフさん、こちらに運んでください。場合によっては緊急手術の可能性もあります  
アイナ。処置室を使いますね」

「いちいち確認とんな。さっさと運べ!!」

処置室とは、生体部品やバイオテクノロジーの研究に使ってる研究室のひとつである。そして当然のことだが無菌室であり、その気になれば手術やその他医療行為をする事も可能にな一室になっている

「フェイト……………フェイトオ……………。しゅん、しゅんよ。」

「アルフ……………」

「話は後だぜ。藍、フェイトにとりま睡眠薬を飲ませといて。暴れら

れてもめんどいし

んで、システムスキャンとメディカルスキャン。ついでにブレインスキャンもかけといて」

「わかりました。10分程度で終わらせます」

「うんにゃ。5時間くらいかけてじっくりやったって」

それを聞いた藍が非難する様な目をこっちに向けてくる。当然無視

だってここまでアタシの事をないがしろにされたらむかつくじゃん。家主の権利でプライバシーなど知った事が

つまるどころ、人の記憶を覗き見る装置ぐらいあるので、藍にそれを使ってフェイトの記憶を覗けと言った訳だ。何？ 最低だって？

自覚はある。反省も改善もする気はない

処置室に藍とフェイトを放置してリビング。せっかく入れてやったコーヒーには口を全くつけずに

「フェイト……………」

とうわごとの様に呟くアルフ。メディカルチェックの方は終わって、見た目程ひどい怪我じゃないとわかって一安心と言った所が

さて、いい加減アタシもバカじゃない。システムスキャンの結論で、この子にはなのは並の魔力がある事がわかり、さらにあのジュエルシードの出現とほぼ同時期にこの海鳴に来た事。もはや一片の迷

いもなくこの子は魔法の関係者だと言いきれる。そして、なのはの邪魔をしてる噂のライバル魔法少女だとも

「……………アルフさんよ。アンタの目的も信念も理念も、アタシは何も知らないぜ。でも、フェイトがとてもない子で、あんな傷だらけになっていい子じゃないってのは……………アタシは知ってるつもりだぜ」

アルフの目の色が変わる。まるで狼の様だ、おおこわ

「知らないね。アンタは何にも知らない。あたしの事もフェイトの事も、何にも知りはないはずだ!!」

「ああ知ってる訳がない。当たり前じゃないか。何も話してくれない水臭い同居人の事なんか知らないよ!!」

なにも言ってくれない。何も伝えてくれない。それなのに自分の事をわかってくれないなんて悲痛な声で叫んでない。アタシは確かにどっかの頭のネジはとんでるよ。まだ知り合って間もないよ

ああそうさ、アタシはムカついてるんだ。こんなボロボロになっても平然としてるフェイトに、俯くだけで何も言ってくれないアルフに。そして何より、'ブレインスキャン'なんて方法でしか大好きな人の事をわかってやれないアタシに!!

「もう、いい加減に話してくれないか？ アタシじゃテメエらの力になれないか」

「……………無理だよ、アイナ

あなたはあたし達にとってただの情報源で、ただの寝床を与えてくれる都合のいい同居人で、そして……………」

その先は、言わせなかった

「斬城刀」

『パスワード要求』

「136864072010187364087014783618  
5780647810476570183657466104  
082010084376566478927620176408  
568717648750617418764567650187  
465767410874657164580165718628  
037547546578016872635172835801  
764817230488127640812634161087  
465184598165081561874650151省略1  
108746508716351640851604856108  
4765781036457088613847561087645  
78165874608164876581064。きみにたも  
うことなかれ」

認証コードを口頭で入力し終わると、アタシの身体は機械に包まれていた

これはアタシが作った最高傑作の一つ。名を残城刀と言う

昔、城をぶつた斬るなんてシーンがある映画を見たとき、実際にやってみたいと思ってこれを作った。城を斬る為の衝撃吸収とアタシの趣味でこんなトゲトゲした顔だしアイアンマンみたいになっている

「あ、あなた」

「アタシってさ、結構温厚な方だと思っし、アンタも色々溜まってんでしょっけび……………」

手に持った、2メートルを超える日本刀をアルフに向ける

「こっちもいい加減、堪忍袋の緒がキれるよ。タタツ斬るぞオラ!!」

「いい加減にしやがれ」

刹那、耳元で凄まじい音が響き渡った

残城刀の効果で強化された聴覚に黒板の引っ搔く音はキツすぎる  
!!

「アイナァ。そんな物まで持ち出して喧嘩のつもりですか?」  
主人、怒るよ」

いつのまにか後ろに立ってた藍が死ぬ程怖かった。そして藍はぐ  
るんと首をアルフの方に向ける

「アルフさんも、さっさと吐かないと、いろいろ削りますよ」

「ひいつ!!!」

ヤバい。これ藍がマジで怒った時のやつだ。藍の背中から般若は  
見える

「主様、アルフさん。覚悟はいいですか?」

右手をバキバキ鳴らしながらこっちに近付いてくる。いや、やめ  
て。こわい、たすけて—————!!

「「「めんなさいでした」」

「よし、許す」

そして、アルフはポツリポツリと語り始めた

フェイトの母親にジュエルシードを集めてこいと言われた事、その過程でなのはとぶつかった事、そして報告に帰ったらフェイトへの酷い暴行

「あのばばあ、どうかおかしいんだよ。あんなに頑張ってたフェイトにあんな仕打ち……。許せないよ……。」

「……。ま、やっぱり魔法関係者だったのかーとか無駄なやり取りは省くとして……。どう思うっ？」

そう言って、藍に振る

「どうもどうも……。魔法世界に警察があるのかどうか知りませんが、そう言う機関に連絡するのが普通の反応でしょう。明らかに児童虐待ですし」

「いつかこいつが口走ってた管理局だな……。そう言うのを取り締まる法律が有るか無いか知らないが、アタシ達に連絡手段がな

い。飯にあったとしても……………」

「フェイトが絶対に納得しないよ……………」

アルフは三角座りで、顔を埋めてしまった

小さくブツブツ呟いてるアルフを見ると、後ろの扉が急に開く。フェイトが起きて来たのだ

「フェイトッ!! もう身体は大丈夫なのかい!!」

「うん、むしろ調子がいいみたい」

酸素カプセルに特性の治療薬。後、色々危ない薬も使ったので身体はすぐに回復するだろう。まあこんな短時間で動くなどとは言いたいが

「よかった……………」

「それで……………アイナさんと藍さんに話ちゃったんだね」

「あ、ああ。ごめんよフェイト。勝手な事して……………」

「いいよ、アルフは私の事を考えてやってくれたんでしょ?」

そんな会話がしばらく続いて、フェイトはこちらを向く

「アイナさん。治療、ありがとう」

「おっ」

「でも……………もうおなごなごです」

そう言ったフェイトの姿は掻き消えて、そこでアタシの意識は途切れた

最後に、ごめんと聞こえたのは間違いじゃないだろう

夢は、記憶の整理である

しかし整理する必要もない位、アタシの記憶は普段から整理整頓されていて、そのせいか知らないがアタシはほとんど夢を見ない。見たとしても、それは整理したくもない最悪な記憶だけ。見た事のある夢は悪夢しかないのである

『消えろ。消えろ!! この出来損ない!!』

だから当然、悪夢

夢を見る時は見たくもない最悪な記憶ばかりを見せられる

『消えろ壊れる死ね!! お前なんて産むんじゃなかった!! 全然違う。この出来損ない!!!!!!』

最悪の中でもこれは死にたくなる部類のやつだな。ほんと、いつまで引きずってんだか……………

『くそお。畜生……………なんでだよ……………どこに失敗の要素があったんだよ……………』

いい加減、目覚めてくれないかな？　いつまでも喚き散らす自分、  
なんか見てたくない

『なに？　アンタまだいたの？　いいから消えてよ。その顔で、その  
声で、私の名前を呼ばれたら虫酸が走る。いいから私の前から消え  
る。消えろおおおおおおお！！！！！！』

ああ目覚めるな。そんな妙な予感を感じた

……………な

あい……………

「さっさと起きろ!!バカ主!!」

「ジンチュウ!!」

人中。人の急所の一つ。ふざけて殴る中高生は多いが、マジで死ぬ  
事もあるのでやめましょう

「藍」

「はい、あなたのメイドの藍ですよ」

「スリーサイズはグボア!!」

そんないつものやり取りをしながら思い出す。 ……そうか、アタシはフェイトに殴られて……………

「ってこんなアホなやり取りしてる場合じゃないじゃん!! フェイトとアルフは……………」

「二人ともアイナ様が寝てる間に行ってしまったよ、ジュエルシールド探した。ついでになのはさんも今頃搜索中……………」

そのとき、センサーに反応があった。どうやらジュエルシールドが発動したらしい

「……………行く気ですか?」

「当たり前」

「はい。そう思って対魔法戦型に残城刀をカスタムしました。フルスペックには届きませんが、とりあえずなんとか成るでしょう」

今回はえらく協力的である。いつもこうだと嬉しいんだけどね

「さて、残城刀」

『パスワード要求』

アタシが空をアンチグラビティで飛んで現地についた時は、まさに

木が化け物に変わる瞬間だった

そこにフェイトが魔法弾を打ち込むが、バリアーだかなんだかに防がれる。普段だったらバリアーの存在について小一時間は考察を述べてやるが今回はなしだ

「重力倍加」

そう呟くと、化け物の周囲の重力は倍に成る

「アイナさん!!」

「アイナ……………」

なのはは驚きの声。フェイトは俯いてしまう。とりあえず無視して

「残城刀、リミットブレイク」

『認証』

アタシは日本刀を、縦に薙いだ

この日本刀には仕掛けはない。ただ、有り得ないくらい固いだけ。仕掛けがあるのはこの機械のスーツ、異常な硬度を誇る素材を使用しダメージや衝撃を自分のエネルギーに変換する特殊な機構をしている。それを無限ループさせる事によって発生する膂力は、一撃で城を碎き割る!!

「らあああああああああああああああああああああああああああああ  
あ……………!!!」

昔、ナナカから刀必要ないじゃんと言われた事があるが、気にした

ら負けだ

一刀両断、木の化け物は縦に両断された

なのはとフェイト、そしてアタシの間に気まずい沈黙が流れる。それを破るのも年長者の役目だろう

「やいやいこのバカフェイトさん!! よくもまあ女の子のお腹をおもっくそ殴ってくれましたわね!! ツーかどいつもこいつもアタシの事殴り過ぎ!! いい加減泣くよ」

言いながら悲しくなって来た。アタシが一体何をしたってんだ!!

「アテナ……………」

「いゝよ」

「軽いよアテナさん!!」

まあぶっちゃけそんな怒ってないし。殴られるの慣れてるし。……………どっしてこんな事に慣れてんだ? アタシ

「ちつてよ、今この場を持って宣言させておっか。

アタシは、アタシ個人でジュエルシードを集めさせてもらう。フェイト、なのは。てめえら敵だ!!」

フェイトの事情も、なのはの決意も知った事か!! もう全部に喧嘩売ってアタシの思い通りにしてやる

「えっと……………アイナさん？」

「悪いが今ここにあるジュエルシードは頂くぜ。異論も文句も言わせません」

悪いが今回は冗談のつもりはないぜ。つー訳で

「グラビティバインド」

指を一つ鳴らして、なのはとフェイトの周りの重力を3倍にする

「え!？」

「なっバインド!!」

本気で攻撃されると思ってなかったなのはは驚きの声を、魔法を使えないと思っていた(実際、使ってないけど)フェイトもやっぱり驚きの声をそれぞれあげる。知った事かと思いつながら、封印処理の為にプログラムを立ち上げた

「ジュエルシード、シリアルV.I.I。解析開始……………完了。  
斬城、封印処理お願い」

『了解』

キュインつと音がして、ジュエルシードを覆っていた魔力が消え去



「おお、次はなのは……………」

先は言えなかった。なのはに注意を向けてしまった為、フェイト達への注意がそれたのだ

黄色の刃が装甲を叩く。ガリガリとHPゲージは削れた

「フェイトオ……………」

「アイナ。……………アイ、ナ」

耳元で鳴り響くアラートを思考から外して、フェイトに向き直った所で緑色の光がアタシを縛り付けた

「グッ……………ユーノか」

「なのは!! 今のうちにバインドから逃れて!!」

「う、うん……………レイジングハート!!」

『Yes・Master』

電子声が響き、なのはの脚の翼が大きく羽撃くと超重力下にある空間から脱出した

「……………こんなもので、アタシを縛れると思ったか!!!」

危険域覚悟で斬城の出力を全開にする。そして本来なら力で破れるはずのない魔法の力をぶち破った

「そんな!! チェーンバインドまであんな簡単に!!」



そしてアタシは死んだんだ

「ストップだ!!」

そんな声とともに現れた少年は、フェイトとなのは、そしてアルフの攻撃をいとも簡単に止めてしまった。結果、アタシ無事

「ここでの戦闘行動は危険すぎる。時空管理局執務管、クロノ ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

助けてもらっという何だけど、えらっそうながきだな。あのエセ金髪といい勝負じゃね？ そして一瞬出来た隙を見逃すほど、アタシはお人好しじゃない

「らあああ!!」

めちゃくちゃに日本刀を振り回して、一瞬でも距離をとる

「な!!」

「甘いぜ坊ちゃん」

管理局と名乗った警察だ。つまりは逃げるが勝ちだぜ。お上からは逃げるに限る

クロノと名乗った少年の目の前で閃光弾をぶちかます。それに巻き込まれたなのはとフェイトの動きも止まった。その際にジュエルシールドを奪取し、高々と宣言する

「残念無念、また来年!! このジュエルシールドは頂いた!! そしてそのまま……………」



「聞いてねえ、確定してんじゃん」

疑問系とはなんだったのか

「だってさあ、ムカついたんだもん。自分の事情ばっかのフェイトにも、自分を蔑ろにしてまでジュエルシード集めなんてやってるのにも」

『それでもなんかやりようがあるでしょうが!! 本当にもいつも突拍子もない馬鹿ですね!! っーか本当にどういっつもですかああ!!』

「ははっはー!! こんだけバカバカ言われてたら気にならなくなってきたぜ。泣ける

まあいいや。人工衛星からの映像あさって、あの後どうなったか教えて」

『……………本当におばか。フェイトさんとアルフさんは逃走。なのはさんは管理局に連れて行かれました。管理局の位置はこちらの認識範囲外です』

てことは世界は他にもあると。うん、ユーノの話から何となくそうじゃないかなーなんて思ってたけど、実際に違う世界に行かれるとめんどくせえ。

だいたい、観測出来ない事象って何ですか? それは神様がどうのこうのって問題になってくるから哲学の領域ですよ。はっきりに言っ門外漢。エヴェレットだったら小一時間は語れる自信があるが、認識の相違から来る多重世界の話であって、本当にあるなら色々違ってくるだろ!! この世界の他に違う世界が存在してる可能性も考えた事があるが、余りに荒唐無稽だった為すぐに没にした可能性だ。それが今、現実存在する。悪魔の証明を試してみろって言ったら本当に悪魔

を連れてこられた気分だけ。まあ魔法が出て来た段階で、アタシの現実にはぶっ壊れてんだけど。今後は多元世界と呼称して考察を続けて行く

さて、この地球にいる限り観測出来ない物はなにか？ 答えは地球である。いきなりトチ狂った訳ではなく、観測者には観測者自身を直接観測する事は絶対に出来ないと言いたいのだ。鏡を見なければ、自分の顔を知る術はない。逆に言えば、自分自身以外なら観測する事が出来るのである。何が言いたいかというと、地球にいて他の次元世界を観測する方法は必ずある。その方法もあのクロノとか言う魔導士が現れた時に大方見当はつけた。後はトライ&エラーを繰り返せば次元移動も夢じゃないだろう。問題はやっぱり物資だが

「管理局の場所の見当なら付いてるからいいよ。」  
「う」

「.....」  
「もしかしたらフェイトが帰ってくるかもしれないからアンタは家で待機。もし帰って来たらアンタはフェイトの力になったって」

藍は沈黙を続ける

「アタシは次元世界の理論をもう少し煮詰めたいから、他の研究所に行くわ。多分二週間は缶詰になってると思う」

「.....」  
「アイナ様。最初の質問に答えてもらってません」

「んー？ 本当に馬鹿かどうかと聞かれたら、馬鹿とんんとかは紙一重としか言えないねえ」

『アイナ』

少し本気で怒った時の声

「……………なの目的と、フェイトの願いを同時に叶えるにはアタシが敵になるのが一番いいと思ったただだけだぜ」

『な、なんですかそれは!!』

そこまで言って通信を切った。いや、切らざる得なかった

「久しぶりだぜ。クロノ ハラオウン執務管どの」

さて、あの辺りにジャミングをかけていたはずだが……………さすが魔法。あの一带は1時間ほどは電子機器のたぐいは完全に使えなくなるってのにどうやったんだか。しかも今アタシの身体は光学迷彩起動してて見えないはずなんだけどなあ……………ほんと、いい研究対象だぜ

「……………抵抗しなければ、君には弁解の機会が与えられる」

「ただし抵抗すれば即有罪ってか？ 裁判所がキレていいレベルの暴論だぜ」

さて、この子の実力はさっき見たばかりだし勝てそうにない。奥の手使って、藍のバックアップ全開でどうにかと言ったレベルの相手だ。それに逃げる方法も思いつかない、こいつのバックが一体どんな方法でアタシを追跡してるのか皆目見当もつかない……ってああ、そうか

「アタシにもカスみたいないな魔力があるんだっけ？ それを追って来たのか」

「っ。君は………何者だ。職業柄、多種多様なバリアジャケットを見て来たが君のは魔力を一切感じない。それどころか、君から飛行魔法や重力操作が出来る程の魔力はないはずだ」

どうも、こっちの手札はあんまりばれてないみたいだね。と言ってもなのはが向こうにいる以上すぐにばれるだろうけど。だったらアタシの答えは一つだ

「悪の天才科学者。相坂 アイナさんだぜ。よそよそしく相坂さんでも馴れ馴れしくアイちゃんでも好きに呼んでくれたまえ、しょーねん」

「なっ、全然答えになっ…」

最後まで言わせるつもりはない。向こうがこちらを探知する方法がわかっただら簡単だ、一時的に死んで魔力の痕跡を消せばいい。死んだら魔力というエネルギーが消えるのは検証済みだ。斬城を自動操縦に切り替え、心臓一時停止、脳波パターンを可能な限り平坦に、  
オフ、ぼんぷ……起どう、のう死ぱターン……い、こ  
う……

―クロノ視点―

ガクン

「なっ……………え」

首がヤバい方向を向いたと思ったら、目の前の彼女から魔力の反応が消えた。つまりそれは……………死んだと、言う事だ

「そんな……………そんな……………!!」

追いつめられた犯罪者が自ら自決するパターンがある事は研修で聞いていたが、こんなにもあっさり何にも出来ないなんて。自決するような前兆はなかったのに……………そんな考えが頭の中をグルグル周り始めた所で

『しっかりしなさい!!』

「っ!! 母さん……………艦長」

『いまのはどうしようもなかったと割り切りなさい。反省は後でいくらでも……………』

母さんな激励は途中で止まった。それはそうだろう。なんせ死ん

だはずの目の前の死体が高速で飛んで行ってしまったのだから

「し、しま!!」

『……………どうやらいっぱい食わされたようね。あの速度には追いつけないわ。魔力反応もないから補足も出来ない……………。でも彼女が生きていてこの地球にいる以上、必ずこちらで補足出来るわ。とりあえず今回は一人を確保出来ただけよしとしましょう』

「……………はい」

そう呟いてゲートを開く。彼女が飛んで行った方向を見ながらゲートに入った

## 激突

「なのは視点」

「ここはアースラ、なんたら時空なんたら艦なんたらつて長い名前のお船です。色々あって、色々あって、本当に色々あって、今ここにいます」

「アイナさんを確保に行ったクロノ君が帰って来て、ジュエルシードを自力で集めようとしていたのを怒られて、フェイトについて聞かれて、そして」

「これが最後の質問よなのはさん。あのアイナと言う少女………  
「一体何者？」」

「アイナさんが何者か………えっと、すごく頭のいい科学者さんで、お父さんのお友達で、それで………。私に大切な事を教えてくれた人です」

「そう、アイナさんが裏切ってジュエルシードを奪って逃げたのだ。いつも何を考えてるかわからない所が多かったが、今回はいつもに増して意味がわからなかった。アイナさんと言えば変人も変人、自分の世界に入り込んだと思ったなら次は叫びだして藍さんに殴られる。その光景が余りになじみすぎて、あの人を危険人物の超天才と忘れてたのかも知れない」

「僕の印象では、奇人変人と言った所です。そしてレアスキルと言ってもいい程の凄まじい頭の良さや知識、そして何より手に入れた知識をいとも簡単に応用し、機械を作成する技術力。重力を操り、空を飛び、ジュエルシードを簡単に見つけ出すセンサーを創りだし、魔法じみた事を全て魔法なしでやってのける凄まじい頭脳の持ち主」

……。ただ普段の彼女はただのギャグ要因にしか見えないんですがね」

「それはレイジングハートさんの記録を見たからわかる気がするわ……しかしアイナさんが、相当な危険人物みたいね」

それはそうだろう。隙を見せれば怪しい機械や注射器を持って『コククナイヨー。天井ノ染ミデモ数エテタラ終ワルヨー』とか言ってる

知り合いになった事を後悔はしないが、ため息をつきたくなる事はよくある

「死んで魔力の痕跡を消して逃走するなんて正気の沙汰じゃないですよ艦長!! 彼女は危険です。今すぐに追跡を」

「うーんそうしたいのはやまやまんだけどねえ、未だ仮死状態を解いてないのか、解かなくても行動する方法があるのかわからないけど、未だに痕跡すら見つからないのよ。彼女本当に優秀だわ」

「か、艦長!! そんなのんきな……………」

クロノ君とリンディ提督はとんでもなく甘そうなお茶を飲みながら大声で話し合っていた

管理局に手伝いを申し出て、一端地上に降りて家族と友達に挨拶して来る様に言われた。

母さん、アリサちゃん、すずかちゃん。大切な人に魔法の事を内緒にしながら説明するのは少し骨が折れた。そして最後にユーノ君と一緒に訪れたのは

「ここに来るのは、久しぶりだね」

「うん……………」

アイナさんの研究所だった

もちろんいるとは思ってない。いたとしても管理局にいの一番に搜索される場所だろう、でももしかしたらなんて思いがあった、もしかしたらいつもの様に『おや？ 実験台にでも成りに来たのかい？』と言ってくれるかもしれない。そう思って鍵のかかってない扉を開けた

「オラァ フェイト様!! どこほつつき歩いてやがったんだ!! どうせジュエルシード探しの拠点なんてここしかないんだから迷わず帰って来いや!!」

「口調がおかしくなったランが怖い!!」

そこにいたのはフェイトちゃんにアルフさん、そしてアイナさんの  
シッコロミ役の藍さんでした

入るのをためらっていた私は藍さんに引きずりこまれる形で研究所の中に、そしてなぜかお茶を啜りながら藍さんの話に耳を傾けてい

た

「さて、取り乱しました。皆さんには家の大バカ糞バカ弩バカアイナ様が本当にご迷惑をおかけしたみたいで申し訳ありません。今回のお詫びはあの真バカの腹をかつ捌いた上で首を斬りますのでご容赦ください」

「えっと、なにもそこまでしなくても……………」

「ううん。アイナは一度、本気で酷い目に合った方がいいと思う」

「ええ!! フェイトちゃんまでバイオレンス!?!」

そんなこんなで、本当になぜか知らないけど藍さんがいた。

……………なんで?

「ちなみに私なんでここにいるかと言うと、あの絶バカに置いて行かれたからです。その後連絡でボコスかに文句言っておいたけど絶対に懲りてないから99/100殺しとかなきやいけないね? 具体的には死ぬ寸前まで飯抜きとか」

ふふふふふふふふ……………とか怪しい笑みを浮かべる藍さんは置いて、あの悲しそうな目をして泣いていた女の子が目の前にいる。何か言わなきゃいけない事があるあつたはずなのに、この場に立ってしまったらもう言葉なんか出なかった

「フェイトちゃん……………」

「え、えと……………」

なんだろう、この小動物みたいな子。凄く可愛いんだけど、凄く可愛

いんだけど!!

「フェイトちゃん……………」

「この衝動、どっしたらいいかわからない!! いっそどこかにぶちまけようか!? うん、なんか私も壊れて来た。こんなの私のキャラじゃない!!

「……………なるほど、そう言う事ですか。あなた達のやり取りを見て、アイナ様の狙いも見えました」

「バカの頭につける言葉のネタが無くなった?」

「フェイトちゃんの酷いツッコミが入る……………フェイトちゃんってこんな子だったかなあ?」

「さてと、私としてはフェイト様の味方ですし、なのは様の味方でもいたいとも思っています。だからフェイト様は今すぐ管理局に出頭しやがれと言いたい所ですが、そう言う訳にはいかないでしょう。だからなのは様はフェイト様を見逃して管理局にも報告しない」

「なっ!!」

「……………」

「ユーノ君が頭の上で声を上げるが、私はどうしたらいいか解らなかった。この寂しそうな目をした女の子をどうしたいのか、いつも辛そうな目をしたこの子になんて言ったらいいのか、どうしたいのか、どうなりたいのか、今この子の前に立っても解らない」

「その代わり、私が管理局に出頭して次にバカ主人が現れた時に殺し

ます。ミンチにします。分子レベルで消し炭にします。焼きます、搾ります、轆きます、マジでぶち殺します。ツ一訳でなのは様、フェイト様はほっとして今すぐ管理局に行きましょっ

「え、えと、管理局っていつかアースラって言う戦艦っていつか……ちよ、ちよっと引っ張らないで!! 藍さーrierん!!」

そんな思考に陥っていると、なぜかいきなり暴走した藍さんに引きずられる形でアースラに帰って行く事に言った

「と訳で、今日からこのアースラにお世話になります藍と言います。一応、メイドの真似事しておりますので最低限の仕事はさせていただきますくつもりなのでよろしくお願いします」

そしてと言うかなんと言うか………なんか大量の機材を部屋にぶちこんで居着いてしまった。謎の多い人だとは思っていたけど、ここまで行動力の溢れる人だとは思わなかったなあ。しかしと言うかなんと言うか、この人もいろいろおかしな所が多いです。例えば………

「おら、その武装局員ー。あと1分くらいでご飯できるから台所に入ってくんじやない。ここは女の戦場………なに? 私も女だつて? んじゃメイドの戦場です」

とか

「掃除くらいまともにも出来ないんですか？ あ、ホコリ。私ハウスタストに凄く弱いんです。まったく、結構配線がごちゃつとして掃除に時間がかかって仕方ないですね。くそ、裏技使って10分で終わらせる!!」

やらに

「リンディ様、緑茶に砂糖とミルク入れるんですね。……………入れ過ぎです。別に入れるなんて言いません、入れ過ぎはお茶を入れるメイドに喧嘩売ってると思われまますからインスタントだけにしてください。……………よし、喧嘩売ってんですね。こうなったからクソ甘い緑茶作ってくるから待ってやがれ」

などなど

たった1週間で携帯食料が主流だったアースラの食事を改善し、アースラの船内がどこに行ってもホテル並みの掃除の行き届かし、リンディ提督の緑茶をスペシャル緑茶(健康にいい甘党の人も大満足緑茶)に変更させるなど、アースラ内で陰の支配者的な地位になりつつあった。そしてアイナさんの陰に隠れて解らなかつたけど、あの人も変人である。無駄に高いスペックに、すずかちゃんの家のメイドさんを知ってる私としては信じられないおかし口調。そして世話焼きスキルに面倒事にはなぜか必ず首をツッコミ出歯亀精神……………この人いったい何者なのか凄く気になるなのです

「なのは様、紅茶のお代わりはどうですか？ 桃子様にはかないませんけど、それなりの味は出せてると自負しています」

「え、えっと……………じゃあお願いします」

「かしこまりましたと、しかしこの次元空間航行艦船と言いました

か……マスターには見せられないですね。あのバカ様がこんなの見たらどんな反応するか考えただけでも怖気がします。さらに言うとその後に作ると思われる無駄発明品も」

「えっと、藍さんってアイナさんのメイドなんですよ。今更ですけどバカとか言っていないんですか？」

「では、ヴァカと言い直しましょう」

もう何も言うまい

持って来たティーポットで私のカップに紅茶を注ぎながらのこの言い様。すずかちゃんの家の子メイドさんって凄くまともだったんだなあ。メイドがいる時点でまともじゃないとかツッコミは置いて

「さてと、ジュエルシード集めが順調な様で何よりです」

「私達が手に入れたのが3つ、フェイトちゃんが1つ。それで残りは6つらしいんだけど……全然見つからないらしいんだよね。藍さんがくれた海鳴の精巧すぎる地図とジュエルシードセンサーのおかげで思ったより早く回収が進んでるらしいけど」

「しかしセンサーに反応がないとなると、やっぱり海に落ちたと考えるのが妥当ですねえ。一応サルベージの機械も運んで来た方がいいんじゃないでしょうか？」

そんな物まであるんだと、若干あきれつつ手しまう

しかし、こうしているとアイナさんの事とフェイトちゃんの事を考えてしまう。藍さんにアイナさんが裏切った理由について聞いてもあのバカ殺すしか言わないので話にならなくなり、フェイトちゃんに至っては実はちゃんと話せた事がない。一体どうしてジュエルシー

ドを集めているのか、なぜあんな悲しい目をしてるのか、私には知る術はないのだ

「……………藍さん、アイナさんの居場所について本当に心当たりはないんですか？」

「ありますよ、868056784849件程。まあ主人の持つ研究所の数なんですけどね」

そんな調子でかんじんな事は結局なにも喋ろうとしない藍さん。見つからないジュエルシード。私たちにやれる事は今は何も無いのだ

「まあ、バカ主人の狙いなんかは見当付いてるからそんなに心配しなくても大丈夫ですよ。次に現れたら私が殺すから問題ナッシングです」

「じゃはは……………」

もう失笑しか出ない

そんな話に花を咲かせていたときだった。耳をつんざく様な警告音、モニターのemergencyの文字。それが聞こえたとき私たちはブリッジに向かって駆け出した

「リンドバーグとさ！！」

「来たのね、なのはさん……………」

モニターを見ると、巨大な魔法陣の上で呪文を呟き続けるフェイトちゃんの姿があった

「全く……………なんて無茶をする子かしら。いえ、無茶を通り越して無謀ね」

フェイトちゃんは残りのジュエルシードが海にあると思って、魔力溜を叩き込み無理矢理発動。その後、封印回収するつもりらしいのだが……………それは余りに

「無理ですね。発動状況にもよりますが、消耗した状態で最大6つもジュエルシードを封印出来る可能性はほぼ零です」

藍さんの台詞は、その場にいた人間の心を代弁していた

「わ、私すぐに現場に……………」

「その必要はない、放っておいてもすぐに自滅する。しなくてもその後を叩けばいい」

「そんな!!」

それはきつと大人の判断なのだろう、事実リンディさんも肯定する様な事を言った。でも、そんなの許せる訳が無い。そんな事を許していい訳がない!!

『なのは!!』

突然、テレパシーでユーノ君の声が届く

『なのは、行って。撲もなのと同じ気持ちだから』

『でも……………』

『大丈夫だよ、転送は撲がやる。だから行って!!』

それ以上の言葉は必要なかった。私は転送装置に向かって駆け出して、中に入る

「なっ!!」

「なのはさん!!」

「すみません!! 高町なのは、指示を無視してして勝手な行動を取ります!!」

海鳴上空。レイジングハートを手に、空を飛ぶ。下に見えるのは魔力溜を海に叩き込もうとしているフェイトちゃん。声を張り上げて止めようとした

本当にその瞬間だった

「変なもん発動なんかさせんじゃねえぜ。めんどくせえ」

すっかり聞き慣れてしまったその声が、聞こえて来た

ーアイナ視点ー

とりあえず、魔法に詳しくないアタシですら解る無茶をしようとしている金髪居候にドロップキックをぶちかました

「まったく役者が揃うのが遅すぎるぜ。とこんな事言ってる場合じゃなかった。斬城、やって」

『ジュエルシード搜索……………完了。座標表示』

「OK、重力反転。ジュエルシードを我が手に」

海の底のジュエルシードを確認した時点で、ピンポイントで重力反転。さらに多少の操作を加えてアタシの掌にジュエルシードを修める事に成功した

「フェイトちゃん!!」

「……………くっ」

弾き飛ばしたフェイトになのはが駆け寄る。おーおー、微笑ましい光景だねえ。この時点で目的の8割は終了してんだけど、ここまでお

膳立てしてなにもしないってのは違うよねえ

「さてさて、我が家の居候ちゃんどどっかネジのトンだ主人公ちゃん。アタシの手にはアンタ達の求めるジュエルシード。もうこの時点でアタシ達は戦うしかないぜ？ ユーノもアルフももちろんかかって来な、どつせなら管理局の皆様方も巻き込んでの大乱闘と行こうじゃないか。なあ、皆様方」

―視点なし―

最初に動いたのはアルフだった

叫び声を上げながら魔力を充電させた拳をアイナに向かって叩き付ける。しかし、そんな物でアイナの斬城が微動だにするはずもなかった。衝撃を自身のエネルギーに変える事の出来る特殊な機構、この1週間でさらに強化したそれは魔力を込めた拳をいとも簡単に受け流す程のものだった

「ははっ!!」

アイナは軽く笑い飛ばすと、アルフの拳によって生じたエネルギーを拳に乗せてアルフに叩き付ける。その衝撃はたった一撃でアルフを戦闘不能にする程だった

「アルフ!!」

「さあ!! 惚けてる場合じゃねえぜフェイト!! こないならこっちから行くぜ」

アイナは背中に背負った身の丈程もある巨大な日本刀を抜き放つ。そして縦に振り下ろした。

「ッ!!!」

「フェイトちゃん!!」

飛ぶ斬撃……………ではなく音速を超えて振り下ろした事によるソニックウェーブ。なのはが横から吹き飛ばしたことでなんとかフェイトは無事だった

「フェイトちゃん!! しっかりして。アイナさんが何を考えてるかなんて解らないけど、お話すれば話し合えればきつと!!」

「……………な、のは?」

「っ!! 初めて名前、呼んでくれたね。うん、なのはだよ。高町なのは。私はあなたに伝えたい事が……………」

「チャラチャラ喋ってんじゃねえ!! ぶちまけるぞオラア!!」

何かを喋る暇なんて与えない。そんな事を言いたげに腰に装備したレールガンをぶちかます。それは緑色のバリアーによって防がれた

「ユーノか……………。はっ!! 来んのが遅えよ!!」

「アイナ……………もう僕は、あなたの事を敵とみなします」

「遅え遅え!! ズレてんだよテメーらは!! 敵? 味方? そんなのを一体どんな根拠で確認するつもりだよ。だがまあそんなに言っただけなら言っただけでやるぜ。今のアタシはテメーらの敵だ!!」

アイナは右手を突き出す。重力操作、自重の数十倍の重さがこの辺り一帯の全ての物質にかかりだす。もしもここが海の上空でなかったら大震災でも起きたかの様な惨状になっていただろう

「デイ バイーン……………バース  
タ—————  
!!!」

とんでもない重さを無理矢理支えながら、なのははレイジングハーフトを構え砲撃をぶちかます

「ちっ!!」

アイナは小さく悪態を付いたかと思ったら、桜色の砲撃を右手で受け止める

「ってえ……………。斬城でも受けきれないとかどんなバカ威力だぜ。トランスの直撃くらいだったなら軽く受け流せるんだぞこれ」

「そんな事を呟いてる場合か?」

アイナがハッとした時にはもう遅かった。青白い魔力弾が斬城の間接部を正確に貫く

『出力の30%ダウン。戦闘行為に支障ありません』

アイナの耳に斬城の報告が届くが彼女には聞こえない。ハンマーで殴られた様な衝撃に晒されていたからだ

彼女は研究者であってプレイヤーではない。彼女の人生の中で2番目に相当する痛みだった

アイナはすぐさま首筋に注射針を突き刺す。そして動脈に何の躊躇もなく薬品を流し込んだ

「……………君は、本当に正気なのか？」

「ただの痛み止めを打っただけでそんな目で見てるじゃねえっての。臨床実験も完了してる薬だから問題ねえ。……………効き過ぎで、しばらく不感症になるけどな」

それでも首から注射しなくてもいいじゃないかとアイナ以外の全員が思った

「さてと、フルキャストになった所で……………アタシも奥の手と行くっか!!」

アイナは左手を突き出す。右手には重力を操る装置が内蔵されていたが、それとは違う形をしていた

バチバチと音を鳴らしながら、それは帯電していく

「さあて!! 泣いても笑ってもこれが最後だぜ!! デイバインバスターをアタシなりに再現した反粒子法!! マスター……………スパー……………ク(笑)!!!」

「……………場面でネタをぶち込んでんじゃねえええ!!」



『……………皆さん。私の合図で本気の一撃をアイナに向かってかましちゃってください』

その声はアイナ以外の全員に届けられ、その怒気に圧倒されたその場の皆は杖をアイナに向けて構える

「ア、アレ？　もしかして許容量をオーバーした攻撃は受け流せないってばれた？　つーか藍が教えた？　そしてアタシの発明品を勝手に使うな!!」

「死ね。スタングレネード」

藍は無造作に取り出した銃をアイナに向けて撃つ。3ミリ程の弾はアイナの前でとんでもない光と音を撒き散らしてアイナの視力と聴力を奪った

斬城には致命的な弱点がもう一つある。それは機械によって知覚を強化してるため、強烈な音や光に弱いのだ。ちょうど虫眼鏡で太陽を見た時の様に

「のぎゃあああああああ……!!」

「今です!!」

藍は叫ぶと同時に銃弾をもう一つ放つ。それは速度が早いだけの軽い弾。しかし斬城の計算を狂わせるシルバーバレット

「んがっ」

それがアイナの脇腹に叩き込まれる

「じゃあ　ちよびゃー」

「マヨネーズなんていりません」

藍のそんな台詞と同時に

「デイバインバスターーーーーー!!」「サンダースマッシュャーーーーー」「ブレイズキャノンツ!!」

「ネタに走ってる場合じゃねって計算狂って間に合わなーーーー」

空気を震わす程の衝撃をその身に受けて、アイナは海の底に沈んでいった

海の底に沈んでいったアイナを見ながらフェイトは呟く

「なんだかいつも通りの展開になっちゃったけど……………いいのかな」

「いいんです。あのバカにシリアスなんて担当させません」

「ってアイナさん沈んで行って浮いてこないよ!! いいの!?!」

「え? いいに決まってるじゃないですか。これであのバカも無事にあの世に行けたでしょう。これで世界は救われました、比喩なしで」

「本当にアイナさんを殺す気だったんですか!!」

なのはの叫び声と藍の飄々とした態度。そこにフェイトの馴れた様子でいなす。ここにアイナが居ればさぞかし面白い事になっただろう

「さて、なのはさん。フェイト様と共闘して、アイナのバカ様をぶっ飛ばして、それでどうですか？」

「……………うん、解ってってる。違うね、解ってた、だね」

なのははそう言つとフェイトの方を向いて言った

「フェイトちゃん。あなたと友達になりたいんだ」

その言葉を、やっとの思いでなのははフェイトに伝えたのでした

(アイナ様も本当に回りくどいですね。この2人を友達にしようとしてわざわざ共通の敵になるなんて。今回の件でアイナ様が必要かどうかと聞かれたら答えられませんが、まあお仕置きはこの程度にしておきましょー)

アイナの目的。今回わざわざ敵に回ってまでこんな事をした理由はフェイトとなのはを仲良くさせる為だった。その為だけに敵に回ってこんな事をしてかして周りを引っ掻き回して、今に至る。存外、相坂 アイナの思考回路は簡単に出来ているのかもしれない

その会話が繰り広げられてるその瞬間、アースラは蜂の巣を突いた様になっていた

「次元干渉!? 本艦に向けて魔力攻撃、来ます!!」

「な!!」

紫色の雷がアースラに直撃する。次元レベルでの魔法の運用、それは個人レベルでの魔法を大きく超えた力だった

「かあ……………さん?」

フェイトがそう呟くと同時に紫電が空から降ってくる。その雷は寸分変わらずフェイトを狙っていた

「フェイトちゃん!!」

なのはが声をかけた時に見た光景は、いつの間にか現れたアイナがフェイトの盾になって雷の直撃を受けた所。直撃を受けたアイナは血を吐いてフェイトに支えられる様に飛んでいた

「ア、イナ? え?」

「ちくせつ。海に叩き付けられた時に、胃に血でも溜まってやがったみたいだぜ」

「なんで、私をかばって……………」

その問いに答える暇はなかった、アイナが今度こそ気絶したからだ

「フェイト!! アイナからジュエルシールドを!!」

回復したアルフはフェイトに向かって叫ぶ。その声に反応したフェイトはアイナのポケットをまさぐってジュエルシールドを手にした。

そして彼女はアイナを抱えたまま、空に向かって飛ぶ

「行かせるか!!」

クロノの叫び。しかし高速型のフェイトに追いつけるはずもなく、彼女らを逃がしてしまった

## 親子

―アイナ視点―

夢を見ていた気がする。最近多いなあ

ナナカがいて、藍がいて、フェイトがいてアルフがいて、なのはがいてユーノがいて。皆で仲良くアタシが創ったゲームをする夢

生まれて初めてだ、こんな幸せな夢を見たのは。ああ、こんな絶対ありえない夢を見るなんて、アタシも焼きが回ったか

「ん、あ」

なんか色っぽい声が出て自分でドン引きだ。天井のシミを見つめて大きいため息をついて

「で？ どうだよ」

なんか紫である。どこ見ても紫である。一体誰の趣味だよ、悪すぎだろ

「起きたかい？」

「赤発見」

「起きて第一声はそれかい!!」

最近ツッコミ役が定着して来たアルフがベッドの横に座っていた

「……………で？ どうなった」

「……………」

アルフはこちらを値踏みする様な目で見つめてくる。いやん、アタシには視姦されて喜ぶ趣味なんて、趣味なんてえ!!

「ああダメだー。なんか頭がエロい方に飛んで行きそうだけー。寝起きてってなんかいろいろ頭バグるよね」

「はあ。本当は裏切った事についていろいろ言ってるつもりだったけどなんかどうでも良くなったよ」

それは何より

「アンタが気絶した後はフェイトがアンタを抱えてここまで転移したんだ。ここは時の庭園、あたし達の……………うん、実家みたいなもんよ」

なるほど、噂のドメスティックマザーがいる場所か。そしていつのもまにか次元転移経験してしまっていたらしい。くそう、いろいろ調べたかったのに

「アタシの斬城……………鎧は？」

「ああ、あのこいつい鎧ならそこにおいてあるよ、脱がすのに苦労したれ」

「だろっね」

一応、外部から強制パージ出来る様にしてあるが、発見困難な場所に小さな赤いボタンがあるだけ。むしろよく脱がせたなと感心した。そう思ってアルフに指された方を見たら、鉄くずが置いてあった



「迷子か……………何気に初めての経験かもしれない」

人生と言う迷路にはいつも迷ってるけどな!! うん、うまくともな  
んともねえ

「しかし本当に悪趣味な家だなあ。魔王城じゃねか」

いや、逆にセンスにあふれてるのか? ファッションや家の調度の  
センスには疎いからわかんねえ。服なんて寒くなくて恥ずかしくな  
けりゃそれでいいと思ってる人間だからなあアタシは

「随分と失礼なお客様ね」

「じゃうっ!!!」

突然後ろから声をかけられた。ビクックリした。ビククリし過ぎ  
で凄く可愛い声が出た。自分でドン引き(二回目)

「だ、誰だぜ!?!」

「……………本当に失礼な奴ね。まあ、いいわ。ついてらっしや  
い」

「生憎、知らないおばさんについて行っちゃダメってママから言われ  
た覚えがない。うん、一回もないな。むしろついて行って帰ってくん  
なみたいない目で見られてたな」

アタシの台詞は完全無視で冷ややかな目でこちらを見てくる。あ、  
違う、面倒くさい子を見る目だ。つーか自虐ネタのスルーってマジで  
酷くね?

「来なさい」

もう一度低めの声で言われて観念した。どのみち今の武装じゃ逆らえっこ無いしね。右手の充電にはまだまだまだ時間かかるし

連れてこられたのは玉座……………。つーか完全に魔王城じゃねえか

「さて、あなたは一体何者なのか、そこから聞こうかしら？」

「フェイトから聞いてねえのかよ……………。悪の天才科学者、相坂アイナさんですよ」

「そんなふざけたのはいらさないの。ジュエルシードを魔法なしで封印する規格外の技術力、そのバックには管理局の陰はない……………。単刀直入に聞いわ。ジェイル スカリエッティがあなたの背後にいるんじゃないの？」

おーと？ また新キャラかよ。交友関係の狭さに定評のあるアイナさんにはしんどいですよこれ

まあいいとして、問題は正直に答えるべきか否かである。そのジェイルさんとやらには全く覚えななかない。しかしそれを言った所で信じてくれるかも解らないし、第一目の前にいるこの女は噂のフェイト母と思われる危険人物である。政府機関である管理局に喧嘩だつて売る危険人物なのだ。善良で無垢なアタシには恐怖の対象以外の何物でもない

「はあ、そのジェイルさんが何者かなんて知りもしないけどさ。アンタは誰かいい加減に自己紹介してくんないか？ フェイトのお母様でドメスティックバイオレンスの鬼畜って事以外知らないんだけど」

あ、ちょっとこめかみが動いた。イラついてるな

「……………プレシア テスタロッサよ。ジェイル スカリエッティについて何も知らないのね？」

「知らねーぜ。アンタが信じるかどうかも知らねーけどな」

「そう……………では本題に入りましょう」

そう言ったプレシアは、杖を構えてこちらに向ける

「あなたが持っていたジュエルシード6つ。それにかけてプロテクトを解除しなさい」

彼女の周りにいくつもの魔力球。ああ、こんだけ食らったら死ぬな

「何の事だぜ？」

「とぼけるつもり？ あのジュエルシードにはプロテクトがかけられていたわ。フェイトに話を聞く限りあなたは魔法にアクセスする能力はない。しかしあのレベルのプロテクトは初めて見る、そんなレベルよ」

だろうねえ。魔法使いには解けない様に作ったパズルだし

「そうだね。アタシが仕掛けたよ

でも解き方なんて簡単だぜ？ スパコン並みの処理力があれば数分で解ける代物だ」

「インテリジェンスデバイスの並列操作で今処理中よ」

じゃあ無理だ。所々に機械では対処出来ないファイアーウォール仕掛けてあるから

「まあ交換条件と行くつもりじゃないか、ジュエルシードの封印を解除する代わりに……」

「あなたを殺さないで置いてあげるわ」

「……そんな悪質な交換条件聞いた事ねえよ」

取引じゃなくて脅迫と言っただよそれは。つかひでえな

「……あなたは今、この状況を予期していた節があるわ。だから交換条件を相当前に用意していたのでしょうか？ そんなヤバそうな条件を飲める訳ないでしょう」

「そりゃ買いかぶり過ぎじゃね？ そしてそこまでヤバい事言う訳っ  
「!!」

耳を紫色の弾が通過して行きました。冷や汗、そしてすこし耳が切れた。こあいつす

「聞く耳持たないわ。死ぬか解除するか選びなさい」

まじで死んだらいいんでしょ。まじでいせ

「とりあえずジュエルシード貸して」

「……………」

ジュエルシードがプレシアの杖から出現してアタシの手に収まる

「ちとど、えい!!」

で、ジュエルシードの偽物を右手の握力でぶっ壊した

「なっ!!」

「いやフツーに偽物だから。中調べたら完全に歯車で作ってるぜ?

ぶっちゃけ玩具。歯車で星を作った物語を読んで適当に作った奴だぜ?」

「あ、なた……………」

「ちなみに今持ってないぜ、こつなる事が予想出来たのにどうして持ってくんだよ? さて、今度はこつちが脅迫する番だぜ。ジュエルシードが欲しけりゃアタシの要求を飲んで貰おうか?」

「こつこつこつこつこつ!!」

ちとど、こちらに流れが来た所で……………」

次の日、プレシアがキレた

具体的にはアタシを連れて来たフェイトに当たり散らしてた。そしてそれを目撃したアルフがキレてプレシアに喧嘩を売り、ボコられ逃げ出した

「……………あれ？　これアタシのせい？」

藍がこの場に居たら『解ってんならやんなばけえええええええええええ!!!』とか言って心臓突き喰らわせてきそつ。いなくて良かったよ、ほんと

さて、プレシア改め糞BBAを蹴り飛ばさなきゃいけないぜ。アタシのフェイトになんて事をしてくれたんだ。あの子すっげえいい子なんだけ、この対人恐怖症のアタシが言っぐらいなんだから本当にいい子なんだよ!!　アタシが藍に自業自得でボコられてたら、『大丈夫、夫?』って控えめにタオル差し出してくんのよ?　しかも藍のご飯の準備も手伝っし、アタシが寝落ちしたら毛布かけてくれるし

「だからテメエにはもう少しフェイトと家族として接してやれって言ったじゃねえか。この温厚で定評のあるアイナさんもキレるぞ?　っーかキレてるわ」

「……………あの子は私の娘よ。あなたにとやかく言われる筋合いはないわ」

「いや、あの子はアタシの嫁だ。今度結婚する」

あ、青筋たってる。やりい

「……………ジュエルシード、渡す気ないのね」

そしてマジ切れ、やばい。っつってアタシもそこそこキレてるから引

く気はないけど

「ねえよ」

その言葉が引き金となった

目の前には紫色の大剣。あの紫が速攻で距離を詰めて振り下ろして来たのだ

アタシの動体視力は通常時はそこまですりでも無い。というか雑魚である。だから今この場に至るまでに薬を打っておいた

「っ」

軽く息を吐いて、剣を半身でかわす

打った薬は動体視力、思考速度、痛覚麻痺と言った効果をもたらす物。3週間前に作ったばかりの新薬だけでも問題なく効いている。キユイツと音をさせ、右手を紫BBAにカウンターであわせようとしたが、いとも簡単にすり抜けられてしまう。やっぱり戦闘は苦手

「あああああ!!」

紫BBAは声を出して大剣を切り返してくる。反応は出来るが返し技が思いつかない。しょうがないから右手で大剣を殴りつけて、その場を逃れた

「.....」

「あーくそ。やっぱり戦力差がありすぎるぜ」

つーか後衛みたいな格好してるのに、おもっくそフロントアタッカーなのな。そんな事を思っていると、数十の紫の球体にいつの間にかまれている!! やべえ!!!

「沈みなさい」

ポケットから取り出した自作注射器を自分の首に突き立て、躊躇してる暇がないので中の薬品をとっとと身体に流し込む。ドーピング薬は1秒以下の時間で脳に届き、脳にかかったリミッターを解除する。身体強化、薬は後々のケアが面倒いからあんまり使いたくないけど、どうしようもないのもう使う

紫の弾をドーピングで強化した知覚と肉体で無理矢理回避、しかしすぐに大剣による薙ぎ払いが来ていた

ギンッ

そんな鈍い音がして、アタシの右腕は切り落とされる。あ、やべえ。詰んだ

「終わりよ」

「間違いない。だったらイタチの最後っぺ位くらえ」

右腕をパージして自爆煙と音を発動。目をつむって片耳塞いだ瞬間に爆発して周囲を片栗粉まみれにさせた

「さて、逃げるか」

まあどこに逃げるんだって話だけどね。次元移動の理論自体は完成してるけど、機材がないから再現不可。さて、八方ふさがりとはこの事だ

「逃がすなんて思ってるの？」

逃げると呟いた瞬間、そんな声が聞こえて来て首と頭に衝撃。どうやら首を掴まれて壁に叩き付けられた様だ

「つてえな」

「ジュエルシードを渡しなさい。殺すわよ」

「……………」

死。はっきりいってそこまでの恐怖は感じない。と言うか、ナナカを殺した日から何度も自殺を計っている

死にたい、とまでは行かないものの生きたいとも思えなかった。ナナカの『幸せになって』と言う遺言に従って何となく幸せそうなフリをして今まで生きて来ただけなのだから。しかし今は昔と違って、少しだけ守りたいものが出来てしまっている。なら、今ここで死ぬ訳にいかない

「一つだけ教えやがれ。テメエはジュエルシードで何をしようとしてやる？ たった一つで世界を終わらしかねない物をいくつも集めて、何をしようとしてやる」

「……………取り戻すのよ。本当に大切なものを」

紫BB A……………もといプレシアがそう言った。その目を見たとき、なんだか知らないが理解してしまった。ああ、こいつにも何かあるん

だって

協力しようとは思わない。でも少しだけ、安っぽい気まぐれで、いかな何て思ってしまった

」  
.....09308017941987650176401

6

アタシの声に反応して、切り落とされた右手が開く。そこには6つのジュエルシードが入れてあった

「持って来てないってのも嘘だったのね」

「はっはー。あの状況で偽装出来る時間なんかねえよー」

海の中に落ちていた間に右手の収納スペースに突っ込んでいたのだ

」  
.....フン」

それを回収して、アタシから手を離す

「あなたは次にフェイトが地球に行く時に一緒に送って行ってあげるわ。それまでおとなしくしてなさい」

「はいはい。わかりましたよ」

で、後日。アタシとフェイトは大広間にいた  
プレシアはフェイトにジュエルシードを持たせ、最後の賭けに出る  
つもりの様だ。

「アタシは………どっしよっかなあ」

なのはの味方をする。フェイトの味方をする、プレシアの味方をする。それら全てはアタシにとって、守りたい事になっていた

なのはとフェイトを仲良くする為に敵対した。プレシアを救いた  
いからジュエルシードを渡した。それだけ矛盾した事をし続けた  
いま、アタシは自分が何をすればいいのか解らなくなっていた。思考に  
没頭する、没入する。言葉なんかには意味は無い、自分の最初の目的も  
今はどうでもいい

ああそうさ、あの癩に触るくらいまっすぐだったバカやろうみたい  
に臆面もなく言っただけやらないだ

『私』は全部を救いたんだって』

―地球―

賭けよう。全てのジュエルシードを

なのはのそんな言葉に導かれ、フェイトは公園にやって来た

許さないし許せない

手を後ろに回され、機械っぽい手錠をはめられる。あのクロノって管理局の子に

「痛いっす」

「ふざけるな。君の行動は管理局で管理させてもらっ」

「くっくっ」

今アタシがいるのは次元空間航行艦船アースラとやらだ。フェイトについて地球に帰ったら速攻で捕まって転送された。く、こんなの酷い!! でも感じちゃうビクンビクン!! うん、一番煎じのネタはつままないね。いっそ天井になるまでやってみる?.....アタシの心が持たないわ

さて、アースラのブリッジで絶賛中継中のなのはとフェイトの戦闘。高見の見物は趣味じゃないが、まあこれはこれで面白い

「でっ? どんな感じだよ」

「すぐさまその台詞が出るとは随分といい性格してるな君は!!」

「まあいいじゃないクロノ」

おおっ、リンディさんは話が解る.....っつて言っか適當?

「.....はあ。互角と言った感じだね。まあこちらとしてはなのはが勝ってもあの子が勝ってもどちらでもいいんだが」



なのはの身体はバインドで縛られ、フェイトの砲撃を受け続けている。ちゃんと計算しないと解らないが斬城の防御は容易く抜くだろう砲撃の嵐。今ここにアタシはフェイトの前では出来るだけバカをしない様にしようと誓った。あの優しいいい子に愛想つかされてあれ喰らうのはキツ過ぎる

「そしてアタシは現在進行形で命の危機だ」

「アイナアアア？ あの世に行く準備はOKですか？」

「いや出来てません。どうやってあの包囲網抜け出したの？」

「この子の力が掴まれた状態で3人も投げ飛ばせるなんて知らなかったなあ

「このまえネットに落ちてた合気道を覚えました。後は斬城の防御プログラムに応用です」

「だからなんでアタシのPCの中身を知ってたんだよ……。そしてこのままでは比喩なしで殺される

「さて、死んで」

「た、助け……………」

見て見ぬ振りしているリンディとクロノに向かって言葉を投げかける前にアタシの意識は闇に飲まれた

目が覚めたのはその3分後だった

「あ、アイナ。なのは様の勝ちで戦いは終わりましたよ」

「……………もう文句言つ気も起きない」

アタシとこの子の関係っていつからこんなになったんだろ

『艦長!! 来ました!!』

そんな時、オペレーターの声が鳴り響く。聞き覚えの無い声だったので、きつと初めて聞く声だ

「物質転移……………これでプレシアの拠点が解るわ」

ここでアタシはもう知っていると言わない方がいいのは目に見える

そして判明した時の庭園の場所。数十人の武装局員が乗り込み、プレシア逮捕に向かって行った

さて、アタシはここでどうすればいいのだろう。プレシアを救いたいと思う。しかしアタシには何がプレシアの救いなのか解らない。第一、どうして自分がプレシアに固執してるのか自分でも解らないのだ。管理局に逮捕される事によってどうなるのか、どうなってしまっのか、アタシには判断材料が無い。心を占めるのは謎の焦燥感、そして期待。一体どうすればいいのか解らないうちに、手錠付きフェイトを連れたなのはが帰って来た

「おかえりだぜー」

「捕まって手錠はめられても変わらないんですね、アイナさんって」

そこはかたなくバカにされた気がする

「ようフェイト。お揃いだな」

アタシは自分の手錠を掲げながらフェイトに向かって言った

「……………そう、だね」

彼女は力なく笑っている。あんまり好きな表情じゃないなあ。一番最初の藍みたいな表情だ。自分が一体何を信じればいいのか解らなくなっている表情

「フェイトちゃん。私の部屋に行こう？」

なのはがそう言う。大方、艦長さん辺りに娘の逮捕されるシーンは見せたくないと言われたんだろう。よく出来た人だと思う

その時だった。雷鳴が響いて武装局員が軒並み伸されたのは

『私のアリシアに……………近寄らないで!!』

激情に飲まれたプレシアは叫んで杖を薙ぐ。それだけで武装局員

は全滅した

『もうダメね……………時間がないわ

これだけのロストロギアでアルハザードにたどり着けるか解らないけど

けど、もういいわ、終わりにする。「この子を無くしてからに暗鬱な時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするのも……………」』

その言葉にハツとするフェイトとなのは

『聞いていて？ あなたの事よ、フェイト

せつかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない。私のお人形』

語られたのはプレシアの娘の死。そして人造生命の、ひいては死者蘇生の研究、そして「フェイト」という名前について。それがオペレーターの間から語られた

『だけどだめだったわ。ちっともうまく行きやしない。作り物の命は所詮作り物。失ったものの代わりにはならないわ

アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままも言ったけど、私の言う事をとても良く聞いてくれた。

アリシアは……………いつでも私に優しくかった

フェイト。あなたはやっぱりアリシアの偽物よ』

なのはが叫ぶ、フェイトの面持ち。そして、多分、この世界で最もプレシアの気持ちかわかるアタシは、手錠を外して言った

「ウロボロス」

刹那、アースラの機能は停止した

「ウロボロス」

縛られたフリも面白いかと思ってつけていた手錠を投げ捨てる。そしてアースラに乗った段階で仕掛けていたウイルスであるウロボロスを解放した。簡単に言えば侵入したPCの機能を停止させるだけのソフト、しかしネット上にバラまけば都市機能が完全にストップすると言う強力な奴だ

アースラの機能を止めた理由はたった一つ、邪魔されたくないからだ

「藍」

「……………まったく」

藍から戦闘用にチェインされた右手と、斬城のパスを受け取る。いざという時の保険として藍に持ち込ませて置いたのだ  
右手を取り付け、パスを入力。数秒の時間経過とともに鎧が現れる。ガチャッと音をさせて鎧はアタシを包み込んだ

「アースラの機能掌握……………完了。転送装置とモニターの機能回復、ただしアタシの転送後は転送装置の機能停止」

従来のスパコンのスペックを大きく超える斬城に指示を出して即

座に完了する

とんでもなく慌ただしいアースラを一人、鎧を着て、転送装置の中に入った。当然止めようとして来るクロノや武装局員達。邪魔をしてくる全てを重力で押さえつけ、藍に言った

「藍、フェイトを頼む。今あの子を救えるのは、ずっとフェイトを見て来た奴か、あの子の事を大事にしてる奴か、アンタだけだよ」

「……………あぁ、きっとそうなんだろうね。じゃあプレシアテスタロッサを救えるのはアイナだけだ」

そんな小さなやり取りをして、転送装置を起動する

「行ってらっしゃい」

藍のそんな声が聞こえた

最初に目に入ったのは数百を超える鎧武者だった

そのすべてが相応の魔力を保有しているのだろう、相当なプレシャーが伝わってくる……………が、関係ない

「重力操作、負荷全開」

サーモグラフィで中に誰もいないのを確認して、この一帯全ての物

質を押し潰した。そして出来上がるのは瓦礫の山。たった一撃で時の庭園は瓦礫の山と化した

いや、プレシアはあの玉座の間っばい所だけは守ったらしい。生体反応が2つ、アタシを待ってるのだから

「……………」

目の前の瓦礫を吹き飛ばし、道を開く。そしてプレシアのもとまでたどり着いた

「……………」

「さすがに驚いたわ。まさかここまでとは思わなかった」

「安心しろ、今の操作は難しくってな。もう使えねえよ」

下手に使えばこっちが死ぬ

「……………」

「めんどくさいから単刀直入にいくぜ。一発殴らせる」

プレシアのこめかみがピクリと動く

「意味が解らないわ」

「いや、一発じゃ足りねえ。気が済むまで殴らせやがれ」

プレシアの魔力弾が放たれる。真っ正面から受け止めて、もう一度言葉を重ねる

「テメエは許さない。絶対に、許さない」

「……………本当に解らないわ。管理局の支援も無くこんな所に乗り込んで来て殴らせる？ 何が言いたいのよ」

「……………そうだな、プレシア。テメエはフェイトの事をどう思う？」

プレシアは時間の無駄とでも言いたげに、しかしはつきりとモーター越しのフェイトに当てつける様に言った

「大嫌いよ」

ーアースラー

『大嫌いよ』

その言葉にフェイトは崩れ落ちる。それを受け止めたのは藍だった

「フェイト様」

虚ろな目をしたフェイトになのはが駆け寄って、名前を呼ぶ。しかし答えは無い。きっとこのままだったらフェイトは壊れてしまうだろう。藍はそう思った

『嘘だぜ』

そう言い放ったのはアイナ。確信を持ってそう言っていた。その言葉にフェイトは一縷の望みをかけて前を見る

『何を』

『だってアタシは、アンタの立場だったらどんな場合でもフェイトを娘なんて呼びたくない。吐き気がする』

ギリッと、歯ぎしり

『アタシは未だに、藍の事を友人なんて呼べないもの』

アイナはケタケタ笑い出す

『ああそうだよなあ。ぶん殴られるのも理由が欲しいよなあ。安心してよ、世界一の天才で世界一最悪なクソやろうの過去。全部ぶちまけてやるっじゃねえか!!』

ケタケタ、アハアハ、アイナは笑う。その姿に見ているものはある意味で引き込まれて行った



だってこの世には神様もないし天国の地獄もありはしないのだから

じゃあ死ねない。だって死んだってそれは幸せなんかじゃないからだ。幸せになる方法なんて思いつかない。幸せにしてみらう方法も思いつかない。だってナナカがいない。ナナカがいなければ私は幸せじゃない。そこでやっと気付く。ああ、私はこんなにもナナカが大好きだったんだ。気付くのが遅い、遅過ぎる。こんなにも依存して、こんなにも大好きで。なのに私の危険な実験に巻き込んで。あ、はは。幸せ？ 幸せになんて成れるわけない幸せは一人では手に入れないんだ。幸せが欲しいなら一人じゃダメだ。じゃあどうする？ マタアタラシイトモダチヲツクル？ ふざけるなよ？ 死ねよ死ね死ね死んでしまえ!! ナナカ以外の友達を作るなんて思考するだけでもあり得ない!! ナナカだけだよ。私の友達はナナカだけ。他の全ては有象無象、存在する価値のないゴミばかり。ナナカナナカナナカナナカ!! 助けてよ。大好きだよ。そばにいてよ。声をかけてよ。笑つてよ。あなたがいないとこんなにも私はダメになる。こんなにも私は苦しいんだ。大好きだよ、そんな言葉じゃ足りない。愛してる

私はナナカを愛してる。ナナカのいない世界なんていらなかったら壊そうよ。だってナナカがいないんだから

簡単だよ。研究所に戻って全ての機材のスイッチを全てONにすればいいんだ。世界なんて私の気まぐれ一つで壊せる程はかなく出来ているんだから。そうだ壊そう、壊してしまおう。ナナカがいない世界なんて壊してしまえばいいんだ

わかってる。ナナカがそんなの望むはずなんて無いんだってこと。だったらどうすればいい？ きつと私は世界を壊すか自分を殺すか狂うしかこの先に進む事は出来やしない。なんで殺した？ なんだよ。なんでなんでなんでなんだ!!



—  
???  
—

目をサマしたら。そこは真っ白な場所だった。身体を認識すると同時に身体にかかる重み。その少女は泣きながら誰かの名前を呼ぶ。自分のキオクを参照しながらその少女をダキシメて、涙を流す少女に向かって言った

「ただいま」

私はナナカ………では無い。ナナカの人格と記憶を元に作られたガイノイドだ。ナナカの記憶とアイナさんの態度から、アイナが私を作ったのだと判断した

「ナナカ。身体に違和感はない？ どこかの反応が鈍いとか、感覚が無い部分があるとか」

アイナさんはニコニコ笑いながら問いかけて来た

「……………」

答えられない。答えられっこ無い

「ナナカ？」

アイナが不安そうに見つめてくる。それを見て、決心した

「ん？ ごめん聞いてなかったよ。なんだって？」

私は、ナナカは、この親友の笑顔を壊したくない

「あ、……………よかった。初期動作で異常でもきたしたのかと思っただけ」

心底安心した様に彼女は呟く。ニコニコ笑いながら。その笑顔に私はスタボロに成りながら

「ナナカ」

「なによアイナ。変な顔して……………」

「ナナカの名前をあなたに向かって言えるって事がこんなに幸せ。だから名前を呼んだんだ。……………だめ？」

グチュリと心臓を握りつぶされた気分になる。まだ間に合う。まだ大丈夫。今言ってしまうはこの罪悪感も無くなる。だから……………

「……………ダメじゃないけど。突然きたデレ気に戦々恐々としてるだけだよ」

できやしなかった。この笑顔のアイナを見て、これ以上の過酷を押し付けるなんて出来やしなかった。だから私はこの時にナナ力にならなかった

私はナナ力ではない。そう認識してしまっている。他人の記憶をTVで見ている様な感覚。私の名前は無い。私が誰かも自分で解らない

でも、記憶の中の自分ならきつとそうするだろう。最後の最後までばれない様に必死になって隠すだろう。だったらそれまで私はナナ力で、アイナは私の親友だ

月日はたつ。そして隠し事はばれるもの

第一、完全記憶能力を持った人間相手に長い間隠し事なんかできやしない。普通の人なら気付かない様な違和感に感づいて、蓄積して、そして結局ばれた。

アイナは泣いた。何をするよりも先に泣いた。何かがキレたんだと思う。何時間も何十時間も泣いてそしてピタリと泣き止んだ。次は笑う。笑って笑って笑い続けた。ケラケラ、ケタケタ笑い続けた。私はこの時に始めて機械の身体に感謝した。だって機械の身体なら何十時間でもアイナのそばでに立っていられるから。自分のエネルギー

ギ消費を極限まで抑えて、アイナのそばに立つ。そして37時間27分18秒の時間が過ぎた頃、ゆっくりとアイナは立ち上がった

「……………まだ、いたんだ」

言葉が胸にささる。虚ろな目を私に向けるアイナは完全な無表情で言う

「もういいよ。消えて」

ノイズが走る。私は人間じゃないから涙なんて流せない。そんな機能存在しない。でも視界は曇る。耳を塞ぎたくなる

「なにしてるの？ 私が消えてって言ったんだから消えてよ。お前なんてただのナナカの偽物なんだから。私が作ったロボットなんだから。早く私の言う事に従って消えろよ」

無表情のまま淡々という。アイナが言葉を紡ぐたびに私の心は削れて行く

どうせ作りものの心で、ただの電気信号なのに、ガリガリと心を削る。きつとこのままだったら私は壊れてしまっだろう。文字通り、電子回路が焼き切れて、壊れるだろう

「消えろ。消えろ!!」の出来損ない!!」

淡々とした口調はいつしか怒鳴り声に。怒りと失望と絶望を孕んでぐちゃぐちゃにした様な声に

「消えろ壊れる死ね!! お前なんか産むんじゃない!! 全然違う。この出来損ない!!」

そしてなんでこんなにも痛いのか、やっと解った。私はナナカの記憶を持つてるからアイナの事を大事にしなきゃいけないって思っていたんだ

「くそお。畜生 ……なんでだよ。どこに失敗の要素があったんだよ……」

違う。そうじゃない。私は私の意思で。私自身の意思でアイナの事を好きになっていったんだ。どこかほって置けない危なっかしいこの人の事を好きになっていったんだ

「なに？ アンタまだいたの？ いいから消えてよ。この顔で、その声で、私の名前を呼ばれたら虫酸が走る。いいから私の前から消えろ。消えろおおおおおおおおおお!!」

だから私は ……

ーアイナー

叫んで拒絶して、壊してしまいたくてぐちゃぐちゃで。狂った心はもう取り返しのつかない所まで捻れてしまっただけ。絶望とか希望とか、この世の真理とか生とか死とか、自分でも意味が分からない事ばかり頭に流れ出して。自分をたばかった出来損ないにその怒りをぶつけて。ああ私はもうダメだ。このまま死ぬだろう、きつと生きる気力も死ぬ理由も無い。死んだ方がマシ？ 生きていた方がいい？ ああどうでもいい。どうせナナカが死んだ瞬間に私が幸せに成れる



ああ、解ってる。目の前の親友に似た少女にはなんにも罪は無い。うっん、きつと解っていた。ナナカを、死んだ人間を生き返らせるなんて無理だ。だって『死んでない』に戻るのなんて、それこそ時間を戻してもしないと出来やしない  
それでも私にはどうしようもなかったんだ

「ナナカ。ナナカ!! 寂しいよ。寂しいよ……なんで死んじゃったんだよ。なんで殺しちゃったんだよ……。大好きだった。大好きだったんだ!! あなたがいないと私は幸せになんてなれないよ!! ナナカア!!」

もう、止まらなかった。そう言えば、ナナカがいなくなってから私は一度もこんな風に誰かに自分の思いを吐露した事なんてなかったなと思う

「あああああああああああああああああああああああ  
!!!」

「……………今は、泣いてください」

目の前の機械仕掛けの少女は言う

「あなたに嫌われても。あなたに捨てられても。私はあなたの傍にいます。あなたが泣きたい時には抱きしめます。あなたが辛い時には傍で笑ってます」

私が作った少女は言う

「私はあなたが、アイナが大好きです。ナナカの記憶を持っていると関係なく、私はあなたが大好きです。あなたに作られた、あなたの

為の存在だから。だから……」

機械仕掛けの少女は、そこまで言っていて私を強く強く抱きしめる。いつしか、私は自分の脚で立っていた

「幸せに、なってください。ナナカと私の願いです」

もう、言葉なんて出なかった

ただ泣いた。ただただ泣いた。一回目だったんだ、そんな優しい言葉をかけてもらえたのは。私を包み込む腕は冷たい金属で出来ていくはずなのに。なぜか暖かった

幸せってなんなんだろう。今、この場に至っても解らない。でも今のこの瞬間の気持ちを言葉にするなら、幸せって言葉しかなかったんだ

「アタシは、きっと狂ってる。でも壊れてない」

「……………」

「あなたのおかげで、最後の最後を踏みとどまれた。その事は、そのありがと」

「……はい」

「……私はこの先、あなたの事を愛せると思う。ナナカの、その次くらいには」

「ひどい、ですね」

「当たり前だよ。アタシを誰だと思ってるのよ悪の天才科学者だよ。……そんな私だけど、あなたに傍にいて欲しい」

「……」

「これは私のわがままだよ。こんな事を言って虫のいいって解ってるよ。でも、私の偽らざる気持ち。だから……」

「私の答えなんて、決まっています。傍にいらしてください。あなたが私を愛さなくても、私はあなたを愛します。いらなくなったって言ったて抵抗します。なにが何でも一緒にいます。ナナカの……母さんの思いで、私の思いです」

「……ありがと」

「はい」

「じゃあ、名前決めなきゃね」

「え？」

「名前だよ、名前。私が決めるよ、いいね」

「少し不安ですが」

「なんだとー!! っってもう考えてあるんだけどね」

「……………」

「藍。あなたの名前は藍。ナナカが好きな花で、私の髪の色」

「あ……………」

「いい?」

「は、はい、ナナ」

## 紫電VS科学

アタシが過去を言い終わった時、プレシアは確かに動揺してた。しかし数秒もしない内に平静に戻る

でもなにも言えない。そんな様子だった

「……………」

「これで全部だよ。アタシって言う最低最悪のバカの過去は。テメエの話があまりにも聞き覚えがありすぎてこうしてやって来た次第だぜ」

プレシアはギリッと歯を鳴らす。血走った目を向けてやっと言葉を紡いだ

「それが本当だとしたら……………私はあなたを許せないわ」

「ああ。お互いにな」

私は藍<sup>偽物</sup>を愛してここにいる。プレシアはアリシ<sup>本物</sup>アを愛してここにいる。お互い全くと言っていい程同じ存在なのに、そこだけが決定的に違う。だからアタシ達はお互いを絶対に認めることが出来ない

「あなたは所詮、お人形を愛でて満足するしか出来なかった負け犬よ」

「……………藍をそんな風に言つな。殺すぞ」

斬城を飛行省エネモードから高速戦闘に変える。プレシアも杖を構えてこちらを向く

「死になさい」

「テメエがな。紫ババア」

アタシとプレシアは同じ存在だから、最後の選択だけが違う同じ存在だから、だからお互いを認める事が出来ない。プレシア テスタロツサとアタシはお互いの存在を否定すべく、全力で殺し合いを始めた

斬城には大きく分けて二つのモードがある。飛行省エネモード、重戦闘モード。そして高速戦闘モードだ。元々戦闘用に作っていた一面が強いので戦闘モードが2つなのはご愛嬌。シュミレーション以外でまともに使った事がなかった程に戦闘特化なのだ。そんな倉庫でほこりを被っていた代物だが今はどうでもいいだろう。ちゃんと動くし

飛行省エネモードは名前の通り、飛行する為だけのモード。まあそれだけでもとんでもない電力を消費するんだが……。重戦闘モードは省エネを解除して、全てのエネルギーを砲撃や重力操作に当てる。発動するだけでこの機体の全エネルギーの1/10は持つて行く代物だ。時の庭園の全ての人形を倒したのはこれ。単樹な破壊力なら核兵器にも匹敵するだろう。そんな背景があるからアタシは自分の技術を世に出せないんだ。

そして今の高速戦当モード。これは作った用途で使用する事は絶対にならないと思っていたモードだ。ぶっちゃけ、スーパーサイア人がいると仮定して対等に戦う為のモードなのだ。人型の敵が気合い一つで地球を壊せる程戦闘力を持っている。それを仮定して、対抗する為

の兵器。それが斬城、高速戦闘モード

音速の壁を軽く突き破って、ソニックウェーブを撒き散らしながらプレシアに接敵する。振りかぶった大刀の接触まで0、000023秒

「ッアアア!!」

ギンツ音がして、斬城の大刀が止められる。薬で強化した知覚でプレシアの行動を見る。この女、化け物だ。音速を超えて本気で切り掛かったのに魔力剣で合わせてきやがった。そのまま罅迫り合い、お互い言葉を発する余裕はない

刹那の間を置いて、同時に後ろに飛ぶ。プレシアは魔力球。アタシは腰のレールガンを構える

「ブチ抜け!!」

言葉が被る。本当にアタシ達は似てるな、ムカつく程

36ミリ口径と言う頭のおかしい弾丸を毎分2万8千発の弾丸をバラまくレールガン。最も弾丸自体8000発しか積んでないから18秒で弾切れ起こすんだけど。対してプレシアはなのは対フェイト戦でフェイトが見せたフォトンランサー・ファランクスシフトのさらに強化版。斬城の解析によれば150発の魔力球から秒間10発魔力砲を発射する。計、秒間1500もの弾丸を発射してるのだ。アタシのも大概バカスペックだけど全然負けてるなあ。こっちは砲門一つしかないからしょうがないけども

身体に何十発もの弾丸が直撃。しかし斬城の真価は防御こそにある。豆鉄砲がいくら当たった所で問題ない。それは向こうも同じように難しくシールドで防いでいた。ったく、これを現代戦に持ち込んだらめちやくちやになるってのに、このババア。本当に人間かよ

「はあ、はあ……………駆動炉を全開で稼働させてドーピングしてもやつと互角……………。ありえないわね」

「どっちがだよ……………。全部が全部アタシが相手の命度外視で殺しにいつてるのに全部凌ぐとか……………本当に人間かよ」

戦略兵器ぶつけられて生きてる様なものだけ？　ありえねえ……………。そして、エネルギーがヤバい、半分きつた。省エネモードにしたら回復するけどそんな余裕あるわけがない。相手の魔力がどうなってるのか知らないが、ギリ貧で負けるかもしれないねえぜ

「……………本当に、本当に私たちは似てるわね」

プレシアが言う

「……………」

「あなたはきつと私と同じ絶望を抱えてる。なのになんてよ……………なんでお人形なんかで満足出来るのよ」

ギリッ

歯が、自然に鳴った

「私はアリシアの、アリシアの為に生きて来たわ。だからアリシアを無くしたら生きて行けない……………だから作ったお人形は出来損ない。なのにあなたは……………」

プレシアはそこで一旦言葉を止めて

「なんで、<sup>偽物</sup>藍に縋って生きて行けるのよ!!」

チャンスだろう。今のうちに省エネモードにして回復すればプレシアを圧殺する事は容易い。でもそんなのを考えたのは叫んでからだった

「ふざ……けんなあ!! 偽物も本物も関係ない!! 藍は藍なんだ!! 私を作った、ナナカの娘だ!! ああ解った。やっと解ったぜ!! なんてこんなにもアタシがあなたの事をムカつくのか、なんでアタシはこんなにもあなたを救いたいのか!! テメエはまだあの地獄にいる。アタシがあの日いた地獄にずっといるんだ!! アタシは藍に引きずりだされて抜け出せたけど、あなたはまだそこにいるんだ!!」

一息

「あんたはきつとフェイトとまともに会話した事がないんだ!! あの優しくていい子とまともに向き合った事が無いんだ」

「……あんなお人形の、なにと向き合えと言っのよ」

「テメエの傍にいてくれたのは誰だよ!!」ずっと傍にいてくれたんじゃないのか? テメエの地獄はそこなんだよ。引きずり出してくれる存在がいるのにも見もしないで!! そんな奴が被害者ぶってんじゃねえ!!」

「言わせておけば……。私から見ればあなたの方がありえないわ。<sup>本物</sup>……ああわかったわ、そう言う事ね。あなたにとってナナカの存在なんて代わりがいれば事足りる程度のものだったって事ね」

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ  
ああ!! ぶぞけんなあ!!」

残りのレールガンをぶちかます

「あ、はははははははははははははははははははははは!! 図星をつかれてキレる  
なんてやっぱりガキね。もういいわ、あなたの器は見切った。消えな  
さい」

結局平行線。しかも自分でも折り合いのついてない所を突っ込ま  
れて泣きそつだ。しかしそれでも

「それでも、アタシはあなたを救つ」

「あははははははははははははははははははははははははははははははははははははは  
は!! 出来るものならやって見なさい!! 綺麗に消滅させてあげる  
わ!!」

プレシアを殺す事から目的を変更。ぶん殴ってフェイトの前に引  
きずり出す。ぎくしゃくしても、今のフェイトならプレシアに声を届  
けられると信じてる

大刀を振り回して、プレシアのシールドを削る。重力を操って行動  
を阻害する。殺せなくなった今、アタシの不利は目に見えて出て来  
た。もともと斬城は大量破壊兵器。殺さずに制圧なんて芸当はガン  
ダムで米にお経を書く行為に等しい。だからなのはとの戦闘シユミ

レーションで全敗してた訳だ

さて、重力を操って行動を阻害しても殺さない様にと言うのが足を引っ張る。また、電撃を打ち込んで気絶と言うのもやっぱり不殺がねつくになる。ああ、さっきみたい何も考えずにブチカマしまくっていたのが懐かしい

「消える消える消えるおおおおお!!」

「ふざけんなボケ!!」

榴弾をブチカマスもやはり無傷。もう最後の直前までは本気で攻撃してもいい様な気がして来た

「死ね、死ね死ね死ねええ!!」

うん、もういいや

大刀を構えてコンマ0秒以下で突撃する。痛み止めが切れて来て、骨が折れている部分が悲鳴を上げる。電気信号で斬城に追加の薬を要求。これ以上の投与は後遺症が出る恐れがあります？ 藍め勝手に警告プログラムなんて組み込みやがって………当然無して投与。少しの衝撃があって痛む箇所はなくなった。正確には感じなくなっ

た  
シールドで大刀は受けられて、魔力砲の餌食になった。痛みに気を取られたのと指示出しで一瞬気が抜けたからだ

『警告。出力60%低下。撤退を申告します』

そんなの却下に決まっている

「あはははははははははは!! 動きが鈍くなって来たわよ。も

う終わりかしら。あはは、あはははははははははははははははは!!」

向こうも大概いかれて来たなあと思いつつ、もう手が無い事をアタシは感じていた

はつきり言ってももうどうしようもない。少なくとも殺さずには無理だ。こうなったら一か八か……………

そんな事を思っている時だった。プレシアが大量の血を吐いたのは

アタシは人間を作る為に医学も学んでいるし、修めている。それですぐに理解した。あの血はこの戦闘のせいじゃ無い。いや、悪化はさせたかもしれないが

アレは病気だ。末期と呼ばれる程手遅れな

「プ、レシ、ア」

「ぐ、があ……………はあ、はあ。私のは時間がないの。もう時間がないの。手遅れなのよ、何もかも。フェイトとの時間？ そんなの作れないわ。だってもう、私は死ぬのだから」

ああそうか、そう言う事だったんだ。アタシとプレシアの決定的な違いがもう一つあったんだ。プレシアは、狂気に飲まれるしかっただ。時間がない。それは、知らなかったなあ

「ええあなたの言う通りよ。私はフェイトとまともに向かい合ってこなかったわ。だってあの子はアリシアじゃないんだから。アリシア以外のものに関わってる時間なんて私にはないの。ああ、でももう終わりね、全部終わり」

最後に私を否定した目の前の同類を消そうと思ったけどもう終わり。どうしようもないわ」

刹那、時の庭園の各地で爆発が起きた

「ッ!! なにを!!」

「駆動炉を暴走させたの。ジュエルシードの数は足りないけれど、これでアルハザードへの道は開かれるわ」

「て、めえ!!」

「だからこれで終わりにしましょう……………」

プレシアは杖を構えてこちらに向ける。魔法の才能ゼロのアタシでも解る程の膨大な魔力

「……………そーだね、ぶっちゃけ私も限界だし」

重戦闘モードに切り替え。身体を浮かす最低限の重力操作を除いて他は全部右腕に

「最後に言っておくわ。あなたの事、受け入れられないけれどそこまで嫌いじゃなかったわ」

「お互い似た者同士なんだ。きっとそんなもんだろっさ」

一瞬の静寂そして

「ラグナブラストッ!!!!!! フルパワーーーーーー!!」

「フォトンランサー、ブラスタードシフト!!」

お互いの全力の砲撃が発射された

ミシミシと音がする。ああもう斬城は限界か……。ホントよく頑張ってくれたよ、スペックの限界ギリギリまで出しちゃったしね。身体も痛いなあ、何度も何度も無茶な動きしたから全身の骨が折れてやがる。斬城がメディカルチェックの結果を表示してるけど、正直見たくないなあ……。うわ、これは直すのしんどいぞ（誤字にあらす）。ホント、ここまでボロボロになったのって始めてじゃないだろうか？ 第一私は前線に出で戦う人間じゃないんだよ。ラスポスを倒された後に『私は誰にも殺せんじゃー』とか言ってる塔の上から自決する役だろうに

「……………生きてるか？」

土煙に向かって言う。ちょうど晴れるタイミングを見計らって声をかけた。そこにはボロボロになって、杖を支えにかろうじて立っているプレシアの姿

「……………ええ、生きてるわ。そう、私は負けたのね」

「ああ」

最後の砲撃。アタシが放ったのは真空を使った爆宿の砲撃転換、そしてプレシアは雷の超砲撃だった。詳しい理論は省くが、真空状態を発生させた際、そこを通過してアタシの斬城のみに電撃が伝わったのだろ。アタシ本体にはダメージが無く、斬城が半壊したのはそのせいだ。車の中にいれば場合によっては雷の直撃を防げるのと同じだろう。そしてプレシアはアタシの砲撃をまともに受けた。その差が今、この瞬間だ

「本当に、本当にムカつくガキね……。ほんと、こんなはずじゃなかった事ばかりよ」

「ふざけんな。畜生め……。だあ、これ修理にいくらかかんだよ」

適当な事を言って、空を見る。駆動炉の暴走とアタシの重力攻撃。そして最後の砲撃の余波で崩れ掛かっていた

「……………行きなさい。あなたにはまだ、大切な者があ  
るんでしょ」

「テメエにもあるはずだ」

「ないわ。私の大切なのはアリシアだけ。その他の全てはいら  
ないわ」

「嘘だぜ」

プレシアはピクンと震える

「きつとそれは嘘だぜ。会ってみたらいい。話してみたらいい。だっ  
てアンタらはまだ、なんにも始めて無いんだから」

「……………そう、ね。なにも始めてないわ」

もう一言

「いま、そんな悪い気分じゃないだろ？ 自分に味方がいるかもしれないって思うのは？」

「……………ええ、きっとそうなのね。今なら

フェイトの事を、愛せるかもしれないわ」

ああ、そうだ。アタシはその言葉が聞きたくて、自分の道が道が間違ってたかったって思いたくて、ここまで来たのだ

戦いが終わって数秒後（ってまあ、この戦闘自体全体で5分もかかってないんだが……………）（聞き覚えのある声が聞こえて来た

「母さん!! アイナ!!」

ああ、なんだやっぱり来たのか藍。フェイトなのは、アルフに  
ユーノ。クロノ君までご一緒とはね

「母さん!!」

フェイトはぼろぼろのプレシアに駆け寄る。って今のアタシって  
母親をボコボコにした悪役っぽくない? ..... いつも大体  
そうか

プレシアはフェイトに向かって手を伸ばす

「.....フェイト」

「母さん.....母さん、お話が合ってきました」

フェイトは大きく息を吸い込んで

「私は、アリシア テスタロッサではありません」

プレシアは齒ぎしりをしながらも、話を聞き続ける

「私はフェイト。あなたに産み出された、アリシア テスタロッサの  
クローンで、あなたの娘の、フェイト テスタロッサです!!」

プレシアは黙って話を聞き続けそして言葉を咀嚼する様に時間を  
かけて、そしてゆっくり声を出した

「フェイト、じつちに来なさい」

「ッ!! はい」

彼女はゆっくりとプレシアに近付く

「顔を見せて」

「.....」

無言でその通りにする

「.....アリシアにそっくり。でも、違つ  
ね」

「はい」

即答だった。自分はフェイト テスタロッサであると言つ様に

「そうなのね.....。本当に私は気付くのが遅過ぎる  
.....」

プレシアはそう言つと、自分の足で立ち上がる

「フェイト、私に言いたい事は山ほどあるでしょうでも、私に二つ言わ  
せてちょうだい。一つはごめんなさい、あなたには辛く当たったわ」

「ッ!! そんな事.....」

余りにも予想外の言葉だったのだろう。フェイトは面喰らつて喋  
ろつとする。しかしそれをプレシアは片手で制して言葉を続ける

「そして、いままで一緒にいてくれて、ありがとう。それは、私の今の  
本心よ」

そう言って、プレシアはフェイトに微笑みかけた。きっと彼女の本来の、フェイトが望んでやまなかった笑顔なのだろう

「母………やんっ!!」

フェイトはもうなにも言えなかった

(やっと叶ったんだ。やっと届いたんだ!! 母さんは昔の母さんに戻ってくれた。優しい母さんに戻ってくれたんだ!!)

フェイトは確信しているのだろう。これで元の生活に戻れると、時間にかかるだろうけど、それでも幸せな未来が来ると。そう確信しているのだろう。横から見ている、その事がありありと伝わって来た

「でも、やよならね」

アタシもフェイトの、全く反応が出来なかった。だって全部解決したと思っていたからアタシもフェイトも、プレシアの狂気は地獄は終わったのだと思っていたから。だから全く反応出来なかったんだ

ゴソッ

そんな音がして、プレシアの近くにいたアタシとフェイトは吹き飛



プレシアはどこから取り出したのか、ジュエルシードを持っていた。その全てがとんでもない魔力を放出している。発動して、共鳴して、きつとこのままじゃ取り返しのつかない事になるだろう。でも、アタシの頭を占めていたのは、ただただプレシアへの共感だった

「……………そう、だよなあ。その通りだよなあ

アタシだって、ナナカが生き返って、藍がいる。それ以上の幸せなんて、思いつかないもんなあ」

なんと想像したか解らない。研究所には藍がいて、アタシに学校に行けと口を酸っぱく言う。それで学校に行ったらナナカがいて、バカみたいな話に花を咲かせる。まるで普通の中学生みたいに誰々が好きとか言い合って喧嘩になる。でもすぐ仲直り、一緒に家に帰ったら藍がいて、晩ご飯を作ってくれている。ああ、想像しただけで幸せだ。幸せすぎて死にそうな程に。でも……………

「それでも、そんな未来は来やしない。アルハザードなんて都合のいい幻想だ」

アタシは駆け出した

「アイナ!! やめろ。もう次元震が起きる!! 止められない!!」

クロノが叫ぶ。大方、アースラから通信でもあったのだろう。でも、もう次元震で誰かが死ぬとかアタシが死ぬとかどうでもいいんだ。アタシは、アタシは!!



## 絶望の終わり

「う……………」

目を覚ましたら真っ白な空間にいた。一体なんだと言いたいが、それ以外の表現が見つからないので真っ白い空間と言っておく。アタシのネーミングセンスはゼロなんだよ、悪いか!!

「って、そんな事言ってる場合じゃなかった……………」

そう、アタシはプレシアに殴り掛かってそれでジュエルシールドが光りだしたんだ……………。その後の記憶が無い。なに？ いつの間にか違う場所に移動したとか？ 誰が何のため？ ツーがプレシアとかフェイトとか管理局とかどうなったんだよ。そしてなんで身体の痛みが消えてるんだ？ 痛み止めの効果は切れ始めていたから全身骨折で悶え苦しんでなきゃおかしいはずだぜ？ さらに斬城は？ みんなどこに行ったんだ？

「くそ……………。何がどうなってやがる」

『そつだねえ。説明すると長くなるから省略していい？ それにアイナじゃまだ理解出来ないレベルの知識だし』

後ろから声が聞こえた。その声には聞き覚えがあった

「藍か……………、アンタはここがどこか知ってるの？ 一体何が……………」

どうなってる、と続けながら振り返るつもりだった。でも声をかけて来た少女の顔を見た瞬間、固まってしまった

その少女は藍と同じ顔をしていた。その少女は藍と同じ声をして  
いた。その少女は藍と同じ背格好だった。そしてその少女は、人間  
だった

「ナ、ナカ」

『YES。久しぶりだね、アイナ』

そこに、アタシが大好きな友達が立っていた

アタシが二の次を言えないでいると、不意にナナカ？が不満げに口  
を開いた

『何よ、久しぶりの再会なんだから私の胸に飛び込んでくるくらいし  
てもいいんじゃないの？ 相変わらずの社交性ゼロの研究バカなん  
だから……。藍ちゃん以外の人と話してる？ そんなんじゃない彼氏  
なんて一生出来ないよ？』

「んなっ!! ひ、久々に会っていきなりダメだし!! つーか作ろうと  
思ったらいつでも彼氏なんか作れるし!! でもアタシには藍とナナ  
カがいてくれればそれでいいし!!」

『うわ、いきなり愛が重い……………前々から思っていたけどちょっと  
引くわよ。あんた空鍋煮たりしてないでしょうねえ』

「ヤンデレ!? そこまでヤバいのアタシのナナカへの愛って!!」

『自覚無い当たり重傷ね……。私が生きてる内に彼氏でも作っていたらそいつきつと刺されてたわね……。そんな確信があるわ』

「刺さねえよ!! なにそのよくわからない確信!!? アンタってアタシの事そんな風に思っていたの!!?」

『いや……。だってねえ』

「誰に同意を求めてんじゃあああああ—————!!!」

アタシ達は、一瞬にして元の関係の戻ったのだった。アタシは殺した事を謝ってもいないのに、ナナカはそんなの全く気にしないとでも言いたげに。アタシ達の関係は死んだ程度じゃ何も変わらず、友達のままだった

ひとしきり漫才を繰り広げ、笑い合って、くだらない話をして  
そしてひとしきり、謝った

「じゅめんなさい……。アタシはずっとあなたに謝りたかった。あなたに謝る為にもう一度会いたかった。死ぬまでずっと謝り続けてもきつとその言葉は届かないって知っていても、謝る事をやめられなかった」



あ、あれ？　なんでアタシこんなに怒られてんの？

『私なんかの幻影に縛られて幸せになれないって言うなら、さっさと私の事なんか忘れちゃえばよかったんだよ、まったく。』

『……………まあ、死んだ後でもそこまで思ってくれる友人がいるって幸せな事なのかも知れないけどさ』

ああ、本物だ。そんな確信が胸に広がる。この子は本物のナナカだ。なんでここに居るのか全く解らない。夢とか催眠術とかそんなちやちなもんじゃない本物のナナカだ

私が信じて、アタシが愛した、ナナカだ

『……………ごめんね。勝手に死んじゃって』

「ナナカ……………ナナカあ……………!!」

我慢なんて、出来る訳が無かった。目の前にいるのが本物のナナカと理解してそれで抱き付かずにいれるものか。

ドンツと軽い衝撃の後、アタシはナナカにしがみついて彼女は受け止めてくれる。夢の中のナナカと違ってちゃんと受け止めてくれる。本物のナナカがそこにいた

「会いたかった、会いたかったよう!!　ナナカ、ナナカあ!!」

『……………ほんと、なんだかなあ。ここまで求められたら鈍っちゃいそだなあ。ほんと、世界ってままならないなあ』

ナナカが何か言っているが、気にしない、出来ない。求めて止まなかった、生き返らせようとさえしたんだ。些細な事は気にする事は出来なかった

その言葉の真意に気付くのはそう遠くない未来

ここが何処なのか、なんでここにいるのか解らない。そしてナナカはそれを知っているかの様に振る舞う。その態度は癪だけど、今はそれでいい様な気がしていたんだ

とりとめの無い話を続ける。アタシがどれだけナナカの事が好きだとか、生前はこんな事があったねとか、翠屋の新メニューの話とか、いっぱい、いっぱい話す

この時間が終わらない様に、目の前の奇跡が消えてしまわない様に

「それでね、なのはったらおかしいんだぜ？ 全力全開つとか言っつてピンポンの玉打つんだから。卓球でその決め台詞はどつなのよ」

『へえ、まあ運動音痴のアイナの事だ。どうせ顔面に喰らって鼻血でも出したんだろっつ』

「……………なんでそんな見て来たかの様に言えるんだぜ？ いや  
実際そうなんだけどな」

ああ、楽しいなあ。本当に楽しいなあ。そう思いながらナナカに抱  
きつく

『アイナ……………全く、一体いつからアンタはこんな甘えん坊に  
成ったんだろっねえ』

「今まで会えなかった分のナナカ成分補充。アタシが生きて行くには  
必要な成分です

これが無かったらアタシは狂って壊れてしまいます。マジで」

実際、藍がいなかったら壊れていただろうからねえ。身体で感じる  
ナナカの温もり、それが愛おしくて愛おしくて仕方ない。大好きだ。  
大好きなんだ。その思いがここに来て極まってくる

ナナカ相手なら百合ん百合んな展開もアリかもって思うくらいに  
ナナカが大好きだ

『……………ねえアイナ。ここがどこか、解る？』

ナナカが突然、何の脈絡も無くそう言った

「何？ そんなのどうでもいいぜ!! そうだ、この前女同士でも子供  
を作る薬を開発しようとしたんだけど凄まじい事になってさ!!  
なんと……………」

アタシはその話題を逸らそうと必死になる。だって何と無く解っ  
てしまったから、この話が始まってしまったらこの時間は終わる。こ  
の夢の様な奇跡は終わってしまう

そんな事を、根拠も無く感じていた

『アイナ』

「ッ……………!! 聞かない、聞かない聞かない!!」

『ごめんね、アイナ』

「謝んな!!」

『でも、話さなくちゃ。頭のいいアイナだったら解ってるよね。このままじゃ……………』

「うるせー!!!」

アタシは叫ぶ。だって、もう全部解っているんだから

この空間は、ジュエルシードがアタシの願いを擬似的に叶えた空間である。もちろん、ジュエルシードの効力である、'願いを叶える'の仕組みや理論は大して理解していない。だから、'願いを叶える'事を真実と仮定しての話だ

アタシの願いを汲み取って、ジュエルシードは願いを叶えてくれた。ナナカを生き返らせてくれた。もうそれだけでいい、それだけでいいんだ。研究を続けたのはナナカが誉めてくれた唯一の物だったから、また誉めてくれるんじゃないかって、いつかまた現れて『凄いね』なんて言ってくれるんじゃないかって、そう思って続けていた。でも、そんなのどうだっていい、アタシはここで生きたっていい。このまどろみとも夢とも言いがたい世界で一生を送ったっていい

だからナナカ……………

『ジュエルシードは暴走している。このままじゃ次元震、次元断層が起きて地球を含む数個の世界が滅ぶよ』

..... ああ、知っている。そんな事は解っている。プレシアがジュエルシードを暴走させた時にアタシはそのど真ん中へ突っ込んで行ったんだ。可能性としてはアタシの願いが叶えられていると言っつのは十分にありえる

「ジュエは.....どうだよ」

『そうだね、強いて言っつならアルハザードだよ。もともとアルハザードって言っつのは、ジュエルシードが暴走の果てに引き起こす、全ての願いが叶っつ場所』の事なんだから』

もちろん、限界はあるけどね。そっナナカは続けた

『壊れた思い出は蘇り、愛する人は復活し、願いは必ず遂げられる。そんな場所

ジュエルシードを生み出した文明の最期はある意味幸せだったと思っつよ。永遠と刹那の狭間で終わる事の無い夢を見続ける。そんな終わりだったから』

「.....なんでそんな事を知っつてんだよ」

アタシの知っているナナカは、お世辞にも賢いとは言えなかった。もちろん、アタシからすれば大学教授だろっつが幼稚園の悪ガキだろっつが大して変わらないんだけども

まあそれを抜きにしてもナナカは馬鹿だった。揉め事を見つければ必ず首をツッコミ、自分の身内に手を出したやくざの事務所にも木刀一つで殴り込み、あげくに汚職政治家にドロップキックを喰らわした事もある（あの時はさすがに肝が冷えた）

そんなナナカがアタシの知ら無い事を知っつているのに強い違和感

を覚えての発言だった

『……………今の私はジュエルシードと直接リンクしてるから、ジュエルシードを生み出した文明の歴史と技術は完全に理解してるんだ。今の状況はアイナの夢越しに伝わって来た情報。だからアイナがどれだけ私を愛してくれたか正しく理解してる。まあ少し引いたけど』

「オイッ!!」

### 閑話休題

さて、ここまでの情報を統合して見よう

ナナカはジュエルシードが生み出した、アタシの願いの具現である。だからジュエルシードが保有しているありとあらゆる情報をナナカは持っている。そしてこの場所、ナナカはアルハザードと言った。アルハザードはジュエルシードの暴走の果てに引き起こす、全ての願いの叶う場所、らしい。だからナナカはここにおいて、アタシと話が出来るとも触れもする。アタシが望めばきつと藍もなのはもフェイトも皆をここに呼び出す事も出来るだろう。さて、ここからが最重要。外の世界はもうすぐ消滅するらしい。この世界だって永遠と刹那の狭間ってだけで、外がなくなれば消滅するだろう。もっとも、アタシが望む限り永遠に続くのだが

さて、はつきり言おう。アタシは地球がなくなるのがどうしようがどうでもいい。そしてこの世界、アルハザードにはアタシの望む物が全て揃っている。いや逆か、望む物は全てこの世界が揃えてくれる。そしてナナカが存在出来るのはこの世界だけだ。

ああ、なんだ。アタシが幸せになれるとしたらこの世界だけじゃないか。アタシは至ったんだ、アタシはついに至ったんだ、幸せに。アタシは幸せになったんだ!!

『もう1人、この世界に人がいる。その人はアリシア テスタロッサを生き返らせたわ』

ああ、そうだろうな。当たり前だ、それがプレシアの生きる目的だったのだから

『アリシア テスタロッサとプレシア テスタロッサは現在、元の世界に帰還した。その意味を理解して』

理解？ 理解も何も……………

『アリシア テスタロッサの肉体は死んだ当時のまま保存されている。だから魂が戻るなら死体が生き返る形になる』

アリシアは現実世界に帰還した？ だったら何か方法さえあればナナを現実に戻せるんじゃないか？ 例えば、ランノカラダヲツカエバ  
バ  
：

『出来るけど、私がそんなの享受出来るわけないでしょ。だいたいアイナだってもう藍が大事でしょうに  
そんな事じゃないのよ、私が言いたい事は。私が言いたいのは、もうこの世界を終わらせる事が出来るのはアイナだけって事 もう、私が何を言いたいか解るよね。アイナ』

終わらせる？ この世界を？ ありえないよ、ありえない。そんな事よりナナカを現実に戻す方法を

□

私を殺して

□

さて、もう一度この状況を振り返ってみよう。頭から、解りやすく漏らしが無い様に

1 アタシはプレシアを止めるべく、ジュエルシードが暴走中の魔力の中に突っ込んだ。その結果、アタシとプレシアはアルハザードに到達した

2 プレシアは嬉々としてアリシアを生き返らせて、フェイトの待つ現実に帰還した

3 しかしジュエルシードの発動は、願いを叶えたからと言って収まらない。ジュエルシードは願いを叶え続ける間発動し続ける。つまりジュエルシードの暴走は願いが終わるまで続く

4 ジュエルシードの暴走が収まらないと、この世界は終わる。しかしアタシは別に構わない

5 ナナカという少女はまるで物語の主人公の様な存在だ。例を挙げるならアンパンマン。自分の身体を削ってでも、困っている人にパンを与えずにいられない。もはやそれは逆らえない習性ですらある。そんな彼女が、地球を含め多くの世界が消滅しかかっている状況を見過ごす訳が無い

そこで気付いた。いや、無意識に気付かないフリをしていたんだろう。ジュエルシードを止める方法をアタシは知らないという事を

『先に宣言してく。これは脅迫だよ』

私はアイナがこの世界を終わらせない事を認めない。私を生き返らせるなんて世迷い言も認めない。もしも永遠にこの世界を続ける気なら、もしも私を生き返らせたなら、私は死に続けてやるし死んでやる。今この場で下を噛み切ったっていい。そうしないと、誰も救われない』

身体が震える

『その上で言っよ、この世界を終わらせる方法。アイナが、アイナ自身

の夢を否定するの。私を生き返らせるのを、永遠に諦めるの。もっと解りやすく言おうか？

私をアイナの手で殺して』

心が死ぬ

『私が自殺した所で意味が無いの。アイナが、あなたの手で私を殺さないという意味が無い。そうしないと自分の夢を否定した事にならないから』

もう嫌だ。なんでいつもこんなんだ

『終わりだよ、アイナ。あなたの絶望はこれで終わり。私を蘇らせるなんて夢はもう終わり。これからは恋をして、新しい友達を見つけて

さあ、殺して。アイナ』

「嫌に決まってるだろうっ  
!!!!!!!」

やっと、声が出た

「嫌だ、嫌だ、嫌だ!! 絶対に嫌だ!! 殺せって? よりにもよってアタシにあなたを殺せって言うの? ふざけんなふざけんなあ!! アタシはナナカに救われた。私はあなたがいてくれたから生きている!! なのになんでそのアタシがナナカを殺さなくちゃいけないんだよ!!? アタシは、世界が滅ぶよりもナナカに生きていて欲しいんだ」



あ!!!!!!  
「  
!!!!!!  
泣いた。ただ泣いた。はばかり事無く泣き続けた。何時間か、何十時間か、何日か、何年か、本当に時間の感覚がなくなって来た頃に

アタシはナナカの首に手をかけた

『……………うん。ありがとう』

「ふざけんな。畜生」

『……………ごめんね』

「謝るのはもっと許せないぜ」

『……………ごめんね。嫌な思いをさせて』

「謝んなっつってるだろう。畜生……………」

『本当に、ごめんね』

ぎゅ、と少しずつ力を入れて行く

「私は、私は……………ナナカの事が、大好きなんだよ」

『うん、……………知ってる』

「私は、ナナカをつ…愛、してる…よ」

『うん、私もだいすき』

もっともっと、力を入れる

「……………苦しくない？」

『ん……………アイナに比べれば、全然』

ナナカは苦しそうに呻く

『ああ、そーだ。アリシア テスタロッサ。あの子の死体って……………所々、壊れてる。みたいー。なんだ、よね

だから、あいなが。助けて、あげて』

最期の最期まで、違う奴の心配。そして、自暴自棄になった私が生き返ったアリシアを殺すかもしれないって思ってた言葉だろう。本当に、最期までいつも通りな奴だ

「大丈夫だよ、そんな心配しなくたって。大丈夫、アタシは生きて行ける。みんなを助けて生きて行ける。全部、助けるよ。もう、アタシみたいに悲しい存在を作らない様に頑張るよ。ナナカみたいに、皆を救ってみせるよ。だから……………安心して」

『そ……………か。じゃあ、あ……………んし

……………ん』

ナナカの唇が、チアノーゼで紫色になる。手足は痙攣して、次第に動かなくなる

『……………

イ



さて、この後どうしようか？ アタシの夢を叶えた分のジュエルシードは活動停止に追い込んだが、プレシアの分はまだだ。しかしアリシアは救うと約束した。まあ大丈夫だろう、特に問題は見当たらない。様はジュエルシードが発動しても次元震を起こさせなければいい。つまり暴走させなければいいだけだ。封印処理ではなく機能制限、なのは達に強力を上げばなんの問題も無く完了出来る。その後、アリシアをアタシの研究所に連れて行ってメディカルチェック。蘇生作業も問題なしだ

現在起こってる次元震は……… 駆動炉を制御して相殺すれば収まるだろう。計算はかなり面倒だが斬城のメインPCは生きてたし、藍のスパコンも並列計算させれば数秒で計算は完了するだろう

これで現状の最優先事項の問題解決方法は全て実現可能だ。世界は救われ、プレシアも救われ、ハッピーエンドの道も見えた。さあ、これで閉幕だ。 現実に戻ろう。

そう思った瞬間、世界は完全に砕け散った

「ただいま、皆」

元の世界

しかしここからはもう既に予定調和。ならば語るべきではないし意味も無い。アタシはいとも簡単に世界を救ってアリシアを救って帰還するだろう。だからこれで、アタシの物語は幕を閉じよう。そう思って、アタシは傍にいた皆に微笑んだ

アタシはきつと幸せになれないだろう。アタシはきつと二度と笑えないだろう。アタシはきつと人を救い続けるだろう。アタシはきつとナナカの事を忘れないだろう。アタシはきつと壊れる事はないだろう。アタシはきつと

これから、死にたくなくなりながら生きて行くだろう。全部が終わってしまつまで

研究所の一室、そこにはかつて無い程の人間が集まっていた

「臓器が数力所痛んでるぜ。何年死んでいたのか知らないけれど蘇生させる気だったらもうちょい気をつかえよなあ。……………んー、心臓はもう新しく作り直したほうがいいな。ジュエルシード入れておく場所の問題もあるからせつかくだから心臓に……………」

この部屋にはアタシと藍の他になのは、ユーノ、フェイト、アルフ、そしてプレシアとリンディ提督がいる

そしてアタシがしてるのは見ての通り、アリシア テスタロッサの蘇生だ。アタシがアルハザードから戻った段階でアリシアは目覚めていたが、身体の一部がイカれててすぐに気絶してしまったのだ。そしてこのまま放っておいたら再び死んでしまうだろうから全身を瞬間冷凍、その後ここで解凍してメディカルチェックの最中と言う訳だ

「脳の損傷も少しあるなあ。これは一旦、記憶と人格のデータをPCに落としてそっから作り直した方がいいね。藍の時と違って全てを機械化する訳にはいかないし……………、藍ー!! アリシアちゃんのデータ落としてOS組んどいてー。アタシはボディの機械化と調整しとくからー」

「ご主人……………プレシア様が飛びかからんばかりの形相で睨んでるから少しは声を潜めてください」

さて、当然の前提だが。このアリシア テスタロッサの蘇生はプレシアは納得している。と、いうより納得せざるえなかった。人間の死体を何十年も新鮮なまま保つ方法なんて瞬間冷凍を完全な形でする以外に無い。魔法でどうのこうののあるのだろうが、結果としてアリシ

アの身体は所々ガタがきていたのだ。もちろん回復魔法なんてふざけた存在も実在しているとの話だが、この場にいる誰にも使えなかった

でだ、プレシアとフェイトはこの後、管理局の親玉の所で裁判が待っている。そして下手をしたら二度とアリシアに会えないなんて刑を喰らわされる可能性があるのも事実。そこで何かと甘い定評のあるリンディが見張りに付く事を条件にしばらくの自由を貰い、その間にアタシがアリシアの蘇生をするという寸法だ

個人的には自分の技術を管理局の人間に見られるのは凄まじく不安なんだけど……………ってリンディの目的の一つはアタシの技術力の確認か

「さてと、身体（ハード）の調整はこんなもんかな？ 脳のダメになってる部分の機械化は完了してるし……………後は送受信のアンテナ何処に付けるかだよなあ」

余談であるが、藍の本体はこの研究所のPCだ。と言うのも、数時間に一回記憶と人格データの送受信を行って、その全ての記憶を溜め込んでるPCがあるのである

そうしないと人間サイズのHDDではすぐに容量の限界がきてしまう。ビデオカメラだって録画しっぱなしだったらすぐにテープが切れるだろう？ それと同じ。まあ10年年程度だったらなんの問題もないのだが……………

まあそんな訳で、アリシアの脳は一部機能不全が起きている。それが記憶を司る部分で面倒だからこっちで新しく作っちゃえと思い絶賛改造中なのだ。改造の方法は……………まあかなり猟奇的でグロテスクとだけ言っておこう

「アイナ、こっちは完了しましたよー。バグの点検お願いします」

「あいよー」

どうして機械である藍がプログラミングして人間のアタシがデバッグしてるのかツッコみたい所であるが、完全記憶能力があるので適切な役割分担なのだ

膨大な数のシステム言語を薬でドーピングして高速スクロールさせながら見る。本来のアタシの動体視力じゃ全てに目を通すのに数年はかかってしまうからいちいち薬で強化しなくちゃいけないんだ

スクロール終了まで10分ちよい、頭の中で反芻して確認。もう一度頭から見逃しが無いか確認

「ん、大丈夫だったぜ。じゃあアタシは速攻でアンテナ作ってくるから、藍は最終チェックお願い」

「解りました。チェック項目はいつもの通りで？」

「+プレシアのご機嫌取り。このままだったら殺されかねない」

まあ、目の前で娘の身体を弄くり回されたらねえ……。ああそ  
うだ、プレシアの病気は完治したぜ。確かに面倒な肺の病だったが、アタシにかかればどうって事は無い。そしてその際になのはが「アイナさんの発明って役に立つんですね!!」って邪気の無い笑顔で言ってきた時はどうしてやるうかと思っただね。後ろで爆笑していた藍は蹴り飛ばしたけど（アタシの足が痛かった……）

「さて、フェイト。本当にいいんだな？」

「……………今更聞かないで。私もお姉ちゃんが生き返ったら嬉しいし、母さんも嬉しい。そして母さんが嬉しいなら私はもっと嬉しい。それはきつと、いい事なんだよ」

「フェイト……………」

そんな健気可愛いフェイトの後ろから、プレシアは抱きついた

「か、母さん……………?」

「本当に、本当にあなたには辛い思いをさせたわ。許して欲しいなんて言えないけれど、それでも私は……………」

「大丈夫だよ、母さん」

フェイトはそう言って、プレシアの手を抱く

「私は今、幸せなんだよ。母さんが笑ってくれているのが、本当に幸せなんだ。だからもう謝らないで。私は母さんが私にそうやって微笑んでくれるなら満足なんだから」

「フェイト……………ッ!!」

感極まったプレシアはそのまま泣き出しそんな表情になる。ムカつくからその背中をフェイトごと蹴り飛ばした

「テメエら家でやれ!! 見てて恥ずかし……………」

「アイナさん〜。今、とってもいい所だったのに何で邪魔するのかな〜?」

ゴゴゴなんて効果音と共にレイジングハートを構えたのはが後ろに立っていた。しかもチャージ完了の撃つ準備万端状態で

「……………なのはさん。どうか矛を収めてはくれませんか? アタクシはただこのシリアスな空気に耐えきれなくなっただけなんです」

「だからって普通邪魔する？　せつかくフェイトちゃんのがんばりを認めて貰える最高のシーンだったのになんでアイナさんはそうなの？　ホントに、少し頭冷やした方がいいよね」

「その台詞はいろいろ間違ってる気がする!!」

そしてアタシの絶体絶命のピンチを気にせずイチャコラするプレシアとフェイト。ってもういいじゃん!!　なのはさん、またあいつら始めてますよ!!

「じゃあ来世でね。アイナさん」

「死亡前提!?　助け…!」

レイジングハートの電子声。目の前に桜色の閃光。ああ、これは死ぬなって漠然と思いつながら吹き飛ばされる

「ほんと、アレがあの時あんなに凄まじかったアイナさんとは思えないわねえ。本当にただのギャグ要因じゃない」

リンディのそんな声が最後に聞こえて来た

さて、アタシの身体と数億円もする機材に研究成果が吹き飛ばされた所で元の話

藍が帰って来て、チェック項目は全てクリア。後はエンターキーを

押せば理論上はアリシアが生き返る所まで漕ぎ着けた

「じゃあプレシア。アタシが押すのも筋違いだと思っから押しちゃって」

「えらく軽く言っつわね……。フェイト」

アタシがPCをプレシアに受け渡し、その後ろに立った時、プレシアがフェイトに声をかける

「……………ありがとう。あなたがいてくれてよかったわ」

「母……………やっ」

見るとフェイトは泣いていた。アルフも『よかったねえ、フェイトオ』なんていいながら涙を流している。なのはやユーノももらい泣きだ

それを見て、少しだけ暗い気持ちに成る。アタシのナナカはもう絶対に生き返らないのに……………何をハッピーエンドみたいな顔をしてるんだって叫びたくなる

そう、アタシはアルハザードであった事を皆に一切話していない。だからプレシアだけがアルハザードからアリシアの魂を持ち帰った。そんな感じになっているのだ。言わなかった事に理由は無、ただナナカだったら言わないだろうななんて思っただけ。それに言った所でどうしようと言っのだから。何も変わらない、何も変えられない自分の無力に再び打ちのめされるだけだ

「じゃあ、いくわ」

そっ言っプレシアがエンターキーを押す

一部を機械化したアリシアの身体に膨大な数のデータが流れ込み、

インストールする。手術台の上に乗ったアリシアの身体はビクンと数回震え、そして動かなくなった

「あ……………」

そしてゆっくりと、本当にゆっくりと目を開く。その目を開くだけで数分、次は指が動く、頭、足、呼吸する為に胸が上下に動き出す。そして最後にこっちを向いて

「おかあ……………さん？」

そう言った

そこからはもうめちゃくちゃだった。抱きついて離れないプレシアを無理矢理引きはがし、アタシとしては藍と言う前例があるので慎重かつ入念に検査して、この子がプレシアの娘のアリシアと言う事が確定させた

もちろんアリシアの記憶を持った別人の可能性もあるにはあるが、フェイトと藍が『ない』と言っていたのでひとまず信じておこう。それにアタシの検査にも違和感はなかったし、実際にアリシアに会った事のある唯一の人物であり親のプレシアがアリシアと認めた。今後の経過もあるだろうが、とりあえずは問題ないだろう

しかしまあ課題もある。当然の事だが機械は成長しない。そしてアリシアの身体に合わせて作った臓器は数年おきに交換しなければ成らない。さらに定期検診も必要だ。ただでさえ一度死んだ肉体を使つての蘇生、しかもいろいろアタシがいじくってる。短期間であれば普通の人間より無茶は効くが、長期間の運用には常の検査が必要だ。できれば三日に一度、最低でも数週間に一回は検査をしなければどんな障害が出るか解らない。藍でさえ未だに月ごとの検査は欠かした事はないのだから

まあその事は置いておこう。今、そんな話をするのは完全に野暮つて物だ。皆幸せで、笑顔で、それでいい。相坂アイナはクールに去るぜ、なんてな

外でポケットからロケットを取り出す。中にはアタシとナナカが写った写真

「ほんと、なんだかなあ。成功したって保証はないのにあの騒ぎよう。どうしたもんかねえ」

ため息一つとぼやきを少し。そしてアタシの心は………余りにも殺風景だった。アルハザードから帰って来てから、どうにもアタシは完全に壊れてしまったらしい。きつと涙が出るだろうなんて思っていたのに、乾いてしまったてどうしようもなかった。ナナカを2度も殺した罪悪感でどうしようもなくなるだろうと思っていたのに大した事なかった

アタシはきつと壊れてしまったのだろう。あんなにも大事だったナナカとの思い出がが

今はもう、ちゃんと思い出せないでいた

おかしいよなあ。一度見た事聞いた事は絶対に忘れないはずなのに………あんなに好きだったナナカの事を、ちゃんと思い出せなくなっているんだ

ナナカの顔が、こつこつやって写真を見ないと思いでせない。ナナカの

声が、藍のを聞くまで思い出せない。ナナカとの思い出だけが、薄れているのだ

ああ……………きつとこれは、アルハザードの後遺症。アタシがナナカの事を否定したから、あの願いを叶える世界はナナカの願いを叶えたんだ。本当に、嫌になる

そう思って、ポケットから近代的な注射器を取り出した。中の薬品は毒薬。アタシの体質に合わせて作った、アタシの為の、アタシを殺す為だけの毒薬。他の人間に注射しても何の効果もない薬品だが、アタシの体内に入った時だけ劇薬となる。なんの苦しみもなく、ただ眠る様に息絶える薬。藍が藍になった日に作って、今の今まで密閉保存して持ち歩いてきた薬だ

「じゃあ、今いくよ。ナナカ」

どうせ会えないって解ってるのにそんな事を言った。アタシは自分で思ってるより形式を大事にする人間らしい

アリシアの整備は藍に任せておけば大丈夫。他のアタシがいなくなつて困る問題は全て処理済み。もう、アタシがここにいる意味は……………ない

始めからこうしていればよかったんだ。ナナカを殺した日にこうやっておけばよかったんだ

アタシは何の躊躇もなく針を首筋に近づけて行く

藍が本当の意味で生まれた日、生きていいかななんて思った。何度も何度も絶望した人生だけど、もう一度頑張ってみようかななんて思った。だから今まで頑張つて来た。今まで通り絶望しながら

針を首筋に突き立てた

でも、もういい。最後の最後に待っていたのがナナカの裏切りだ。もしかしたらあの子がアタシに忘れさせたのかもなんて思ったたら……もうダメだった。そう、アタシは  
とっくの昔に、生きていたくなんてなくなっているんだ

そして中の薬品を押し込む為に、頭のボタンを押した

アタシの人生に何の意味があったんだろう。その答えは結局解らない

でも、たった一つだけ解る事がある。私が生まれて死ぬ事に、私は何の意味も見出していない事だ

記憶の中のナナカを思い出す事はもうない

b a d e n d

## epilogue 2

### epilogue 2

「じゃあ、今いくよ。ナナカ」

どうせ会えないって解ってるのにそんな事を言った。アタシは自分で思ってるより形式を大事にする人間らしい

アリシアの整備は藍に任せておけば大丈夫。他のアタシがいなくなつて困る問題は全て処理済み。もう、アタシがここにいる意味はない

始めからこうしていればよかったんだ。ナナカを殺した日にこうやっておけばよかったんだ

アタシは何の躊躇もなく針を首筋に近づけて行く

藍が本当の意味で生まれた日、生きていいかななんて思った。何度も何度も絶望した人生だけど、もう一度頑張ってみようかななんて思った。だから今まで頑張つて来た。今まで通り絶望しながら

針を首筋に突き立てた

でも、もういい。最後の最後に待っていたのがナナカの裏切りだ。もしかしたらあの子がアタシに忘れさせたのかもなんて思ったら

もうダメだった。そう、アタシは

とつくの昔に、生きていたくなくてなくなっているんだ

そして中の薬品を押し込む為に、頭のボタンを……

カタカタ、カタカタ

押せなかった、全身が、氷水に浸かった様に震えだしたからだ

指が震える。身体が震える。心の中に感じた事のない感情が生まれてくる。

「なんだ、これ」

自分が自分で制御出来ない。そんな事始めてだった

「あ、……………はぁ!! ああああ!!」

自分の中に突然生まれた感情に、叫び声をあげずにいられなかった。そしてそのままその感情に従って注射針を引っこ抜く。ほんの少し血が飛び散り、注射針は中の液体を完全に残したままだ  
ありえない、ありえない!! そんな思いが自分の中を駆け巡る。なんだこれは……………まさか、これって恐……………怖?

「アイナさん!!」

全身からとんでもない量の汗を噴き出させながら、声が聞こえて来た方に振り返る。そこには

「なのは……………か」

「アイナさん。何をしようとしていたんですか?」

高町なのはが、そこにいた

自分の中に生まれた感情を無理矢理制御して、いつも通りのヘラヘラした笑顔を浮かべ、言う

「なごって……………中和薬よ。今回の戦いでいろいろ無茶したからねえ。治そうと思ったならば早く投薬続けなくちゃいけないのよ」

なのはは少しだけ目を閉じて、開いて言葉を発する

「……………嘘、ですよね」

アタシはヘラヘラした笑みをさらに強くして

「嘘じゃないぜ。実際、このまま何の処置もなしだと動脈硬化に脳の肥大化。後はそうだなあ……………目ん玉飛び出るかもしれないぜ、物理的に」

「でも……………今、打とうとした薬はそうじゃないはずですよ」

あは、と声が出た

「なんでそう思う？ 根拠は？」

「帰って来てから様子がおかしかったから」



「なのは……。アタシが生まれてからずっと地獄にいたんだ。自分以外に……。うづん自分さえも信じれないって地獄に。全員が敵で、それでも救われなくて、信じたくて、そんな時にナナカが現れた。その時にアタシは救われて、その時の幸せな記憶があつて、それを大事にして、やっと生きて来れたんだ……。でもさ」

ヘラヘラ笑つて、今に至つても出ない涙に死にたくなりながら

「でもさ、それももう……。なくなっちゃった。もう、アタシの幸せ、全部なくなっちゃったんだぜ。それも、ナナカに消される形で」

ナナカはジュエルシートと直結していた。それはつまり、操作も出来るんじゃないかなんて想像。もちろん根拠はないし理由も思いつかない

いや、もしかしたら……。アタシはナナカに本当は嫌われていたのかもしれない。だから嫌いなアタシの記憶を消したんじゃないかなんて思う。解つてる、そんなの根拠もない妄想だつて、解つてるでも……。もしそうなら、アタシはもう生きて行けない。生きて行けない、はずなんだ

「もうさ、どうでもよくなつてしまつてさ。もしかしたらナナカに嫌われていたかもしれないなんて想像を抱いた時点でもう……。ダメなんだ。それに、アタシの事を嫌つてなかったら記憶をいじつたりしないはずだよ。ああ解つてるよ……。全部アタシの妄想だつて事くらい解つてるさ。でも、もうナナカはいないから……。あの子の真意なんて解らない……。私は、ナナカに愛されてたのかなあ？」

アタシにとって、ナナカと言う存在は余りにも大きい。いなくなれば死にたくなるくらい。そのナナカがあっさり死んで、そして今、その記憶さえもなくなりつつある。昔っから、生きる事に執着はなかったけれど、もはや生きる事は出来ない

そのはずなんだ

なのにこの身体の震えはなんだ？ まさかアタシが、死ぬのを怖がってるなんて言うのか？ そんな馬鹿な。親友を二度も殺して、生きる意味をなくして、なのにどうして生なんかに執着する？ ああそつだ。やっぱりアタシは生きる事に意味なんか求めていない。ではなんで身体は震える？ 心は恐怖する？ このアタシが死にたくないなんて原始的な理由で恐怖を……………

「うん、ナナカさんはアイナさんを好きだったはずだよ」

その言葉で、ループしかかっていた思考は現実に戻された。

そして、なのはの言葉に、次第に驚愕する。この子は一体なんて言った？ なんて、この子がナナカの気持ちを代返なんて出来るんだ。恐怖とは別の感情で身体を震わせながら、しかし冷静なのはに  
言う

「言い切ったね……………根拠はなに？」

「ないよ」

ビキリッと頭の隅で音がする

「ふざけるな。じゃあ何でアタシの記憶を消す？ もつアタシはナナ

力の為に涙さえ流せないんだぜ？　そんであの馬鹿、こともあろうにまた幸せになりやがれなんて言いやがった。アタシは……………!!」

「ねえ、アイナさん。少しでいいから、黙って私の話を聞いてくれないかなあ？」

なのはは、笑っていた。こっちを見て、優しい笑みを浮かべていた

「アイナさんはずっとずっと、寂しかったんだよね」

……………今更、だ

「私ね、少しでけど寂しいって気持ち、解るの。最近まで家でひとりぼっちでいる事も珍しくなかったから。もちろんアイナさんみたいに死別したって訳じゃないけどね」

知ってる。士郎さんの過去や高町家の事情も多少は知ってる

「あのね、アイナさん。私、すっごく怒ってるんだ」

「えっ？」

予想外の言葉に、間の抜けた声が出た。怒ってる？　何で？

「……………本当に気付いてないんだね。うんじゃあとりあえず」

ゴロンッ

気付いた時には仰向けになっていた。ああそっぴやなのはって実は剣道齧ってるんだっけって思い出した

「っテメエ!! なにすんじゃーゴフツ!!」

「今のはフェイトちゃんのだよ!! ちなみにさっきのはユーノ君の  
「!!」

凄まじい、少なくとも小学生の拳でない一撃が今度は顔面に直撃する

「これはアルフさんの、これは私の分!! そしてこれが……………」

延髄に肘を喰らって、腹に蹴り。そしておもつきり吹っ飛んだ

「長い間ずっとずーずーと一緒だったのに、未だに寂しいなんて言われる、藍さんの分だ……………」!!」

いつの間に取り出したのだろう、レイジングハートを構え攻撃モーション。そして本日二度目の桜色の閃光がアタシを貫いた

全身を焼かれながら、うつ伏せで倒れるアタシ。つーかマジで死ぬ

「どっ? 少しは頭冷えた?」

「あのですね、なのはさん。その何かと暴力に訴えかけるスタンスはよろしくないと思っんですよ。アタクシ」

「『かボ』こられた理由にも納得いかない。何故にここまでされにゃならん」

「……………アイナさん。私たちの気持ち、特に藍さんの気持ちって考えた事ある？」

「藍に関してはなのは達に何かを言われる筋合いはないけど……………。そっだな、ないな」

「寂しさや辛さって、分ち合えば薄らぐんだよ」

「そいつは知らなかったな」

「それでね、分ち合ってもらえない方は……………辛いんだよ」

「これは私も最近知ったんだだけのね。そっなのはは続けた

「そいつも……………知らなかったな」

「この子は本当に、ナナカに似ていると。そう思ったこんな風にむちゃくちゃに、無理やり人の心をこじ開けて、ズカズカと土足で踏み入って来る所が

「ねえ。アイナさん。もう一つ、アイナさんが言っていた事への勝手な想像。言っただい？」

「……………」

言葉は発せなかった。代わりにコクんと頭を小さく振る

「さっきアイナさんが、『アタシはナナカに愛されてなかった』なんて

言っていたけど、私はやっぱり当然愛されていたって答えるよ。さつきは根拠なんてないって言ったけど予想はあるから

私だったら大切な人には忘れて欲しくないって思う。でも自分が死んで、それで私の大切な人がそれに囚われる様ないき糧をするなら………きつと私は自分のことを忘れて欲しいと思うよ」

私は、黙ってなのはの言葉に聞き入っていいいた

「そう思っていたナナカさんは、チャンスに恵まれた。そして自分に囚われる生き方をしているアイナさんを見て、自分の事を忘れて幸せになって欲しいと思った………どっかな？」

「………は。根拠なんて何一つないな」

「そうだね、だからこれは私の想像。でも、きつと当たらずとも遠からずだと思つよ」

いつのまにか、涙は出ていた

思い出していたのだ。もはや思い出せなくなってしまったナナカとの思い出を

『ねえアイナ、私たちはお互いを信じ合おうよ。信じるって言うのは言葉だけじゃない。心を信じるんだ。だからもし、私がここにいないくても、私の思いを汲み取ってね』

『はっ!! そうだな、アンタが明日家族と旅行に行ってる間、アンタの分の給食プリンはしっかり食っておいてやるぜ』

『鬼!!』

その会話はくだらないものだったけど、でもあの子は確かに言って

いたんだ。信じてって。アタシは、ナナカを信じてなかったのか？  
そしてやっと気付いた。自分の手の震えの意味を。恐怖の意味を。  
アタシは、ナナカを裏切るのが怖かったんだ

「……………は、はは。じゃああなたにか？  
アタシはあの子の思いを何一つ理解せず、それで勝手に死のうとして  
たと……………？ はは、まあそれは

縋り付きたくなる様な、そう信じたくなる様な……………悪くない  
想像だよな……………」

「アイナさん、貴女は寂しいって言った。でも、その寂しさは他の友達  
が埋めてくれるよ」

「と、もだ、ちっ…」

「うん、私と、フェイトちゃん。ユーノ君にアルフさん。クロノ君もそ  
うだしリンディさん。それにプレシアさんもそうだね。私が知って  
るだけでもこれだけでも友達がいるんだ。アイナさんの寂しさを、ほん  
の少しでも私たちは癒せるんだよ」

ああ、友達……………か。そうか、そうだった。アタシが欲しかった  
のは……………」

いつの間にか、みんなが集まっていた。皆が皆、アタシに不満げな  
顔を向けている。その意味を、なのはに言われてやっと理解していた

「ああ、そうだな。ごめんな、皆。そして……………あり

がと  
「

それだけ言ったら自然に涙が出た。今は泣こうと、そう素直に思えた。皆の前でみっともないとかそんな思いもなく、ただ泣いた

どっかの誰かの言葉を借りるなら、この世界はこんなはずじゃなかった事ばかりだ。アタシの一番大事な親友は簡単に死んでしまおうし、変な世界に飛ばされてもう一度殺すはめになる。でも、今更ながらに気付いたのは自分が一人じゃないって事だ。もちろん、ナナカがいなくなって寂しいし、未だに死にたくなる時はある。一人で枕を濡らすし、なんでもないってごまかしたりもする。しかし本当にどうしようもなくなった時に、傍にいてくれる人が出来た。それはなんと言うか、幸せな事なのだろう。それを藍に言ったら『今更ですか』なんて怒られた

だからアタシは生きて行ける。

泥だらけになりながら、相変わらず世界なんてくそつたれだなんて

言いながら、生きていく

T  
r  
u  
t  
h  
  
e  
n  
d

## 後日談と言つか才子

月曜日。1週間が始まる悪夢の日だ。行く必要のない学校に行かされ、自分より無能な教師に幼稚園で覚えた事を習う場所、今からそこに向かう

それを嫌がってベッドにしがみつき、藍の鉄拳で叩き起こされ学校に向かう。そんないつもの月曜日だ

しかし今回は少し違う。学校に向かうアタシの隣に長い金髪をリボンで束ねたかわいらしいが少し背の低いフェイトにそっくりの少女が隣にいた

「どつらん、アイナ？ 制服似合ってる？」

「はい、とても良く似合ってますよ」

「ん、まあ悪くないんじゃないか？」

アリシア テスタロッサちゃんです。はい拍手！。そして回想！

これはあのアタシの自殺未遂の後の事だ。全員から一発ずつ拳骨を喰らって(なのはに殴られたから勘弁してくれって言ったのに聞いてもらえなかった)どんちゃん騒ぎも再会。飲んで食って、なのはの

なんかとんでもなく巧い歌を聴いて、まあもうお開きかなあって所でリンデイが口を開いた

「さて、この騒ぎも収まって来た所で私の来た目的を話そうかしら。私は貴女達がこれからどうするつもりか聞きに来たの」

まあ当然の疑問だよねえ。アリシアを生き返らしてはいおしまいつて訳には当然いかない。むしろ大変なのはこれからだ

ジュエルシードと言うロストロギア、それを収集するのも管理局の仕事だ。しかし回収されてしまえばアリシアの魂も終わり、もう一度死ぬ。まあそんなのをこの場にいる全員が許すはずもない。だから聞いているのだ、『どっするっ?』と

「つーかアタシは管理局がどう言うスタンスで行く気なのかが気になってしょうがないぜ。アリシアを殺してでもジュエルシードを回収する気なのか、それとも放置してくれるのか、はたまた他の策を提示してくれるのか」

実際のところ、アタシは管理局と言う組織をよく知らない。大量にある世界を束ねる政府機関みたいな組織と認識しているが、その程度なのだ。さらに言うと、アタシはその手の組織は基本的に信頼しない事になっている。というか50人を超える組織は、絶対に一枚岩にならないから行動を読むのがめんどくさい、だから出来るだけ関わりない

「………とりあえずの前提だけど、アリシアさんを再び殺してまで管理局はロストロギア回収は行いません。しかし、アリシアさんは自身の身体にジュエルシードを宿し、しかも常時発動してる状態です。当然野放しには出来ません

しかしこちらとしてはアリシアさんに罪はなく、人並みの生活を送ってもらいたいと思っています」

「それって管理局の結論？ それともリンディの独断？」

アタシは口を開く。歯に衣着せる？ なにそれ、美味しいの？

「管理局員としての判断です。こちらとしてはフェイトさんとプレシアの裁判の為にミッドに連れて行くとき、一緒にアリシアさんも来てくれればと思っっているのですが……………」

「あー。そりゃ無理だぜ」

アリシアはまだ目覚めたばかり。しばらくはこの研究所の外に出る事さえアタシ的には許可出来ない。まだまだしなくちゃいけない検査もまだある。ジュエルシードの状態がアタシの科学とキチンと噛み合ってるか経過を見なくちゃいけない

まあそんな事を専門用語を上げながら、解りやすく、説明すると

……………

「あ、ありがと、アイナさん。もういいわ。少し頭が痛くなって来た

……………」

「か、母さん。今の話理解出来た？」

「え、ええ、少しだけ」

「あつー、アイナさん。日本語喋ってー」

「うんかった

「全く、この馬鹿主人め……………。アリシア様はしばらくはここから動かさせません。100%の安全が確認できるのにはまだしばらくかかります」

藍のあきれた様な仕草と解説。……………そんなに解りにくかったかなあ？

「そう……………だからといってこのままにしておく訳にもいかないし、明日にはミッドに護送しなくちゃだし……………」

「まあ選択肢なんてあつてない様な物だぜ。しばらくは家で預かるからその間に裁判だかなんだかを終わらせて来て。監視はしょうがないからいてもいいよ」

「……………あのねえアイナさん。解つてると思いますが貴女も連行ですからね」

……………はい？

「当然です。アースラへの攻撃や敵対行為。公務執行妨害の罪で禁固10年は固いわね」

「いやいやいや、アタシって確かに暴走したけどそれなりに役に立つたぜ。それを加味してくれたら嬉しいなーなんて」

「アイナ様、綺麗な身体になって帰って来てください」

「アイナさん。10年は長いけど頑張つてね」

「アイナ……………。私待つてるから」

「テメエらぶざけんな!! つーかアタシを捕まえられると思つてんの

か!? その気になれば全世界を相手に喧嘩出来るアタシを!!」

実際、斬城が一つあればこの世界の全ての連合軍だろうと余裕で手に出来る。まあプレシリアレベルの魔導士が数人がかりで来られたら無理です。あの馬鹿出力を本当に人間が出してると思うと頭が痛くなる

「当然、思っていないわ」

こうなったら徹底抗戦も辞さないぜって感じで斬城（また作つた。7兆円）を装備して、藍に『こんな所で戦争でもしてかすつもりですか、この弩バカ様』と言われながらの音波攻撃に悶えてると、リンデイが余りにも予想外の事を言って来た

「正直に言つて、アイナさんを捕らえるにはアースラの戦力では足りません。本部から応援の要請しても魔力の痕跡を消せるアイナさんには隠れてしまえば問題なく、しかもこちらの次元航行の技術もかなり漏洩してしまってます

まあその他諸々を踏まえた上で、貴女を捕らえるのは、割に合わない」と判断しました」

「.....まあ、この国の政府にその事を解らせるのに3年もかかった事を考えれば、管理局ってのは優秀なのかねえ」

アタシの技術力は知る人ぞ知る秘密だ。アタシ自身も出来る事ならバレたくないし、面倒ごとはごめんだ。しかし、知る人ぞ知ると言う事は知っている人は知っていると云う事だ。そして当然利用しようとするもの、ゴマをすって甘い汁を啜ろうとするもの、その他諸々を全て叩き潰し、あれを相手にするのは、割に合わない」と思わせるのに3年もの月日がかかった

「そこで提案なのですが……………アイナさん。貴女、管理局に入りませんか？ そつすれば保護観察と言つ形で……………」

「却下!!」

アタシは即答した

何故にわざわざそんなめんどくさそうな組織に入らなくちゃいけないのか。つーかそつというのが嫌でアタシは1人で研究を続けていくってのに

「まあそつよねえ……………じゃあ提案その2。一部の研究成果を管理局に渡す事」

「やだ!!」

またも即答です

ぶつちゃけそれはこの世界でもバラ売りという形でやってるからどっちでもいいけど、なんか勢いで

ズガンッ

頭に鋼鉄の拳（比喻にあらず）が突き刺さった

「なにすんじゃ!! この全身凶器のロボ子!! テメーに殴られたら普通に死ねるってなんかいいつたら解るんじゃボケ!!」

「あなた様が余りにもヴァカだからつい手が出てしまつんです!! 私は悪くない!!」

「帰れ裸エプロン先輩!!」

本当にこの馬鹿をバラしてスクラップにしてやる!! そう思い、斬城を構えた所で顔面に鋼鉄の(やっぱり比喻にあらず)踵が直撃した

「……………死ぬ」

「リンディさん。後者の方でお願いします。というかアイナ様が組織勤めなんて出来るはずがありません」

「アタシを無視して話進めたあげくに暴言!!? アンタ、いい加減にしないとアタシでも怒るよ!!」

「知るかヴァカ」

もはやメイドの言葉ではない。若干絶望しながらもういいやと嘯いて

「じゃあリンディ、とりあえずこれ。普通にアースラで見れるデータ。重力操作の基本理論が入ってるから勝手に見といて」

「あら、結構素直じゃない」

「まあその気になればそっちでも作れるだろう技術だしね。魔法の理論はまだ5〜6割程度しか解ってないけど、でもまあ重力操作くらいはあるでしょ」

「斬城、くれないかしら?」

「それは本当に無理。これは一つで世界を滅ぼしかねないから」

そんな物を個人レベルで所持しないで欲しいんだけどねえ、とリンディは続けた。まあ今更だろう

どうにもアタシの技術はレアスキルとやらの扱いになるらしい  
そしてロストロギア保持者であるアリシアとレアスキル保持者であるアタシ、2人は管理局の監視が付く事を条件に、地球に留まる事を許されたのだった

して現在、フェイトとプレシアが裁判でミッド……………まあ魔法の国の首都だかなんだかに行ってる間、アリシアちゃんは家で預かる事になったのでした

アタシと藍は無罪放免……………とは行かず保護観察処分。まあやった事に比べれば大した罰じゃないだろう

……………ぶっちゃけ。管理局の監視くらい逃れる方法くらい、いくらでも思いつくけど

そして監視と言うのはあるう事かなのはの事だった。なんでも将来は魔導士の道を漠然と考えているらしく、じゃあ囑託魔導士としてしばらく体験で仕事をする事になったらしい

まあなのは相手じゃアタシは直接排除って手段がとれないから、人選は間違っでないんだろうが……………。すこしリンディの後ろに狸の陰が見えた

「ってアタシも行くフリしないと……………」

「ラン、アイナが学校またサボる気だよー」

藍に聞こえない様に小声で呟いたのに隣にいたアリシアちゃんにはしっかりと聞かれてた

「ちょ、おま!!」

「アイナ様ー。殺すぞ」

もはや「の子が何処に向かっているか解らない

「まあそれはいいとして……。アリシアちゃん、今日が初登校だろ？ 9歳相当の知識はダウンロードしておいてやったけど……」

「大丈夫だって!! アイナもランもちゃんとこの世界のルールを教えしてくれたし、学校に行ったらなのはちゃんもいるし、アリサちゃんやすずかちゃんを紹介してもらっただから」

うわあ。やっぱりなんか眩しいなあこの子。アタシの周りにはいなかったキャラクターだなあ。徹夜明けのこの身体にはキツイぜ

「じゃあ藍。いつも通り留守は頼むぜ、晩飯はカレーな」

「あ、私もカレー食べたい!!」

「ええ、ではその様に。」

「こっぴつこっぴつ」

「行ってきますす!!」